基の地を回復して巡禮者の安全を計らんとの企てから起こされた十字軍も丁度この當時であつた（一〇九六―一二九二）彼のハインリッヒ四世は獨乙皇帝の尊を以てして尚ほグレゴリウス七世法王と爭ひを釀しましたときは、遂いに敗北して三日三夜自ら雪中に佇立して法王にその罪を謝したと云ふ有樣になりました、又た如何に法王の權力が強かつたかと云ふことが分かりましやう、この事實から見ても法王權は遠く皇帝の上に及んでをつたと云ふことが知れるのである、然しながら盛者必衰といふことは世の常であるからして、さしもえらかりし法王權も、時節來れば遂に衰頽の兆しを呈することを免がれないので、法王クレメンス五世は佛國と爭を釀した結果、遂に捕はれて佛の南方アヴニョンの地に遷さるゝと云ふ所謂法王のバビロニア囚虜（一三〇九―一三七九）と云ふ樣な椿事も出來ました、殊にレオ十世法王に至つては羅馬の聖ピーター寺建立の勸財募集として、デッツェルと云ふ使僧を獨逸地方に派遣して、荐に免罪符を賣り歩るかせて、獨逸の金を羅馬に卷き上げると云ふ有樣で、地獄の沙汰も金次第、ゴットも金で光る世の中と云ふ溷季のありさまになつて來たからたまらない、マルチン、ルーテルは最早默つてをる譯に行かず獨逸國民の國家的經濟的精神と相待つて羅馬に抗じ、ルーテルは宗教上の熱誠能く、遂に法王の頭上に一大鐵槌を下だし、宗教改革の新旗幟を翻へす樣になつたのである。

羅馬教會が追々盛大になつて來て、愈、信仰上政治上の主權を掌握し、法王の座下には帝王も平身低頭すること、恰も豺狼に對する羊子の如く、猫に向つた鼠の如しと云ふ有樣になつて來て、所謂教會全盛時代と云ふ時代を造り出さんとする樣になりましてからは、教會は又世間の學問をも自己の掌中に取り入れて、出世間的宗教の立脚地から、自己の教義に都合の善い樣、宗教の配下に哲學を使役したいと云ふ了見を起す樣になりました、今この必要に迫れて起つて來た所の學問をスコラ哲學若くは教士哲學と云ひ、その哲學を取り扱ふ人を教士と呼んで響者の教父に相對せしめてをるのであります、畢竟スコラ哲學は是れ迄の教父たちが種々の宗教會議を開いてきめた教會の教義は、千歳不磨の眞理であると云ふことを、初めつから認容してをるので、偖てその上でその千歳不磨の眞理を以てをる教會の信仰が、決して世間の知識道理に矛盾するものでないと云ふことを說明しやうと云ふのである、神が人となつたと云ふ信仰は、千歳不磨の眞理で萬古動かす可ちざる眞理に相違ないが、それが何ぜ眞理であるか、神はなぜ人となつて現れたかと云ふことを證明しやうと云ふのが、スコラ哲學の役である、教會の信仰と世間の理屈とが別れ〳〵になり、矛盾撞着するものではなくつて、此兩者は全く一致に歸するものであることを證明しやうとするのが教士哲學の天職である、こゝがスコラ哲學と教父哲學との違ひの存する所である、教父哲學では教父テルツリアヌス（一六〇―二二

○の云つた通り、世間の俗知識は教會の眞信仰とは矛盾撞着するは無論のことである、否な俗世界の道理に矛盾すればこそ、益々基督教の眞信仰の尊い所が分つてそを信ずる必要があると云ふ、然るに教士はさらは云はない、則基督教の眞信仰と世間の道理學問とは、決して矛盾するものでない、世間の眞理を推し究めてその深奥なる底を叩けば、それは基督教の眞信仰と全く致を一にしてをることを悟るであらう、信仰と知識が矛盾衝突する樣に見えるのは、それは全く皮想のこと表面上のことで、內實はさうでない、それは畢竟まだ人知の足らないからのことである、人知さへ進めば知識は遂に基督教の信仰と一致する時あるに至るのであると、かう云ひますのがスコラ哲學であります、教士アンセルムス（一〇三三―一一〇九）は實に之れを明言してをります、今この教會の信仰を千歲不磨の眞理と奉じて、その眞理なる所以を說明する役に立ちましたのが、スコラ哲學であります、スコラ哲學は取りも直ほさず、教會の御用哲學であります、教會の信仰は主人公であるとすれば、スコラ哲學はその奴婢に等しきものであります。

中世の基督教々會は、かう云ふ御用哲學を側にひかへ込んで、學問を監督することゝなり、さうして一方では信仰上は無論のこと、政治上にも法王は宛然僧形の一大諸侯と云ふ有樣でありました、それであります、教會の御用哲學である、スコラ哲學と教會の運命とは、密接の關係を以て進退消長して參つてをります、則ちスコラ哲學の盛んになりましたときは、教會の全盛時代でスコラ哲學の衰へたときは法王權の漸く衰微に傾きかゝつた時であります、スコラ哲學はアンセルムス（一〇三三―一一〇九）に初まつて、トーマス、アクイナス（一二二五―一二七四）ヅンス、スコツス（一二七四―一三〇八）に至つてその全盛を極め、キルリアム、オッカム（一三四七歿）に至つて漸く衰頹に傾いたのである、さうして之れは羅馬教會がグレゴリウス七世（一〇七三―一〇八五）法王にその全盛の基礎を創め、インノケンチウス三世（一一九八―一二一六）法王の時にその極點に達し、ボニフアキウス八世（一二九四―一三〇三）法王からして次第に衰運の域に向ひ、遂にクレメンス五世の時には法王のバビロニア囚虜（一三四二―一三五二）と云ふ非運に逢ふ樣になつたのと、恰もその時代の趨勢を一にしてるのであります。

スコラ哲學は教會の御用哲學であつて、その目的は一に基督教の信仰を道理に照らして說明しやうとするに在るのでありますから、教士輩は大に希臘哲學の武器を藉り來つて、それを利用しました、プラトーンやアリストテレースの哲學は、此に有り難く教會の御用哲學の役前を勤めたのである、然しスコラ哲學はその目的元來基督教の信仰を道理に照してうまく說明し、それが前後矛盾のないと云ふことを、明瞭にしやうとのみ努めてをつたのでありますから、勢形式上論理のすぢ道さへ通つてをればそれでよいと云ふことになり、無味乾燥の形式主義に流れてしま

つて、恰も木葉をかむやうな趣きで、ちつとも味がないからしてどうしてもスコラ哲學丈けでは當時の人心に十分な滿足を與へると云ふ譯にはいかなかつた、そこでスコラ哲學と相併んで中世には吾人の道理よりか寧ろ感情を重んじ、教會の聖櫃よりか寧ろ個人の信仰を尊び、理窟をこねまはすよりか寧ろ熱誠ある信念に重きを置き、辨證に由らずして、まつしぐらに秘的直覺に訴ふると云ふ、神秘論者の團躰があらはれた、この中世に於ける神秘論の團躰は、確に乾燥無味なる、彼の形式主義に流れ去つたスコラ哲學の缺點を補つて行つたに相違ありませんけれども、神秘論が秘的感情の直覺と云ふことを重んじまして、知識道理を疎外視しました結果、神秘論は彼の道理を重んじ信仰と知識との一致調和を計ることを以つて、目的と致たしてをりましたスコラ哲學の一大障礙となつたと云ふことも亦た事實であります、そこて遂に神秘論は、彼のスコラ哲學自身の中に發して、遂に伺ひ犬に手をかまれた樣に、スコラ哲學の瓦解を致し來らしめました所の、オッカム一流の唯名論（拙譯哲學史一八一頁）や、當時漸く復興して來た自然科學の研究と、相共に手を携へまして、スコラ哲學の亡滅を促がす原因となり、さうしてまたルーテルの神秘思想に影響して、遂に宗教改革の導火線を導びく樣になつたのであります。（以上の基督教々會の發達及びその教理が哲學と相關係して變遷して行く有樣の、尙ほ一層詳細なるのを知りたいと思ふ人は、クーノー、フィッシアーの原著にかゝる拙譯哲學史要第二編第三編を御一讀願いたい）。

以上段々説明して來ました通り、之れを政治の方面から云ふも、學問の方面から考ふるも、信仰の方面から察するも、今や到底羅馬舊教は時勢に適さない樣に腐敗し、且つ老いぼれてしまつたのであるから、こゝに宗教改革と云ふことが、眼前焦眉の急と云ふ樣になつて來たのである、そこで羅馬教の外形的虛式や、煩瑣なる理論の末に拘泥する主理主義を排斥して、熱誠ある信仰を主張し、道德の重んず可きことを說いて羅馬法王の亂行を難じ、中世紀修道院の禁欲的出世間的道德を排して世間的倫常を重んじ、常識に違せざる宗教を說かんと試みた者がある、是れ則ちマルチン、ルーテル（一四八八―一五四六）其人である。

抑々宗教改革のことたる決して一朝一夕の事ではなくつてその來る所頗る遠いのである、既に一五一七年にルーテルが奮然蹶起羅馬法王に反對して宗教改革を稱へ、さうして新教を樹立するに至る迄には、その準備として幾多教界の名士が之れが爲めに非業の横死を遂げたか分からないのである、則ちキクリッフ（一三二四―一三八四）の如き、ルーテルに先つて宗教改革を稱へた爲め、コンスタンツの宗教會議はキクリッフを死罪に處じその屍を燒た灰は之れをスキフト川に沈めた位殘酷な目に逢ふたのである、フース（一三六九―一四一五）の如きも亦さうである、彼は宗教改革を稱へた爲め燒き殺されてしまつた、プラーグのジエローム又フースと同一の禍を蒙る樣になつた、尙ほ又キクリッフやフースに先つて羅馬教會の虛

禮虚式に反對し不條理なる教理に抵抗したのは、アルビジエンシスの徒及ワルデンシスの徒であつた、思ふに是れ等の人々が羅馬教會に反對したのは、羅馬教會が使徒以來次第に年所を經るに從つて、希臘の多神教に接觸しては其影響を蒙り、宗教上の儀式に惟れ日も嗜らなかつた羅馬人の間に入り込んでは、又その感化に遭ひ、遂に元來唯一神教であつて唯一上帝の外は拜む可く崇む可き神のなかつた基督教も、次第に其拜崇物の數を增して來て、或は聖母マリアの像を崇拜することゝなり、或は使徒を初め代々の聖徒の像を採つて、皆な之れに禮拜を行ふことゝなり、之れに加ふるに聖徒の遺物を崇拜すること又盛んに流行して來て、丁度佛教徒が釋迦の舍利を尊重すると同じ樣に、耶蘇の殺されたときの磔刑柱の斷片の如きは、無二の寶物となつた、又教主耶蘇の聖墓エルサレムの地を初めとして羅馬の聖ピーター寺の如きは、又當時信者間に於ける屈指の巡禮場となつた、その外香を燒き蠟燭を點じ念珠をつまぐり袈裟を着し、幾多煩瑣的複雜なる儀式が續々湧き出してくる樣になり、元來唯一神教であつた基督教は多神教の形に變じてしまつたのを慨して此擧に及んだのである、また中世紀に於ては又た僧俗の區別を設くること漸く甚しく、僧侶は僧院に隱退して靜座瞑經に餘念なく、少しも世事にたづさはらざるのを以て是れ高しとすると云ふ樣に東洋の宗教に見る禁欲主義の如き風が出來て來て、此に乞丐僧團や僧院修道院なるものが所々に起つて來た、僧院の創設者は三世紀頃に出てたるアントニウスである、之れに繼いでパコミウス氏の如きは、自分の姉妹を以てその監督者に充てゝ、一の尼僧院をも建設された、又六世紀の頃には、ベネヂクト氏以太利に修道院を創めた、然し斯る僧院の乞丐的生活や禁欲主義や聖徒の偶像禮拜や、遺物崇拜に絶對的に反對した人も、四、五世紀の頃に既に存してをつたのであるから、彼のアエリウスやヘルギヂウスやヨヰニアンやギヤランチウス氏の如きは、則ち一切是れ等の舊教の制度儀式に反對して、夙に新教主義を鼓吹してをつたのである、然るに時世はまだ中々早かつたから彼等の主義理想は到底實行さる可くもなかつたので、唯偶々彼れ等は破門罪に處せらるゝが如き奇禍を買ふに終つたのである、それであるからルーテルの宗教改革は、是れ等の多神教的基督教や、煩瑣なる儀式に化石した基督教や、僧院の獨身生活に世間と隔絶したる基督教をして、純淨無垢の基督教となさんとするのである、則ち教理の上に於ては基督教をして純乎たる唯一神教本來の面目を回復し、唯一眞神以外に矢鱈に聖母や聖徒や遺物の崇拜を排擊し、儀式の如きも虚禮に亘らざる樣、成る可く單純なる者となし、徒に自ら高く標榜して僧院内に隔在し、却て濟世利民の實を忘れ、無暗に獨身生活の淨を誇つて世に遠つてをるの非を鳴らし、ルーテル自ら妻を娶つて僧侶に現世的生活の重んず可きことを示したのである、然るに尚ほ是れ等の事を外にして、どうしても宗教上に一大改革を決行せねばならぬ機運に向い

てをると云ふのは、羅馬法王が精神界及政治界の二者に渡つて、無限の權力を掌握して、無限絶對の大君主としても云ふ位置に立つてをると云ふことである、從つて又その結果個人信仰の自由を束縛し、俗權を濫用して政治上の事項にたづさはり、法王の裁判には毫も誤りなしと云ふ如き、無法なる結果に到達し、剩さへルーテルの當時に於ては、羅馬法王より發したる免罪符なるものを、獨乙國内に公然賣買して、獨乙の金錢を羅馬に吸收し去らんとしてをつたから、ルーテルは最早や百万の生靈の爲めに默視するに由なく坐視するに忍びず、とう〳〵宗教改革の義擧を決行する樣になつたのである。

上述の如くルーテルの宗教改革が行はれる樣になつたのは、其由來する所頗る遠いのである、ルーテルの宗教改革なるものは時世の成り行き上、どうしてもやつて來なければならないことになつてをるので、獨り免罪符の賣買を待つて後ち然らざるのである、唯免罪符の賣買の如きは、偶々ルーテルの宗教改革を決行するに機會を與へ、其端緒を開いたと云ふに過ぎんのである、それと云ふは第十四世紀にスコラ哲學亡び、第十五十六の兩世紀は、所謂歐洲に於ける文藝復興、思想革新の時代であつて、有形界無形界に亘り、政治上にも思想上にも、至大なる變化刷新の行はれた時代である、彼の封建制度が破壞して自由市が起り、戰爭術も非常に變つてくると云ふ有樣であるのに、一方では希臘羅馬の古文學研究の再興を初めとして、希伯來文學の新研究より、希臘羅馬の古哲學の新研究あり、更に進んで天文學上に於ては、コペルニクス、ガリライ、ケプレル等の有名なる學匠出て、從來の地心說を一變して太陽中心說を創稱し、地理學上に於ては亞米利加の發見を初めとして、東亞の交通漸く頻頻を致し來り、從來單に歐洲のみを世界全躰と思惟してをつた陋見を一掃し、人をして豁大の氣宇を起さしめ、その外數學上の新發明や、活版印刷術の大發明等がありましたから、當時の思想上に一大變化を起さしむる樣になつたのである、然れば最早や宗教獨り中世の舊弊古習を墨守してをると云ふ譯にいかなくなつたのは自然の道理である、是れキクリツフ（一三二五―一三八四）やフリス（一三七三―一四一五）などの輩が既にルーテルに先つて續々宗教改革の新旗幟を翻す樣になつた所以であつて、そうして是れ等の人々が羅馬教會から殘酷な目に逢つた、教へない最後を遂げてしまつたと云ふことは、益々宗教改革の氣運を一歩々々に高めて來たものである、そこで遂に一五一七年に羅馬法王レオ十世が羅馬カ聖ピタロ大寺建立の資金募集の爲め、テツツエルと云ふ使僧を獨逸に派遣して、例の免罪符の賣買を行はしめ、金力の上から云つても獨逸の財源を羅馬に絞り取つて行くと云ふ有樣になつたから、先きにキクリツフやフースに由つて點ぜられたる宗教改革の導火線は、此に一大爆發を起し、羅馬舊教に對して新教即ちプロテスタント（抗爭黨）を生せしむる樣になつたのである、彼の一五一七年十月三十日に、ルーテル

がヰッテンベルヒ寺院の門扉に、九十五ヶ條の論文を掲出して、羅馬法王の非法を攻擊するや、その勢は頗る、非常なものであつたから、インゴルスタットの大學教授エックは、羅馬法王の意を躰してルーテルを反駁し、ルーテルが人は唯信仰に由つて神に救はれる、羅馬法王の如き將た又教會の如き媒介物は、一も救の爲めには用ないものであると云ひ、彼のボーロやウグスチアヌスから來てをるルーテルの唯信仰說を滅茶々々にぶつつぶさうとした、殊にルーテルは法王と雖も決して謬りなき能はざるものであると云ふに對して、エックはルーテルは如何なる論據に由つてこの說を爲すかと反詰したから、ルーテルは不本意ながらも、遂に吾人の遵奉する唯一の教權は、法王にあらず教會にあらず相承說にあらずして、唯一聖書あるのみと答へた、そこで是れからと云ふものは彼の凡ての教權を排斥して聖書教權說を生ずるの端緒を開く樣になつた、一五二一年にはヲルムスに開かれた宗教會議に於て、ルーテルは羅馬法王の命令に從はなかつたから、ルーテルは斷然破門の間に處せられた、然しその羅馬法王から來た破門狀は、大學の教授學生歡呼の中に燒き棄てられてしまつた、當時ルーテルの一身は頗る非常に危かつたが、ザクセンの撰擧侯フリードリッヒや獨逸皇帝の特別なる保護の下に、僅に安全なることを得て、ワルトブルグの城中に於て聖書の獨逸語飜譯に從事してをつた、ルーテルの無二の親友メランヒトン又たルーテルを援けて、その改革事業を完成せしめたのである。

然るに當時宗教改革の呼聲は至る所に高く、ルーテルの宗教改革を稱へた翌年一五一八年にツヰングリーは瑞西のマリア寺に於て宗教改革の旗幟を翻し、ルーテルと南北相呼應して羅馬に反對すると云ふ樣になつて來た、そこで新教の教勢日に益〻盛んなりと謂ふ可きである、新教はその後獨逸皇帝カル、五世の命に由つて、アウグスブルグの會議に於て、メランヒトンの起草に係る、信仰個條を公にして、新教の基礎全く爰に成つたのであるが、新教の舊教と異る所は要するに個人的信仰に由つて神に救はる可しと云ふ易簡直截の教旨と、その儀式の簡潔を主張するにあるのである、それであるから、羅馬舊教の七聖式（洗禮式堅信式懺改式聖餐式得度式結婚式油禮式）中、洗禮式と聖餐式との二つのみを採用して他を斥け、さうして又彼の聖餐式に於て、麵麭と葡萄酒とが、直に耶蘇の血肉に變化すると云ふ說に反對して、聖餐式に於て麵麭と葡萄酒とが耶蘇の眞の血肉に變化すと云ふことを撥け、唯その聖餐式に於て、麵麭と葡萄酒とに過ぎないが、その麵麭と葡萄酒とに由て、基督の血肉を受け容れることになるのであると、かう說いた、然るにツヰングリーに至つては、尙一層極端なる宗教改革を實行せんとして、聖餐式に於ける、麵麭と葡萄酒とは、唯是に由つて教主耶蘇の死を追懷し回想する紀念に過ぎない、決して麵麭と葡萄酒とを口に

したからと云つて、それで教主の眞の血肉を味ふ譯ではないとかう論じたそこでルーテルとツキングリーとの聖餐に關する兩爭論は、カルヰン（一五〇九―一五六四）の調和說となり、カルヰンは聖餐式に於て信者が麵麭と葡萄酒とを口にする時は、成る程その實際口にする所のものは、單に麵麭と葡萄酒とに過ぎないのであるが、然し信者はその心に基督の靈体を味ふのであると、かう論じたのである、然しルーテルとツキングリとの意見の衝突は、遂に外部に破裂して、新教中に於ても、ツキングリトに基ける改正教會なるもの興り、改正教會はルーテル宗と相對峙する樣に至つたのである、その後改正教會の中には、プレスビテリアン、インデペンデント即ちコングレゲショナル、バプチスト、メソヂスト等の諸派に分かれ、蘇格蘭土に於ては、ジオン、ノックス（一五〇五―一五七二）氏カルヰンの主義を唱道し、英國のメソヂスト教徒ジオン、エスレト（一七〇三―一七九一）及び淸教徒即ちピユリタン又カルヰンの說を繼承して起つたのである、その外和蘭にも改正教會ありて行はれ、英國にては女皇エリザベス（一五五八―一六〇三）以來、新教の旨趣を骨子とし、之れに舊教の皮肉を附して、英國風の特殊なる國教を形成したのである、然しこの英國公立教會に反對する者は、更にノンコンフォミストなる一派を組織し（之れはプレスビテリアン、インデペンデント一名コングレゲショナル及びバプチスト宗より成る）蘇格土蘭の新教はジオン、ノックスに創つたのだが、そは國立教會なる者と非國立教會の二種に分かれ、ユニタリアン又一一三〇年公然英國に其教會を設立するに至りますし、その外尙ほユニヴヱルサリストとかスエデンボルグ宗とか、アドヰンジアイトとか、サルヱリシオン、アルミーとか、諸種の新教諸派の創立を見る樣になつて、新教の勢力は非常に燃んになつて來たのである。

ルーテル教會たると改正教會たるとを問はず、共に新教は着々その地盤を固めつゝあると云ふ有樣であつたから、羅馬舊教の方でも、何んとか之に對する方策を講ぜねばならぬ次第となつて來たから、此にこの對外政策として、舊教の側では、ジエスイット教團の組織とトリエントの宗會の決議文を天下に告白することゝの此二件を決行した、ジエスイット教團は一五三四年に、スペーンの一貴族イグナチウス、ロヨラの創設に係り、超えて一五四〇年に法王パウル三世の認可を受たものである、その主義とする所は、一に法王中心教會神權說に在つて存するので、羅馬法王の爲めとあれば如何なる手段を實行するも差し支へない、宗教の爲めとあれば、所謂目的は手段を神聖にするものである、と主張し、さうして嚴正なる軍隊風の規律の下に、その教團中の部下を統御して行くのは、則ちこのジエスイットの特色である、それでその教徒も、亦不惜身命、爲法不爲身の慨を以て、傳道布教に從事し、鵬程万里の滄波を蹴破つて、遠く東洋に迄來り、印度支那日本へも布教し、これ等の宣教師が支那に這入つたのは明代（一三六〇―一六二八）の中葉に在るのだが、然らばそれ以

前には支那には全く基督教の種子は播かれたことがなかつたかと云ふに決してさうではなく、既に唐の大宗の頃基督教は景教（羅馬教のネストリアン派）と稱へて阿羅品（オロポン）（七七七又は八四）なる宣教師に由つて布教せられ太秦寺と云ふ基督教の寺院さへ建立された位である、然るに唐の武宗が佛教と共に基督教をも迫害して之れを根絶しやうとせられたから、こゝに支那の基督教は一大頓挫を來たしたのであつたが、元の忽必烈の時羅馬法王ニコラス四世が初めてコルヂノーを支那に送り、更に明代に至つてからは利瑪竇即ちマテオ、リシ（初めて支那に這入つたジエスイットの宣教師）方濟各即ちフランソア、サヂエー、ジユール、アロニー等の有名なるジエスイットの宣教師が相踵いで支那にその教陣を張り、益々其教線を東亞の地に擴張せんと計つてをつたが、その勢力は非常に熾んなるものがあつて、一時は支那の宮中に迄波及したさうである、この間政治上から露細亞の後援を得て希臘教又來り、一八〇七年モリソン氏澳門（マカオ）及廣東の地に初て新教を宣布し、一八一三年にはミルン氏來りてモリソン氏を輔け澳門の地方に布教し、一八一八には是れ等兩人の協力に由つて新舊兩約全書の支那譯を完行し、さうして一八四三以來は新舊兩教の宣教師は大に布教の自由を得て益々斯教の隆盛を見んとして以て今日に至つたのである、所が彼のジエスイットの宣教師サヂエーは獨り支那に布教するに止らないで極東の日本に迄其羽翼を張らんとの考で以て一五四九年即我が天文十八年に初めて鹿兒島の地迄やつて來て、ジエスイット教即ち天主教を極東の帝國に迄弘布しやうとしたのである、當時我が國の諸侯をして、城壁の一隅に天主閣を設けて、天主即ちゴッドを祀らしめ、千數百年間因襲の久き、佛教の勢力と相拮抗し、一時信長秀吉家康等の大政治家をして、邪宗門取扱の所置に窮せしめたが、一六三八年即ち寛永十五年肥前島原の戰亂、教徒の餘類全く誅に伏すに至るまでは、一時我國の宗教界をも風靡卷席したの有樣で有つたのは、一にジエスイット教徒の熱心に是れ由るのである、然しジエスイット教徒は、その熱心や好みす可きものがあるけれども、如何んせんその思想や頑迷固陋、中世紀の教會全權主義を、近世の昭代に擔ぎまはつてをるのであるから、到底時勢に適さないのである、又た彼のトリエントの宗教會議の主張した、法王に謬り無しと云ふ、法王無過謬說を今日適用し樣と云ふとは、是れ又ジエスイット主義と同く時代後れである、そこで舊教の內部から、更にジエスイット風の道德に反對して、アウグスチヌスの道德說を奉じ、信仰を重んじて羅馬舊教に一大革新を試みやうとしたものがある、是れ則ち和蘭の神學者ヤンセン（一五八五―一六三八）である、プレズ、パスカル等又ヤンセン股肱の翹將である、然しジエスイット教徒は、大にヤンセンに反對してヤンセン教徒を迫害し了つたのである（クーノー、フイッシアー原著拙譯哲學史要二七七二。八四參照）。

然るに又彼のジエスイット主義を初として、舊教の法王中心主義教會全權說相承

神權主義は、到底當時の時代精神と一致せぬのである柄、そこで又十八世紀には、個人を中心として個人の理性を尊び、傳說の賴むに足らぬことを道破して起つて來た主義がある、これは理性宗教である、基督教を解釋するに、個人々々の理性を標準とし、理性上認めて眞理とすることの出來ぬものは――例之は基督教の奇蹟の如きもの――一切之れを排斥して信じない、唯個人々々の理性に照して、眞理と認むるものゝみ、基督教の眞髓である、本義であると主張する所の、所謂理性宗教學者なるものが、十八世紀の頃には英獨の二國に、非常に擡出して來て、ジエスイツト主義に大なる躊躇を與へたのである、然るに更に進んで考ふるに、人は理性の外に、感情を有してをるなら、理性宗教學者の樣に、理性のみの滿足では、人間の宗教心は安心が出來ないのである、そこでスペーネル（一六三六―一七〇五）フランケ（一六六三―一七二七）等卒先して、虔信主義即ちピエチズムを主張し、一は理性宗教學者が、理性のみを偏重したのを補ひ、一はた又當時ルーテルの新教が、漸く其教理組織に汲々として、中世紀スコラ風の新神學を釀出せんとせる勢力に反對して、感情的信心即ち虔信主義を鼓吹するに至つたのである、そこでこの虔信主義は獨逸に於て、シユライエルマツヘル氏の神學及び哲學の思想に影響し、英國に於てはエスレー一派のメソヂスト教となり、その餘勢は遠く十九世紀に於けるリツチユル一派の上に及んでをるのである、既に云つた通り、人には理解力の外に感情と云ふ者があるから、一方では理性一天張の極端な說が出れば、他方では感情に重きを置て、打ち立てる說が現れてくると云ふことは、自然の道理であつて、丁度之れは甘い汁粉を食つたあとには、しほの辛い香の物でも、一寸食ひたくなると一般である、それであるから近世では理性宗教と虔信主義とは、相平行して行き、中世に於ても既に例の理論一方に奔つた、スコラ哲學の乾燥無味なる學說を補ふ爲めに、諸種の神秘論が現はれてをつたのである。

然るにこゝに一つ面白いことは、理性宗教も虔信主義も、共に等しく個人々々の理性なり信仰なりを重んずる主義であるから、是れは皆な共に個人主義である、羅馬舊教の教會全權主義法王中心主義には反對である、個人の理性個人の信仰を神の如く貴重するのである、教會中心法王全權主義に反抗して、自由平等博愛と云ふ樣な思想を、知らず識らず發生する樣になるのである、そこで是れ等は遂にルーソー、モンテスキユー、ダルテールなどが博愛自由平等の福音を絕叫したのに反響して、佛蘭西革命（一七八九）を馴致するに終はつたのである。

そこで佛蘭西革命と云へば、誰れも知つてをる通り、國王の尊位でも何んでもたまつたものでは無い、何んでも蚊でも一切ぶちこはし主義ぶつつぶし主義と云つても差し支へないのであるが、十九世紀は實にこの餘弊を承けて起り、又その餘毒に鑑みる所があつたものであるから、佛蘭西革命が一度すつかりぶちこはしてしま

つた秩序を回復しやうと云ふにあるのて、そこて彼の個人主義理性主義の弊に懲りて大に歴史を重んじ、事物は凡て歴史的に發達するものてあると云ふ大原理に氣が附き、個人的なる理性主義にては、宗教の眞理は發見出來ぬ、宗教は歴史的に之れを解して、初めてその眞意義を會得するとが出來ると云ふことを悟る樣になつた、そこで十九世紀は基督教の教義史教會史を初めとして一般宗教史の研究を盛ならしめた、加之十九世紀に至つてから、東西の交通益々頻繁になつて來たから、四海北隣萬國一家の實を現はし、基督教宣教師にして印度支那日本等に布教する者は、自家宗教をその人民に弘布する爲めには、先づ彼れの信念彼れの宗教に通じて居なければならぬと云ふ考からして、各宣教師の中には佛教や儒教を研究する者も、次第に增加して來て、その結果自ら各自の宗教思想に寛容の態度を露して來ましたが、殊に日本に於ては、一は印度支那の思想、一は西洋の哲學科學宗教思想なるものが、渾然として雜居群住と云ふ有樣てあるから、一時は互に爭議も釀したが、追々この間に融合調和の實を現して來て、一方には亞米利加流義をすつかり離れて了つた、日本的尙ほ飜解なく之れを云へば世界的ユニテリアンあれば、他方にはグリフイス氏が、其著日本の宗教の中に新酒を新瓶に盛る（全く新き一宗教の意、即新佛教に非ずして新宗教の意）と評した、雜誌「新佛教」に現れたるやうな新佛教が出て來て、世界の宗教は實に日本に來つて更に偉大なる一普遍的宗教に歸着し去らんとする有樣てある、てあるから若し是れを、一八五三年即ち我が嘉永六年米艦が浦賀に來つて開國を促し、新教の宣教師フルベッキ氏が一八六〇年即ち安政七年に日本に渡來し、十餘年間にたつた六人の受洗者を造つたと云ふ當時を追回すれば、我國宗教界の趨勢は實に今昔の感に堪へないものがあるのてある、否なこれは單に我國の宗教ばかりてない、西洋否な世界の宗教界の形勢は實に將來活目して見る可きものがあるのてある、苟も宗教學を研究するものは、決して通り一遍に看過してはならない。

## 第十三章　佛教以前の印度宗教

今を距ること頗る遠い太古の昔に於て、希臘のアールヤ人も羅馬のアールヤ人も波斯のアールヤ人も印度のアールヤ人も、扨てはレット・スラヴ・ゲルマンなど云ふアールヤ人等は皆な等しく同一所に於て共同生活を營んてをつたのてあるが、その後人口の增殖するに從つて各々諸方に散在する樣になり、さうして遂に歐羅巴のアールヤ人種や波斯印度のアールヤ人種などの別を見るやうになつたのてある、そこてその後或は希臘とか或は羅馬とか波斯とか印度とか云ふ樣な別を見るやうになつてからも、それ等の個々のアールヤ人が崇拜してをる神の名前に徵して、今日の吾人は、明かに彼れ等がその昔は同一共住の生活を送つてをつたらしい

ことに氣がつくのである、則ち印度人の崇拜してをる神の名前は之れをデヴスと云ふが、羅馬人の神と云ふ名稱はデヴスである、印度人の崇拜してをる天の神はヴルナであるが、希臘人は之れをウラノスと云つてをる、印度人のドヤウス、ピタルは羅馬人のヂエス、ピテールと同じ者であるし、印度人のアスラと云ふ神は波斯人のアフラと云ふ神と同じ起源である、印度人のヤマてふ神は波斯人のイマ神と同一である、印度人の火神アグニはスラヴ人の火神オグニ羅馬人のイグニスと同一なのである、畢竟是れ等の神を呼ぶ言葉が各國のアールヤ人の間に於て、多少の轉訛は免れなかつたにもせよ、好く似た名前でもつて今日に迄傳つてをると云ふことは、畢竟是れ等の神を今日は銘々別々に崇拜してをるアールヤ人も、その昔は皆な同一の名前の下に同一の神々を崇拜してをつたに違ひなく、それが時代が變り人種が別れ々々になつてから、又自づとその神の名前にも、多少の異同を生じて來て、以て今日各國のアールヤ人の間に傳つてをる樣な、能く似寄つた神の名前となつて、遺つて來てをるのであると云ふことが分る、それであるから今日歐亞の大陸に散在してをるアールヤ人種も、その初めは同一地方に住し、同一神格を崇拜してをつたに相違なからふ、然るにその同一地方に共住してをつたアールヤ人種も、段々時がたつに從つて、或は希臘或は羅馬或は波斯或は印度と云ふ樣に諸方に散在することになつたのである。

扨てこれ等のアールヤ人種がまだ分離せぬ前の共同原住地は、何處であるかと云ふことに就ては、學者間に色々說があるが、要する中央亞細亞の高原と云ふ說が今日の所では事實らしいやうである、則ち尙ほ詳く云ふならばオクスス河とヤクサルテス河の中間裏海の畔コーカサス山麓バクトリヤを中心とした一帶の高原であつて、丁度印度の西北方に當るのである、この共同原住地は則印度のマヌ法典や、波斯のゾエンドアヴエスタの中に見えてをるアルヤヴエスタと云はれた土地であらうと思ふ、して又アールヤ人種が、此中央亞細亞の共同原住所に住んでをつた年代に就ても、色々異說があつて、到底一致しないのですが、ビクテリ氏は紀元前三〇〇〇年頃のことであらうと云つてをる、當時アールヤ人種の文化は中々發達してをつたので、單に牧畜を業とするのみならず、土地の畊作をも併せてやつてをつたし、金屬の使用法も知つてをつたのである、又ギボアン、ド、サン、マルタン氏の說に由れば此中央亞細亞に住んでをつたアールヤ人種中、カブールの地を經て印度河の上流パンジアーブ（即ち五河）の地方へ入り込んで來たものが、即ち印度のアールヤ人種となつたのであるとのことである。

そこで印度のアールヤ人の信じてをつた太古の宗教の有樣を、今日吾人に敎へてくれる所のものは、理具粹陀（ゼンダ）と云ふ書物である、此書物に由ると、印度のアールヤ人種がその同族の波斯人と分かれてから、信度河（シンドゥ）即ち今日の印度河（インダス）の上流パンジアー

ーブの地方に其居を占めて、盛んに天然界自然界の德を讃頌し、日月星辰風雨雷霆を初めとして、彼れ等に豐饒を與へてくれる所の信度河の神德を謳ひたゝへてをつた時代の宗教思想が能く分かるので、勿論理具粹陀の宗教はアーリヤ人種のもつてをつた最も古い宗教の狀態を表はしてをると云ふことは云へないが――一時學者がさう思つてをつたが、それは謬であると云ふことが分つたが――この奇の思想は、印度の宗教が後世或は婆羅門教となり佛教となり、次第に發達開展してくる淵源となつたとは明瞭なる事實である、從つて理具粹陀の思想は印度宗教に於ては非常に古るい思想であるが、吾人が粹陀時代と云ふてをるのは紀元前二〇〇〇年頃から同一〇〇〇年頃迄の間のことを云ふのである――マックス、ミュラーの說――之れに繼で所謂婆羅門教時代が來て紀元前第六世紀佛教の出現に至るのである。理具粹陀に現はれてをる宗教は前にも一寸云つた通り、一言以て之れを掩へば天然崇拜である――プライデラーの考に由れば餘程その宗教の根本思想はトテム崇拜と祖靈崇拜とから成つてをるさうである――しかしその天然崇拜に於ては天を父とし地を母として崇拜し、天をドヤウス、ピタルと呼ぶし地をプリトヒヰー、マドターと名け、尙ほ茫漠無限の大空を神格として崇拜し、之れをアヂチと呼び、晝及び夜の大空たる――此說を採らぬ者もある――ミトラ及びヴルナはアヂチの生んだ所の兒供だと考へ、ミトラとヴルナを呼ぶにアヂトヤスと稱してをる、マルトルドラ等はみんな嵐の神であるし、ヴーユは風の神である、インドラ（後世の帝釋天）は晴空の神であつて金紅色の毛髮を有し金馬を駕せる金車に取して空中を往來し、滿酌ソマ酒に醉つて惡鬼を退治し、祈る人類に其幸福を增さんことを努むるの神である、それであるから空中に雷聲轟き電光の閃くはインドラが雲の中にて惡魔退治をやるさわぎであると想像されてをる、サヰタル、スールヤ、プーシアン等の神は皆な人間に幸する所の天の神である、インドラが酌んで醉を賈ひ元氣一番以て惡魔の退治に當ると傳へらるゝ所のソマ酒は、植物から製した一種の飲料であつてビール酒の種類なのであるが、その人を昏醉せしむる力の大なるよりして、ソマそのものゝ中に直ちに神力の發現を認め、ソマ酒は遂にソマ神として崇拜される樣になつた、天の美少婦ウシアスは曙の神であつて、希臘人のエーオース羅馬人のアウロラと同一である、アグニは火の神であつてその起源希臘人の火の神ヘスチア、羅馬人の火の神フエスタと同一である、思ふに火程太古の人民に取つてその力不可思議でもあり、且つ又火食の恩惠を蒙るとの大なるはないからして、遂に之れを崇拜するに至つたのである、アシュヰンはしのゝめの夜暗を破つて曙の光を啓き來る所の先導者であつて、太陽即ちスールヤと共に疾病を癒治するの良醫である、プリハスパチ又はブラフマナスパチは後世のブラフマー即ち梵天の由つて起つてくる淵源であるが、理具粹陀の宗教に於ては、まだ後世の梵天の如き高遠なる意味を

有してゐないのである、そは單に祈禱の主として考へられ、時に又アグニと同一視され、空中の惡魔退治にインドラを援くるの神として崇拜されてをつた、ギシヱは又太陽の神であるが、ギシヱ神には三歩して宇宙を横斷するの力が具つてをると考へられてをる、此は朝の太陽と晩の太陽とが各自取る位置の上からして、かく考へたものであらう、ヤマは下界冥土の王であつて、希臘のハイデースと同く死人の靈魂を守る神であるが、理具粹陀（ガンダルバ）の中には、まだ未來の賞罰と云ふ思想はよく現はれてゐないのである、從つて靈魂の不滅てふ考迚く、殊に靈魂輪廻てふ考もまだ現はれてゐないのである。

之れを要するに理具粹陀（ガンダルバ）の宗教は日月星辰風雨雷霆の如き天然現象を神として尊崇してをる無邪氣なる天然崇拜である、當時印度のアーリヤ人はソマ酒に醉つてはソマ神の神力不可思議なるに驚嘆し、其ソマ酒の元とであるソマ樹を崇拜し印度河（インダス）（信度河）の上流に居を占めて羊を畜ひ牛を放つては恩惠ある七河流（サプタシンドハーヴス）即ち信度河に讃美歌を捧げ、極めて呑氣（のん）に極めて無邪氣に美的感想を以て宇宙萬有天然界自然界の風光に接してをつたのである、それてあるからその人民は全く樂天的であつて後世印度思想の特色たる沈痛を極むる厭世觀や人生多苦の考察などは少しも無かつたのである、殊に此に注意す可きは理具粹陀の宗教が多神教であることは、前に段々と述べた所の神々の多く併存してをることを見ても明かであるが、獨り此に理具粹陀の宗教にのみ特有なることは、此神々に對する信者の態度であつて、信者は或る場所や或る時に於ては斯かる多くの神々の中、唯その一のみに祈つて、其禱詞を捧げてをる間は他の群神はあつても無きが如くに考へてひたすら我が今祈つてをる所の一神にのみ葵向し、その一神の存在のみしか認めぬのである、それてあるからマックス、ミユラー氏は理具粹陀の宗教をポリシーズム即ち多神教と云はずして、ヘノシエイズム即ち單一神教若くは假一神教と云ひ、又その信者の祈請する一神は常に同一神格てなくつて、或はインドラ或はアグニと云ふ樣に、時と所とに由つてその神々が異同し交代してくるからそれてエーダの宗教を單一神教と云ふと同時に、又カセノシエイズム即ち交替神教と呼んだのである、かう云ふ風に印度の宗教は希臘の宗教などに見うる多神教とは自らその樣子が違つて、神々の性質がしつかり定立してゐない、希臘ではツオイスはツオイス、アポローンはアポローン、ポサイドーンはポサイドーンと云樣に其衆多の神格は確立してをつて、決してツオイスとアポローンとアテーネーとも雜つてしまふとはないのであるが、粹陀の神々は是れと違つてブルナとミトラとは直ぐ混同し又ルドラとプーユとはぢき一所になつてしまうのである、それと云ふのはエーダの宗教は單一神教又は交替神教であつて、希臘のやうな多神教てないからである、そこてから云ふ風に一の神と他の神と融通し、甲の神と乙の神と

混同してゐる樣になると、もうそこでもつて、是れ等の諸神は畢竟同一大神格の色々に顯現した群小諸神であると云ふ風な考が起つて來て、そこで遂に唯一神敎若くは万有神敎即ち凡神敎に到達することは、極容易すいことである、思想がそこへ推移して行くことは、實に一擧手一投足の勞であつて、掌を反へすよりも容易すいことである、實に印度の太古の宗敎は斯かる發達の進程徑路を取つたのである、彼の一切作者の義を有してをるヰシュヴカルマン及自在天ブラジアーパチ・ブラフマーの如きは、次第にその神格を高めて來て、遂に唯一神敎に於ける神の如くなつて現れて來たのである、此に至つて婆羅門敎が生成してくるのである、して又今この思想がもう一歩哲學風に進轉して來れば、宇宙万有主觀客觀の實体原因をブラフマー即梵に認むる吠檀達派の哲學が生れ出てくる順序となつてをるのである、又彼の天空の無限を神化したのはアヂチであるが、その無限と云ふ神德を擴充して來て、こゝに又理具粹陀の宗敎は万有神敎觀即ち凡神觀に達してをる、則ち理具粹陀の詩人はかう云ふことを云つてをる、即ちアヂチは空であるアヂチは空氣である、アヂチは父であり母であり兒子であるアヂチは一切諸神であり、人間の五階級である、今現に生れたるものであつて、又將來に於て生れ來るものは一切皆アヂチであると、かう云つてをる、この語は明に万有神敎觀即ち凡神敎の萌芽を含んでをつて、それが將に發芽して成木にならんとしてをる狀態を示めしてをると云つて差し支へないのである。

以上大略述べて來つた所のものは、印度のアールヤ人種の太古に表はれた宗敎の概要であつて、即ち理具粹陀に見えた宗敎の大体である、印度のアールヤ人種がその同族の波斯人と分かれて、ヒンヅクシュの山脈を超えて印度河の上流に遷入つて來た時分には、彼れ等は上に述べた通り樂天的に天地万有を謳歌して美的感想に嬉々たる快活の生涯を送つてをつたのである、彼の沈痛悲哀なる厭世觀や靈魂輪廻の考もまだあらはれてをらぬ、四姓階級の厳別もまだ立つてをらぬ、偶像崇拜の痕跡もまだ見えてをらぬ、肉食の禁もまだ成り立つてをらぬ、獸は或は犧牲として神に奉り或は自己の食用に供してをつたのである、斯かる快活なるアールヤ人種も物換はり星移り次第に東南に向つてその居を移し、パンジアープの地方より東南恒河（ガンガー）即ちカンジエス河の上流ヤムナー河畔に迄その居を遷す樣になつてからは、漸々土人を征服して奴隷となし、戰勝の餘威を承けて武人戰士の亜んぜらるゝもあり、殊に宗敎は次第にその組織を完成する樣になつて、神に事ふる專門家である祭司僧侶（往古のリシ）即ち婆羅門族を生じ、從來は一家の父長又は一族の酋長が、獨り一家若くは一族を代表して、その事務に當つてをつた祭祀は、皆な專門にその職に從ふ所の僧侶祭司の手に飯する樣になつて來た、それと云ふは同じく神を祭ると云つても、その儀式禮拜の規則が段々六かしく煩雜になつて來たからの事

であつて、專門家たる祭司僧侶でなくつては到底理由が分からなくなつたからの、ことである、神の意を承けて事に當ると云ふことを以て、最も大切なことゝしてをつた太古印度の人々は、その神事を專門に獨りで取り扱ひ、神事に精通してをる所の祭司僧侶の一階級たる婆羅門族を非常に社會から尊重する樣になつたのは決して偶然のことでない、こゝに於て遂に僧侶即ち婆羅門と武夫即ち刹帝利と農商工即ち毘舍と奴隷即ち首陀との四姓の階級が嚴立するに至つた、してこの四姓の階級を嚴守して寸毫も犯すことなからしめんが爲めに、益々之れに理窟を曲解する樣になり、婆羅門は梵天の口から生れたから一番尊く、刹帝利は梵天の腕より生れたから尊貴之れにつぎ、毘舍は梵天の股より生れたから尚ほ一段卑く首陀に至つては梵天の足から生れたから最も卑い賤族であると云ふ宗教上の說明を牽强附會して來たから云ふ風になると云ふと、印度の宗教は漸々形式的に流れ、無意味の虛禮に齷齪してくる樣になり、又印度國內至る所に當時各國互に分立してをつて、戰國の群雄割據てふ有樣を表してをつたから、人心その堵に安んぜず、生命財產の安全と云ふことも決して頼みにならなくなつたからして、人々世の無常を觀じ人生の墓かなきを嘶つと云ふ樣になるのは自然の數である、加ふる印度河の上流パンジアブの地方から、恒河の畔にその居を移して來た印度のアーリヤ人種は氣候風土の變化上勢ひ厭世的の人民となり、人生の苦多きことを感ずること益々深く、解脫涅槃を彼岸に求むることを致して來たのである、この時代は頗る切なるを致して來たのである、この時代は實に是れ婆羅門教が印度の社會人心にその根據地を据へた時であつて、神陀の自然宗教からして、遂に婆羅門教の國民的宗教を醸出して來た時代である、此婆羅門教の頭を擡げ初めたのは遲くも紀元前八世紀以前であるが、知らず此婆羅門教の國民的宗教からして更らに釋迦佛陀の世界的宗教を產出するに至るには如何なる徑路を取つたか、是れ等宗教史上の興味津々たる思想發達の進程徑路を明かにするが爲めに、吾人は先づ婆羅門教の特性に就いて尙ほ一層その研究の步武を進めてみやうと思ふ。

今日プラーフマナと云ふ書物の中に傳はつてをる婆羅門教の儀式典禮は、丁度猶太教の僧法即ちトラの如きものであつて、その昔から段々と傳つて來た所の宗教上の宗儀作法を定めて書き記したる書物である、今その書物を繙いて見ると云ふと、頗る詳細に寧ろ煩雜迄に、婆羅門教の儀式作法のことが書いてあるが、畢竟その儀式作法は宗教上のものであつて、先づ信者が神の御意をそこねた樣なときは、神の好み給ふ犧牲を奉つて神意の怒を鎭める供犧の儀式と、もう一つは病氣の瀆れが信者の身にあるときは、それを神に祈つて祓ひ淨める所の儀式との二つに區別することが出來樣から云ふ風であつたから、紀元前八百年から五百年頃迄即ち釋迦の出現前迄と云ふものは、婆羅門僧が日々神に奉る犧牲の類と云ふも

のは、中々なみたいていのことではない、實にその數非常なものである、それである から犧牲として屠られた動物の血は流れて杵を漂し、腥い風は至る所に人の肌を襲ふと云ふ有樣である、嗚呼心あるものは誰れか斯かる宗教の蠻風に心を痛めざらんやである、釋迦が犧牲の血を流す必要のない無神論を說き、博愛慈悲の人道主義を鼓吹したのは決して偶然でない、否なそれは獨り釋迦ばかりではない、當時有識具眼の士は、皆なその不仁不道理なることを認めてをつたのであつて、いつかその蠻風を一新しなければならないことを心に感じてをつたのである、そこでブラーフマナ書の中にかう云ふ言ひ傳へが載つてをる、神々が人間を自分達の犧牲にする爲めに殺されたそのとき人間の死躰中、供犧に適した部分が不意にぬけ出して馬の躰中へ這入つてしまつた、そこで神々は切角供犧にしやうと思つて殺した人躰が、馬の躰中へ這入つてしまつたから、そこで止むなく又其馬を殺して犧牲にしやうとした、するとその殺された馬の身躰中供犧に適した部分が更に飛び出していつて牛の體内へ這入つた、そこで又止むを得ず神はその牛を殺して犧牲にしやうとせられた、するとその牛の肉は羊の體内へは入り込んだ、そこで又この羊を屠ふとしたら犧牲の其部分は山羊の體内へ這入りそこで遂に永く止まつたさうだ、(或は云ふ山羊地中に入つて米麥と變じ從つてまた米麥は永く神の供物になつたと)そこで山羊は後世迄最も良き供犧として印度人に考へられてをつた、然るに今この物語を味ふにそは明にブルシアメドハ即ち人身供犧の殘忍酷薄なるとを知つて、人の代はりに馬、馬の代はりに牛、牛の代はりに羊と云ふ樣に、段々大なる動物から小動物にその犧牲が代つて來たことを示めしてをる、そは漸々人道主義の曙光が印度の人心中に動いて來て、孟子の所謂其聲を聞いてその肉を食ふに忍びず、君子は庖厨を遠くてふ博愛慈悲の道德心が、段々と心ある人の精神を刺擊し初めて、宗教上の無用なる虛式虛儀の爲めに、人の命は愚かなる動物でも矢鱈に殺生してはならぬと云ふことに氣が注いて來たからのことである、尙ほもう一つ面白い興味のある物語は、矢張ブラーフマナ書中に載せてあるのであるが、ハリシユチアンドラと云ふ王樣とその王子ロヒタとの物語である、則ち王は一人も男の兒が無かつたから、ヴルナ神にどうか男兒を授かります樣にと祈つた、然し男子を授つた御禮に後にはその男兒をヴルナ神に人身御供に捧げますからと、かう云ふ約束で男兒を授かることをヴルナに祈つたから、神は遂に一男ロヒタをハリシユチアンドラ王に授けた、然るに王子ロヒタは成人した後ちに遂にヴルナ神に供犧にされるとを父王に拒んで、その極遂に彼はつかまつては一大事、かけがへの無い命にかゝはると思案して、遂に父王の宮殿を脫走してしまつたからしてロヒタは六年間諸所方々に漂泊してをいてをつたが、六年目に、とある森の中へ來かゝると、今やその兒子等と共に餓死せんとしてをつた所の婆羅門に逢つ

たゞそこでロヒタは心中是れはうまいと思つて、とう〳〵婆羅門に談判して、その一人の男の見スナシエフアと云ふ子供を、百匹の雌牛と交換してもらつて買ひ取り、さうしてその買ひ取つた婆羅門の男兒を父王ハリシユチアンドラ王の許へ連れて行つて、自分の代りにスナシエフアを以てヴルナ神に供犧とせんことを父王に請ひ、將に式場を設けてスナシエフアを神に人身御供として奉らふとし、其供犧の式を初めたときスナシエフアは神から許されて一命を助つたと云ふ話がある、今この話の起つた源を考へてみるに、最早や明に當時の人心は人身供犧の如き殘酷なる蠻風に耐えない迄、その道德心が進歩して來たと云ふことを證明してをるのである。それは丁度猶太ではアブラハムがその子イザックを神に人身供犧に奉らんとして、祭壇上にアブラハムが刀劍を奮つて、今やイザックを刺さんとしたときに、神が俄に羊を以て之れに代へられたと云ふ言ひ傳へと、東西全く同一軌の傳說で、猶太でも印度でもその當時の人心の進歩した者には、人身供犧の如き殘忍酷毒なる蠻風は到底忍ぶとの出來なくなつた時代の社會道德を反照してをるのである。要するに印度に於ては彼の粹陀時代の如く、ソマ酒を酌んで天然の神德を謳歌讃頌してをつた時代に繼いで、一時婆羅門敎の煩瑣なる虛儀虛式に化石してしまつた宗敎の時代が起つて來て、朝から晩迄僧侶祭司と云ふ樣な人々は、無益の時間と勞力とを費して神に祈を捧げ、犧牲を屠つて神に奉り、一般人民をして宗敎的中毒にその身心を麻痺させてしまひ、何んても蚊でも儀式々々と云つて儀式計りやつてをつて、之れが神に對する眞の信心であると考へてをつたのである。然るに斯る風潮はいつか又變動刷新の氣運に向つてくるものであつて、釋迦の出世は明かに此氣運に促されてをるのであるが、釋迦以前にも早く既に斯かる宗敎上の虛式を心窃に攘けてをつた具眼達識の士もあつたのである。斯かる思想上の暗潮が印度の社會にあればこそ、釋迦が一たび出でゝその博愛平等清新なる大慈悲主義を稱導するや、忽ちにして其勢力は印度の全社會を風化することが出來た所以である。婆羅門敎の儀式典禮が段々固成して來て、僧侶の階級が次第に權力を握つてくると云ふやうになつたときには、之れと相對應して神に關する考も次第に進歩してまゐりまして、前にも一寸申しておきました通り、万有神敎的若くは唯一神敎的傾向が非常にふへて參りました、則ち先づそれが手初めは粹陀の中に澤山に出てをりました群立した多神を、段々と引つ附け合はして來て、その性質の能く似かよつてをるものは同一の神が名を異にして現れたものであると云ふ風に解釋して來て、インドラとソマとを結び附け、又ソマとアグニとを結び附け、ミトラとヴルナとを結び附けて、皆な各々一つの神の樣に考へて來たのである、それは獨り印度ばかりではない、埃及でもそうであつて、アムムン、ラーの一神となし、オシリスとラーとの二神を結附けて、オシリス、ラーの一神とし

たのと同一である、かう云ふ工合に多くの神々を段々と一に合同しやうとしてくる傾向が益々高くなりましたから、遂に之れを一とまとめにしまして、粹陀の中に見えてをる群立多神は、皆な同一大神格が、色々に顯現したものに過ぎないと云ふ、愈々万有神教的若くは唯一神教的の方面に考へが向いて來ました、彼の粹陀の詩人が或はインドラと云ひ或はミトラと云ひ或はアルナと云ひ或はアグニと云つてをつた所のものも、畢竟同一大神格を假に遂つた言葉で云ひ現したに過ぎないと、かう考へる樣になりました、そこで是れ等の一大神格を自在天即ちプラジアーパチとか一切作者即ちヰシュヴカルマンとか云ふ樣な名を附けて呼ぶ樣になりました、そこで又當時婆羅門僧の跋扈と共に神に御祈禱をすることが盛んになつた、則ち御祈禱と云ふことは非常に重大なことゝなりまして、祈禱に由つて神に諸の祈願を叶へてもらはるゝのであるとかう考へて來た、そこで婆羅門の祈禱は能く神を動すに當るのである、御祈禱の力は能く祈つて聽かれざるなく、神を動さざるなしと云ふ有樣になりましたから、祈禱の力と云ふものは非常に盛んなもので、祈禱でもつて神に無理をも願ひ、神意を左右することさへ出來るものであると云ふことになつて來ましたから、祈禱の力は却て一切諸神の上に位することゝなつたわけです、それでありますからこの祈禱を神化したものである祈禱の主神ブリハスパチは非常な勢力ある神となり、遂にプリハスパチの考からして梵天即ちプラフマーの考が出て參りました、實に梵天即ちプラフマーは一切諸神の父神であると云ふ樣に考へられて來ました、世界はプラフマーより生じ、諸神の靈も人間の靈も皆なプラフマーに還沒飯入するのであると考へられて來た、そこで彼の理眞粹陀の中には見當らない新思想である靈魂の輪廻轉生說も出來てきたし、人間の靈魂は死後その現生の行爲如何んによつて又人間にも生れてくるし、又は畜生にも生れ變つてくるのであると、かう云ふ考が生成して來たのである、然るにこの婆羅門教の靈魂輪廻說は學者往々アールヤ人種が印度の土人の宗教思想から假りて來たものであらうと云ふけれども必ずしもさう見る必要もないであらふ何せなれば第一アールヤ人種の太古の宗教はスピリチズム即ち精靈教もつと廣く云へばアニミズム、即ち生氣崇拜であつて、山でも川でも草でも木でも皆なその中に活きた靈魂を有してをるものであると、かう云ふ信仰を抱いてをつたのであるから、此信仰が一轉すれば直ちに人獸草木を通じて、その靈魂が次第に轉生し移り更つて往くと考へる樣になるのは、自然の勢である、婆羅門教に靈魂輪廻說の現れてくるのは、縱令印度の土蠻の宗教思想の輔助を藉らずとも、アールヤ人種の宗教の自然の發達の結果と解しても差し支へなからふと思ふからである。

以上述べた所は婆羅門教が一般人民の信仰上に現れでをつた方面の眞相であつ

て、則ち日々執り行ふ所の煩雜なる宗教の儀式を初めとして、人格を具へ諸神を統一し諸神の王たる梵天即ちブラフマーの存在を信じ、靈魂の輪廻を信じ、一向此神に祈禱信賴する如きは、即ち粹陀の神話から出發して、次第に開展し來つて婆羅門教の通俗的方面に發達した宗教の有樣である、則ち是れは當時の一般人民の間に行れてをつた印度宗教の信仰である、然るに之れと相對して當時の學者間に行れてをつた婆羅門教の正統派若くは非正統派の思想があつて、之れは當時印度の社會に存してをつた哲學諸派である、その中前者の代表者は吠檀達派（ヴェーダンタ）の哲學であつて、後者の代表者とも見る可きものは僧佉（サーンキヤー）又は日本で云ひ來つた數論派の哲學である、今此兩哲學の教ふる思想の內容を說明するとは姑く後と回はしとして、先づ印度も希臘と同じ樣に古來中々哲學の議論が八釜しかつた國であるが、どうしてさういふ風に哲學思想が降盛になとたかつ云ふとの淵源を尋ねて見るに、それは既に粹陀の多神教の時代、彼の天然崇拜の時代からぼつ〳〵その萠芽は存してをつたので、粹陀の神話時代に於て早く既にインドラ神の存在を疑ひ粹陀を一つの戲言であると嘲つた人もあつて、かゝる神が一體全體世の中に存在してをるものであらふかどうかと嘲ふ樣な疑問さへ呈出した者もあつた、この疑問の呈出は則ち印度に於ける哲學の初めであつて、アリストテレース氏も云はれた通り、實に哲學は怪訝疑心から初まるのであるそれであるから印度の哲學もその起源はそろ〳〵インドラの存在などを疑ふ思想に萌したのである、既に理具粹陀中に方有の開發を以て、靜止せる梵即ちブラフマーが急に烈火の如き盛んなる慾望即意志を起して、此に初めて有もなく無もなき混沌たる太初の天地に万物が開發してたのであると論じてをる、してみるともう既に此に梵と云ふ世界の一本體の存在と、之れに對しては現象界差別の万有が、こゝから生起して來たとゝ、それからこの世界は梵の慾望から起つた世界であるから、不滿足な世界――何ぜなれば不滿足なればこそ、梵にその他を希望し、その上を希求する慾望が生じたのであるから――從て又此世界は多苦の世界、從て又此世界は厭離す可き穢土であると云ふ考が存してをつたことが明瞭に分かるのである、理具粹陀の太古に於て既に斯かる思想が存してをつたのであるから、それから後に發達して來る所の印度の哲學は、皆な此の思想の系統を承け繼いで發達をして來てをるのである、則ち印度の哲學は人生を苦と感じ、世の中は苦の多い所、世間は穢土である、早く斯かる多苦なる人生や嫌ふ可き穢土を厭離せねばならぬと云ふ考からして起つてくるのであるからして、人生宇宙の眞相を明らめ、その苦の因を研究して苦を拔き樂に遷る道を知らんと欲して、こゝに哲學が起つてくるのである、釋迦が生老病死の四苦を滅さうとして佛教哲學の源を開いたのも、全く此印度思潮を承け繼いだものと云はなければならない、釋迦が煩瑣なる宗教上の虛儀虛禮を排斥したと同じ樣に、當時

の哲學者も徒らに神に奉る犧牲の功德を說いたり、諸神や宇宙の起源を論じたりするよりか、寧ろ是れ等の外形上の虛儀虛禮を修むることを止め外界に神を求むることを止めて、先づ內界に自己の本性を探らうと考へる樣になつて來た、希臘に於ては早くからデルフオイに在るアポローンの神殿の門扉に刻まれてあり、後ち大哲ソークラテースに至つて、その哲學上の根本主義とせられた先づ自己を知れとの思想に移り變つて來たのである、そこで當時の哲學者は先づ己れ自身の上に注意を注ぎ、自己を研究した上で遂に自己の本體眞性を見照して之れを靈魂實體即ちアートマンと呼んだのである、即ち此アートマンとは佛者の所謂我である、然るに更らに進んでこのアートマン即ち靈魂實體である我が各自銘々の肉體中に別々に實在してをることを許すもの、即ち小我――ジーヴアアートマン――の多元的別在を立つるものは數論之れを代表し、之れに反して小我即ちジーヴアアートマンの個々別々の存在を許さず、斯かる個人々々の中に現れてをる小我即ち個人の靈魂實體はその實存在してをるものではなく、存在してをる所のものは唯宇宙間一つの大我パラムアートマンあるのみである、このパラムアートマン即ち大我こそ、即ちブラフマー梵に外ならないのである、個人々々の小我が別々に實在してあると思ふのは人間の認識の誤である、即ち無明――マーヤー――の然らしむる結果であると、かう論ずるものは、吠檀達派の哲學である、吠檀達派の哲學はその初め駄達羅衍那に由て組織せられ、紀元第九百年の頃に於て更に商羯羅阿闍梨に由つて復興大成されたのであるが、要するに吠檀達派の哲學と云ふのは、個人々々の精神小我の別在を許さず、個々の精神小我が別々の實在である如く思はるゝのは、吾人々類の迷妄である、迷ひであつて、その實宇宙間には一大精神たる大我の存在の外何にものも無いのである、日夜吾人の眼に映じてをる山川草木森羅萬象を初めとして、吾人の肉躰も又皆なその實存在してをらないのである、然るにそれが實際存在してをる樣に見ゆるのは、人々の妄見である、轉倒の見解である知識の暗さが致す所である、一言以て之れを云へば、人々の智眼を覆ふ所の無明マーヤーの爲めである、然し人若し一ぴ無明の雲霧を拂ひ去つてしまへば、これ迄吾人の眼底に映じてをつた物質世界は一切夢である、海岸の蜃氣樓である、實際は何處にも存在して居らなかつたのであると云ふことが分かり、吾人の精神即ち小我なるものも、常識の思ふ如く個々別々に實在してをるものではなくつて、個々の小我は畢竟同一大我に過ぎなかつたのである、個々の小我即ちジーヴアアートマンは即ち一の大我パラムアートマンに外ならないのであると、かう悟りが開けるのである、このことは丁度今まで千水万波に映じてをつた月影を個々に認識してをつて、それを眞の月と見謬つてをつたので、眞の月は實に千水万波の中に存ぜずして、その實天のあなたに一つ高く懸つてをるのである、千水万波中の月はこ

の同一天上の月の假に個々の水波の上に別々に映じてをつたのに過ぎなかつたのであると、かう悟るのと一般である、この眞月即ち大我こそ實に梵即ブラフマーである、それであるから我は梵天なり（アハム、ブラフマ、アスミ）との一語は、吠檀達派の究竟の原理であつて、又その眞悟の境界を云ひ現したものである、吠檀達派の哲學に私淑する所のあつた獨逸の哲學者ショーペンハウエル氏が屢々好んで我れは梵天なりの語を用ゐられたのは決して偶然でないのである、それであるから吠檀達派の哲學は、此大我即ち梵の外には一物も存在して居らない、唯一實在の梵以外の世界は皆な虛影である、夢の世界である、迷の世界である、決して實在してをるものでないと云ふのであるから、丁度希臘哲學のエレア學派の云ふ唯一是凡即ちヘン、カイ、パンの思想と同く、印度の無上唯一の本躰即ちエカム、エヴ、ドヰチーヤムであるのであります。

吠檀達派の哲學が無上唯一の本躰たる梵てふ一神を立てゝ粹陀の正統派たるに反して、カピラの僧佉即ち數論哲學は個人々々の精神即ち小我の實在を許るして、斯る無上唯一の神格の存在を否定し、個々の小我を神我即ちプルシアと名け、此神我に對して物質即ち自性（プラクリチ）の實在をも許容して、神我と自性、換言すれば精神と物質との二元の對立を許るして哲學を組織し、この精神物質の兩者が互に相結合することに因つて、この現象界差別界の森羅萬象を生ずと說くのであるそれであるから僧佉（サーンクヒア）哲學は二元論であつて、西洋哲學者デーカルト（一五九六―一六五〇）氏に先つて、既に業に二元論を說いたものである、さうしてそれは丁度又支那の二元論者――理と氣の二元論者――朱子（一一三九―一二〇〇）にも先つて早く既に二元論を和へてをるのである、僧佉哲學は物質と精神とが結合して此に初めて現象界差別界の活動の起つてくる理を說明するに一の比喩を以てした、即ち物質は盲者の如きもので、その足は達者で自由に運動は出來るけれども、眼が見えないから、その運動の方針を定めることが出來ない、それであるから物質のみでは宇宙の活動は起らない、然るに幸に此に精神と云ふ眼明きがをる、然し又悲しい哉精神と云ふ眼明きは、眼は見えるが、跛者であるから、獨で自由に動くことが出來ない、そこで跛者である精神と盲者である物質とが、互に結び附き、物質の盲者は精神の跛者を脊負つて、脊中の上から跛者の指導を受けて行く先き方向を定め、さうして初めて實際の活動が出來るのである、丁度その如く物質と精神とが互に連合して合つて、始めて今現に吾人の眼に見てをる樣な、世間の現象界が起つて來るのであると、かう說くのが僧佉哲學の物質と精神とからして、現象界の生起を說明する要旨である。

偖てこゝで考一考しなければならないことは、斯かる系統組織から出來上つてをる僧佉哲學は、印度の各哲學の宿題とも云ふ可き解脫問題を如何に解釋したかと

云ふことである、既に理具粹陀の時代からその萌芽を發してをつた、人生を苦と觀じ、この世界を穢土と考へてをつた爲め、かう云ふ多苦なる人生や穢れたる世間を如何にしたら解脱することが出來るかと云ふ、その解脱問題をどう云ふ風に解釋したかと云ふに、僧佉哲學は斯かる差別界穢れたる世間、多苦なる人生は、彼の自性てふ物質と神我たる精神とが互に結び附いたから起つて來た譯で、元來見ず知らずの跛者と盲者との兩人が偶然相提携して聯合したから、こんな不都合な人生や世界が生じて來たのである、それだからこの多苦なる人生や穢れた世界を解脱しやうと思ふならば、この跛者と盲者との聯合を解くより捷徑はない、精神が物の束縛を蒙つてをるから惡いので、精神を拘束してをる物質の羈絆をさへ解き離してしまへば、それで十分なので、解脱は畢竟精神と物質との聯合が解けさへすればそれでよいのである、是れが僧佉派の解脱論である、然るに前にも云つた通り吠檀達派の解脱論は、個人精神即ち小我の假りの存在を否定して、梵即ち大我の本躰中に融合歸一することに由つて初めて達せらるゝのである、僧佉派は神を立てないで解脱を計り、吠檀達派は梵なる一神を立てゝ是れに由つて解脱しやうとするのである、前者は無神論で後者は有神論である、前者は二元論で、後者は一元論である、前者は粹陀の正典から見れば非正統派であつて、後者は正統派である、然るに又た當時印度に蜂起した哲學は獨り以上の二派に止らず、佛典の傳ふる所に據ればその數が非常に多いのである、そこで今は小異を捨てゝ大同に從ひ、その重なるものを擧げてみれば、凡そ六派となるので、則ち吠檀達と僧佉の二派の外に、なほ四派ある、紀元前二世紀の頃波膩閣梨（パタンジリ）がその組織を大成したのは瑜伽（ヨガ）學派と云ふのであるが、この瑜伽學派は丁度吠檀達派と僧佉派との中間に位する學說であつて、個々の精神即ち各小我の別存し實在してをることを許るす所は、僧佉派と同じてある、然し又その個々の小我は皆な一大精神即ち宇宙の一大我たる梵の眞實顯現てあると說いて、梵の一神の存在を認めてをる所は吠檀達派の說を容るしてをるのである、さうして其同一大精神が、個々に顯現した個人々々の精神が、物質と結び附くからして、こゝに差別界現象界雜多の相を見るに至るのであると說いてをる、それであるから丁度この瑜伽學派は、吠檀達派と僧佉派との中間に位して、この兩者を調和して出來たと云ふ形になつてをる、そこで又この瑜伽學派の解脱を論ずるはもう申す迄もない、この個々の精神即ち小我が沈思默想、靜に小我が大我とその本性眞相を一にしてをると云ふことを暗悟して、偏に自己を見性することに由つて物質の束縛を離れ、無明を破して眞解脱に躰達す可しと說くのであつて、瑜伽の觀行は則ち是れである、是れは佛教では禪宗の敎ふる坐禪觀念と殆んど同一と云つてもよいのである。

然るに又僧佉哲學と同く、物質と精神の永遠無窮に存在してをる實躰なることを

容るし、而かも僧佉の樣に物心の二元に由つて宇宙萬有を分類せず、物質と精神とを一所にして、扨その上で、此兩者を通じて是れ等を凡て六個――後には十個――原子に分析して、この數多原子の結合から宇宙萬有の生滅起伏する次第を說明せんとする學派がある、之れを迦那陀（カナーダ）の稱へたる吠世師迦（ヴァイシェシカ）即ち勝論哲學と爲すのである（勝宗の十句義論てふ書物は則ちこの哲學を傳へたものである）、それであるから吠世師迦哲學は僧佉派の二元論に對して多元論である、吠世師迦は迦那陀の哲學思想に於ては僧佉派と同く無神論であつたが、その後學者の手に由つて伊濕代羅（イシュヴァラ）なる至上の一神即ち吠檀達派の大我の存在を許るして有神論となつたのである、然し又吠世師迦の哲學はその無神たると有神論たるとを問はず、その多元論は一方より之れを見れば矢張僧佉派の二元論と同く物質と精神との對立を許し、解脫とは此精神が物質の束縛を離れるに在るを說いてをる、ここは全く僧佉派と同一である。

尙ほ又人生の多苦なるを見て、その原因を吾人人類の無知なることに歸し、人間の知識を進めて人生不幸の苦源を斷滅せんと謀つた學派がある、是れは喬答摩（ガウタマ）――又は足目仙人、即ちアクシパダといふ――の尼耶夜（ニヤヤ）學派である、吾人の知識を進むるは論理をたゞすより先きなるはないのであるから、尼耶夜學派は主として吾人の知識を分析して、その形式規則を論究したのである、之れは印度に論理學ある



初めてあつて、古因明――陳那（ディグナーガ）の新因明に對してしか呼ぶ――と云ふのは則ち喬答摩の創めた所の一種の形式論理である。

尙もう一つの學派は闍伊彌尼（ジャイミニ）なる人の組織した弭曼傑（ミーマンサー）學派即ち聲論である、然し是れは六派哲學中一番價値の少いのであつて、粹陀の神權を辯護する爲めに出た粹陀の註解に過ぎないのである、從つてまた弭曼傑學派は諸哲學派中最も粹陀の神權を重んずる正統派の哲學である。

以上は釋迦の出世當年の前後に當り幾多の年月の間に夫々婆羅門教の虛式虛禮に厭き果て、空文虛形の末弊に堪へ、兼て起つて來た所の哲學上の自由主義である、それであるから印度の哲學は皆な宗教上の解脫を冀ひ、理論研究の爲めよりは、寧ろ强烈なる實際上の動機から起つて來た所の哲學である、從つて又印度の哲學は非常に宗教と密接に相關聯することになつて來てをるのである、尙又此六派哲學の樣に完全に獨立した學派と迄云ふことの出來ないのであるが、その思想は優に當時印度の社會の狀態を能く反照してをるのであるから、こゝに一言して置くがそれは外のことでもない、彼の富蘭那迦葉（プーラナカシャパ）とか末伽梨拘賒黎（マッカリゴーサリ）とか刪婆迦（サンジャヤカ）――所謂順世外道――とか云ふ人々に由つて稱へられた唯物論と快樂主義と詭辯論とである、彼れ等は因果應報の理を信ぜず、精神の存在を認めず、獨り在る所のものは單に物質のみなりと主張して、宗教の信ずるに足らぬことを公言し、道德の修むるに

足らざることを道破し、詭辯に詭辯を重ねて、布施精進の善行もその實に價せず、殺人强盜も罪とならぬことを、揚々として口外にし、寸毫も憚らない樣になつたのである、その結果は極端なる現世主義快樂主義の外何にものも無い樣になつた、實に印度の社會に於ける人心の危機この時より大なるは又と無かつたのであらう、實に希臘の社會が一時斯かる危機に遭遇した時、哲人ソークラテースの偉聖に依つて、その墮落の深淵から救ぼれた如く、印度の社會も今やまさに又斯かる一大偉人の手腕に由つて初て救の光明を與へらるゝのである、若しこの秋に當つて釋迦佛陀の出世微かりせば印度百万の生靈は果して如何になり果てゝしまつたであらうか、そは實に思ふだに寒からずして、肌の粟することを覺ゆるのである、嗚呼時なる哉命なる哉、時世は英雄を產み偉人を生ずるとかや、當時印度の社會に於て釋迦佛陀の降誕を見たのは實に偶然で無いのである、是れぞ眞に溽暑數旬風死し氣鬱するの時に當つて、沛然たる驟雨俄然一過頓みに神氣の爽快を覺ゆるの感なくんば非ずなのである、釋迦佛陀の福音は眞に當時人心の好清涼劑であつたのである、然ればたゝに至て、吾人は最早や佛教を敘述するの機運に逼られて來てをるのである、佛教の敘述に入るに先つて、――婆羅門教の哲學を前に說明したから――次に一つ婆羅門教の道德の方面を一瞥してみやうと思ふのである。

婆羅門教の道德は摩菟の法典――この法典が今日の樣に編纂されたのはビュー

ラー氏の考では紀元後第二世紀より少し早い頃ならんと云ふ――に書いてある所を一讀すれば、その有樣が分かるのであつて、摩菟の法典と云ふのは彼の當時印度に行はれてをつた婆羅門教上の儀式制度等を初めとして、宗教法や個人的道德や社會道德等の從を一樣に併せ記載した所の成文律であつて、讀者はモーゼの律法即ち猶太の僧法や聖德太子の憲法などを思ひ合したならば自ら想像が附くであらう、今此摩菟の法典の規定してをる所を見るに、實に當時印度の社會は人の生れた時からその死ぬ時迄、殆んど宗教的の儀式を以て前後始終してをると云つても差し支へないのである、彼の最下級即ち奴隸たる首陀以外の階級に屬する人民は、その生見に初めて神聖なる帶をしめさせる、即ち結帶の儀式と云ふことを、一つの宗教的儀式として執行する、この儀式が濟むとその生れ落ちた子供は宗教上から云つて、神聖になつたので、取りも直さずその子は宗教的なる結帶式に由つて生れ更つた樣なものである、別の言葉で云へばそは更らに新に生れた樣なものである、してみれば首陀以外の階級にをる者は、その儀式に由つて生れ更つたものであるから人生れてその儀式を行ふ權利のある階級の人を、首陀に對して再生族即ちドヰヤーと云ふのである、そして若しその見供が婆羅門族の見供であつた時は、成長の後ち師に就いて粹陀の聖典を學習することを勵まねばならぬ規定である、尙ほ長ずるに及んでは、結婚して家を理め子孫を遺して祖先の祀を絕たぬ樣になし、

常に祖先の靈に對しては、禮拜供養を怠つてはならぬことゝなつてをる、然し婆羅門は一家に對し祖先に對して一切是れ等の俗世間的の義務を果し了はつた後には、更らに冠を掛けて山村に退き、樹下石上閑雲野鶴を伴つて、その間深く宗教上の事項に思を潛め、沈思冥想自身の解脱に努めるのである、そこでもつて彼の禁欲主義を實行し、肉慾勵殺を努める婆羅門教の梵士サヌヤーシンを生ずるのである、是れ等の禁欲道士サヌヤーシンは、彼の佛教の比丘よりも、一層その持戒修行嚴重であつて、西洋中世紀に於ける基督教の修道僧にいやまして禁欲主義の實行に努めてをるのである、さうして婆羅門教の梵士サヌヤーシンは斯く禁欲主義に由つて自ら己れに克つの氣風を養生し、遂に此方法に由つて個々の小我ジーヴ、アートマンを否定し去つて、大我即ちパラム、アートマンと合躰(ユニオン)せんことを計り、大我即ち唯一實在の梵天と冥合しやうと期待してをるのである、是れが則ち婆羅門教の眞解脱(ニルヴァナ)又の至境であるのである、欲しや惜しや、惜いや、可愛やの慾念妄想を斷滅し、斯かる妄想慾念から成り立つてをる火宅の現世を、悉皆無明の府、轉倒の邪見と觀破して、梵天の眞實躰に冥合飯入するの努めは、當時婆羅門教徒の考へたる眞の宗教的生涯の仰望してをる所の究竟地であつて、又その倫理道德の至極する唯一の目的と云ふことになつて來た、是れ或は肉躰を以て精神の桎梏(しつこく)である、繫縛であると卑み、精神が肉躰を離脱することを、眞解脱と敎へ(僧佉哲學)、或は宇宙に於ける唯一の實在は獨り梵天あるのみ、現象差別の世界は皆な迷の世界である夢の世界であると貶黜し去つた所の抽象的一元論又は万有神教(吠檀達)の教へし所の根本的教義からして、必ず是非ついて出てこなければならない所の婆羅門教の倫理道德上に於ける寂靜主義と云ふものは則ち是れである、婆羅門教の思想は既に斯くの如く山中獨善を尊び、禁欲寂靜是れ旨とするが故に、人生の多苦を悲難し、絶對的厭世主義たるは云ふまでもなく、さうしてその思想の系統を承けた佛教が、厭世主義多苦觀の思想をその中に藏し、寂靜主義の分子に富むことは、實に歷史發達の必然的歸結と云ふ可きである、そは實に今更ら事々しく論ずる迄もないことである、佛教の中に厭世主義寂靜主義の分子の含有されてをるのは當に含有さる可き理由あつて含有されてをるので、別に今更らの樣に驚くにも當るまい、それは基督教中に荒誕不稽なる猶太固有の奇蹟分子が多く混在してをるのが、歷史的發達の必然の理數であると同じ理窟であらう、そんなことをいまさら佛教や基督教に向つて云ふにも當るまいが、――それはそれとして――今自分は婆羅門教の發達を敘述するに際して、是非こゝで一言して置かなければならないことは、婆羅門教の眞精神、斯教の究竟目的、その奥の手とでもふ可き彼禁欲主義肉慾勵殺、唯一是凡の躰即梵の本躰中に吸收せられ沒入し去らるゝことを最後の目的として起る寂靜主義なるものは、彼の煩瑣なる外形の儀式、血肉是れ旨とする犧牲の奉獻、結婚して子を擧

げ、一家の繁榮繼續を企圖する婆羅門道德の諸作法と、全く其眞旨を探ぐれば、實に矛盾撞着してをるものであると云ふことである、何んとなればこは則ちショーペンハウエル氏の所謂、各人がその生きんと欲する意志の永續を計るの舉であつて、その生活意志こそ、その迷の根本である、一刻たりともそを早く斷滅して、梵の唯一實在の本躰に還沒復歸せよと勸むる生活意志の否定、換言すれば生きんと欲する意志の絶滅を謀る寂靜主義とは、實に氷炭相容れず、天地雲泥の差あつて存することを認むるからのことである、思ふに嚮者に頗る樂天的であつた印度のアーリヤ人種が印度河畔から恒河（ガンガ）即ちカンジェス河の畔に居を移すに至つてから、自然氣候風土の相違を初め、階級制度の嚴立は、人才榮達の方途を缺き、沐猴にして冠する如き愚人、却て世襲の餘威を以て、依然上に在りて不義の虚榮を貪りつゝあるより、人をして、自ら天道の不公平に泣き、世の味氣なきを感ぜしめ、加ふるに群雄割據干戈止む時なく、人心その堵に安んぜざるの甚しき、遂に人々この土を以て火宅の厭ふ可きに比して、究竟の理想を唯一至上の梵天の彼岸に認める樣になつたのであらう、印度當時の社會は道德上の方面から之を觀察しても、亦頗る矛盾に滿ち、その上下の不調子亂雜窮りなき社會は、又當時より甚いものはなかつたであらう、釋迦佛陀がその生涯の實際的活動の方面を、彼の四姓の別に拘泥せず、唯智德の多少に由つて人々の品格に次第を認め、社會改良の事業に向つて直進せられたのは、決して偶然でない、釋迦佛陀の出世は實に印度の社會に於ける早後の沛然に擬す可きものであつたのであらう、然し自分は釋迦の佛教に入るに先うて、釋迦に少しく先つて一派を開いたプルドパマーナの耆那教のことを一言して置かう。耆那教は佛教中の一派であるが如き說があるが、それは謬てあつて、耆那教は佛教と相前後して、紀元前第六世紀の頃印度に存してをつた全く佛教以外の一宗教であつたのである、耆那教の開祖はプルドパマーナ――又は皆の波奢婆（パールシュヴ）に初まると云ふ――と云つて、釋迦と同じ刹帝利中の王族である、プルドパマーナは釋迦成道以前に於て既に婆羅門教に反對した一宗教を開いてをつた、プルドパマーナは釋迦と能く似て、齡三十の當時出家し、勤苦十二年間、修行の功績んで、ジナ即ち勝者となり三十年間摩揭陀國や舍衛國に遊化說法して遂に流焉この世を辭し去つた聖哲である、思ふにプルダマーナは波奢婆の說を承け繼いてそれを紹述大成したものであらう、耆那教の開祖の家系が王族であり、その出家成道の經歷の工合が如何にも釋迦と能く似てをるばかりでなく、耆那教は亦佛教と同く鞞陀の聖權を奉ぜず、婆羅門教の虚式主義に堪へかねて、それに反動して起つて來たと云ふことは佛教と同一である、從つて又その教理の如きも佛教と同じ樣に幾多の類似點を有してをる、例之ば彼の佛教の五戒（殺生、偸盜、邪淫、忘語、飲酒の禁）中初の四戒は耆那教も亦之れを殿守することを勸め、その最後の一戒即ち不飲酒戒の代りに、耆那教は尙一層廣

潤に、耆那教の行者即ちヤチスなるものは、金銀財寶等凡て世の中の事物の爲めに心を動かすこと勿れとの一戒を加へてをる、してまた特に耆那教が力を用ゐて八釜敷云つてをつた所のものは殺生戒である、殺生戒は最勝無上法なりとは耆那教千歳不磨の格言である、則ち肉を食はざることは勿論、歩行するにも路上の生物を履み殺さぬ樣注意し、呼吸するにも空中の生物を吸收してそれを殺さぬ樣努めねばならぬ、蜜にはその中に生物の生命ありとて食はず、水には細虫あるを思うて浴せず、又水を飲むにも必ず濾過して水中の生物を飲下することを避け、晴中には何に物をも食はぬ、是れはその食物中に生物の存するを氣づかふてゝある、凡て斷食を勸め、殊に雨期に於て（是れは佛教の安居（あんご）に當る）斷食をするし、更に進んで自殺するに至ればそれこそ解脫の德あるものと說く、又靜坐沈思少しも坐を離れぬ不動の行を以て解脫の方便となし、裸躰で毒虫に刺されるのを忍耐することを至大なる德行としてをつたのである、斯樣にして畢竟禁欲主義を實行して苦樂を以て濫に心を動すことなく、苦樂以外に超然しやうと努め、斯くして遂に如何なる苦をも苦ともせず又樂をも眞の樂とせず、凡て苦樂の表に悠遊自適すると云ふことが出來れば、それが則ち耆那教の解脫である、それであるから耆那教は此の點は餘程希臘哲學のキニーク學派（デオゲネース氏の如きその好適例である）やストア學派、の解脫觀に酷似してをるのである、耆那教の徒が以上の精神で肉慾を勦殺し、裸躰にて

道世修行を實行するからして、それて彼等を呼ぶに裸躰派即ち尼犍子（ニケンシ）と云ふ名稱が出來て來たのである、この點から又考へて見れば、耆那教は婆羅門教の革新者として起つて來たと云ふことは、佛教と同じであるのが、耆那教は佛教から見るとまだ〳〵禁欲主義の分子が勝つてをるのであつて、實際の修行上から云へば佛教をもう一層禁欲主義にしたものが耆那教であると云つても差支へないのである。然しながら耆那教は尙ほ又その理論の上即ち哲學においても又宗教上の根本主義から云つても、佛教と非常に違ふ所がある、それは外かでもない釋迦は無我を說いて僧佉哲學の云ふ如き、我の存在を否定したのであるが、耆那教は個人〳〵の小我の存在を許すと同時に又宇宙の一大精神即ち大我の存在を許るしたと云ふことである、耆那教は佛教と同く無神論であるが、佛教と耆那教の異る所は、一は無我說であり他は有我說であると云ふことである、こゝが耆那教佛教の非常な根本的の相違である、耆那教も佛教も共に慈悲博愛を敎へてをるのであるが、佛教の慈悲博愛は無我の敎理上に立つた慈悲博愛であるし、耆那教の慈悲博愛は有我の敎理に據つてをるのである、こゝが又佛敎と耆那敎の異なる所である。

耆那敎は旃陀羅笈多（チャンドラグプタ）王の朝に、南北の二派即ち空衣派（ディガムバラ）と白衣派（ヒヱタムバラ）の二派に分かれ、前者は敎祖の精神に則つて裸躰修行を主張し、後者は之れに對して異議を稱へたものである、又白衣派は女人も解脫を得て涅槃に

入ることを得と許すのであるけれども、空衣派は女人に涅槃を證ずるの力なしと說くものである。

# 第十四章　釋迦の佛教と印度に於ける佛教の發達

印度社會の宗教界道德界哲學界の有樣が凡そ先づ上述の如き有樣であつた秋に當つて、嘗世の偉人三界の大聖釋迦佛陀が世に出興せられたのである、釋迦とは元來その種族の名であつてその本名は喬答摩即ち瞿曇と呼び幼名を悉達多と云つた、父は首圖駄那即ち淨飯大王であつて母は摩耶夫人であるそれであるから釋迦は元來宗教のことを掌る家柄である婆羅門族のうちに生れたのでは無くつて、武夫即ち刹帝利の家に生れたのである、悉達多太子は生れて七日目にその母摩耶を喪ひ、摩耶の妹波羅闍波提（即ち釋迦の姨母）に養育され、長じて聰明穎悟文武兩道に秀で、能く一を聞て十を悟り、婆羅門の老學者と雖も舌を卷いた位であると云はれてをる、釋迦の生れられた迦比羅衛城は現今のヒマーラヤ山麓寧波羅の南で、今日のベナレス市から北方四五十里の距離に在る所の恒河の支流ラプチ河の下流に當る土地である、その生誕は紀元前第六世紀の半頃――四月八日の生誕と云ふ――であつたらうといふことが先づ眞に近いのである、然るに彼は十七歲にして妃耶輸陁羅を娶り、二十九歲に羅睺羅なる一子を設け、一國の儲君として諸有世間的娛樂の間に生活し、何に一つ不自由なく暮らしてをつたのであつたが、當時印度人の特有性となつてをる沈思冥想に耽り、多苦悲哀の念想に促さるゝと頗る熾んであつた、そこで偶王城の四門に出遊して生老病死の四苦を感ずることと益々大に、遂に出家せんとする志堅く一夜――十二月八日と云ふ――更深うして四隣閑寂人定まるに及び、密に王宮を脫して其愛馬犍陟に乘じて馬丁車匿を從へて東行十餘里藍摩の地に至り、阿伐彌河畔の深林に入つて鬚髮を剃除し衣服を改めて袈裟に更へ、その從者車匿を諭して王宮に歸へり曲さに太子出家の消息を傳へ報ぜしむることゝされた、此に於てか昨日迄は金殿玉樓の中に榮華の夢を貪つてをられた悉達多太子も、今は黃衣圓鉢の淨行梵士一乞丐沙門と變つてしまはれたのである。

そこで釋迦は先づ跋伽婆なる苦行禁欲の梵士を訪問して生老病死を解脫する方法を尋ねられたけれども、その禁欲勵行主義は釋迦の意を十分に滿足さする譯にいかなかつた、そこで釋迦は跋迦婆仙人のもとを辭じ去つて摩揭陀國の首都王舍城の地を經、行く々々食を乞ふて尼連禪那河畔に至り、途上三人の事火外道を訪ふて法を談じ、遂に進んで阿羅邏迦闍と呼べる僧侶哲學派の學者のもとを訪ふて親しく面會し、その道を尋ねられた、然し尙ほ釋迦の意を滿足するに足るものが無かつた、そこで更に又鬱陀羅々摩子仙人の所を訪問してその敎を受けて見られた

が、その學說を聽くに矢張僧佉哲學の根本主義に立つてをる阿羅邏迦闍の說と大同小異であつたから、釋迦は到底こゝでもその學說に滿足する譯にいかなかつた、そこで釋迦は堅く決心して從來研究した所の僧佉の哲學で滿足が出來ない以上はとても仕方がない、今よりは人にたよつて敎を承くるよりか、寧ろ自ら研鑽して宇宙の眞理を闡明し、生老病死の苦因を探究するより外に道がないと考へて、爾陀羅々摩子仙の許を辭し去つて尼連禪河の東岸伽闍尸梨沙の苦行林に入つて修業を勤むること六年、身躰疲勞し肉落ち骨出て見る影もない禁欲比丘となられそのの生命も將に危からんとするの有樣になつた、而かも尙ほ何等の自得する所もなかつたから、釋迦はこゝに醒然大悟する所あつて、彼の肉慾勵殺の如き方法に由つて徒に身躰を苦めたからと云つても、決して眞理を見出すことは出來ない生老病死の四苦を解脫する眞因とはならないと云ふことに氣が附いた、そこで釋迦は尼連禪那河の淸流に入つて一浴し、難陀婆羅と云ふ村女が釋迦に供養した牛乳の粥を啜つて、僅に其疲れたる氣力を回復せられ、尼連禪那河を渡つて西南、迦耶の地に出て、こゝでその有名なる菩提樹即ち畢波羅樹の下に吉祥草を布いて端坐觀念してこゝをその金剛坐と定め、如何なる障礙に逢ふも眞理を證悟し、生老病死の苦因を度滅するの方法を見出さずんば、終天その座を去らずと決心せられたのである、是れ金剛坐の名ある所以である、然るに釋迦が嚮者に王宮をぬけ出て、山に入り道を學ばんとせられた時、父王淨飯は車匿の飯り報ずるに遇つて大に愕き、悲嘆の餘り釋迦をして是非その志を翻へして王城に復歸せしめんと努められたけれども、遂に釋迦の道心堅固にして鐵石の心腸は再び翻へす可くも見えなかつたから、父王も遂に斷念してその代り憍陳如跋提婆沙波摩訶男阿說示の五人の王臣を遣しして太子と共に乞食修行し、窃に太子を諜らしめる樣にされてをつたのであるが、今やこの憍陳如を初じめとして他の四人の比丘どもは、太子の難陀婆羅の供養した牛乳の粥を受けて之れを口にせられたのを見て、これは釋迦の道心退轉したものて共に語るに足らないと考へて、釋迦の許を見捨てゝ去つてしまつたのである、然し釋迦はそんなことには少しも頓着することなく、迦耶の地に止ること四十九日、その菩提樹下を以て無師獨悟の道場と定め、結跏趺坐以て我道成ぜずんば亦此坐を起たずと一心に誓約して、內外幾多の誘惑なる惡魔即マーラと健鬪し、遂に釋迦の三十五歲――二月八日の早曉――を以て、廓然大悟宇宙の大眞理を獨覺し、釋迦の腦裏に多年蟠つてをつた所の一大宿題たる、生老病死の四苦を解脫する道を悟り得られて、こゝて一介の乞食沙門は佛陀てふ正覺位を成じ、阿羅漢（阿羅訶）位を證じて如來世尊となられたのである。

釋迦はこゝて以つて先づ自ら佛陀覺者となり、大聖釋迦牟尼世尊となられたのであるが、偖てその釋迦佛所證の眞理を、如何にして一切の衆生に傳ふ可きか、如何に

して一切の凡衆を化益す可きかと云ふことは、又此に釋迦の胸中に油然として湧き來つた疑問である、既に自ら無上尊となられた佛陀は、自分丈け悟が開けたらそれでよいと滿足してをる譯にはいかないのである、どうかその自ら悟つた正道を世に說き弘め一切の衆生を救ひたいと云ふ博愛慈悲の心が動いて來て止まないのである、釋迦は實にこの思ひに堪へられなかつたものと見えて、その釋迦自身の上求菩提の事業終るや、直ちに下化衆生の方策を考へられる爲めに、沈思默想に多くの日子を費された樣である、因果經に我が得たる所の智慧は微妙最第一である、然るに衆生の根氣が鈍くつてそを聞き分ることが出來まいからこまるが、是れ等の類を云何にして度したらよからうやと考へられたと書いてある、そこで釋迦は先づ近きより遠に及ぼし少しでも有緣の者から感化を初めやうと思つて、彼の一旦釋迦が牛乳の粥を啜られたのを目擊して其志願が挫けたものと思つて、その御許を去つた憍陳如等五人の比丘を、先づ濟度しやうと考へられた、そこで釋迦は婆羅奈斯國即ち今日のベナレスの地に赴かられ、ベナレスの鹿野苑で遂に憍陳如等の五群比丘を濟度せられた、この鹿野園の說法は釋迦の正覺を成じて佛となられてから初ての說法であるから、世之れを稱して釋迦の初轉法輪と云つてをる、是れは思ふに因果經に釋迦が自ら悟八正道云々欲赴波羅奈轉甘露法輪と云はれたのに基くのであらう、然しこゝで注意せんければならないことは、轉法輪と云ふことは、パーリ語でドハムマ、チアッカパッタムと云ふので、其意味は正法國土の建設又は正義の國土の建設てふ義であると云ふことである、であるから下度此の正法國土と云ふことは基督教に所謂天國に相當するのである、ベナレスの鹿野苑に於ける釋迦の最初の說法は、中道の敎であつて、之れを尙ほ細に分つて云ふて見れば、四聖諦と八正道である、即ち釋迦は四聖諦の說法に於て人生の多苦なる事實（苦諦）と、その多苦なる原因（集諦）と、その苦を滅せざる可らざること（滅諦）と、從つてその苦を滅す可き方法（道諦）とを說法せられ、その道諦を八つの正しい方法條として數へ擧げられた（八正道）即ち釋迦は當時印度人の考へてをつたやうに、人生を以て苦の世界としたが、偖その苦の世界を解脫する方法として、八の中正なる道德を履行す可きことを敎へられたのである、その八正道と云ふのは正信と正思と正語正業と正命と正精進と正念と正定とのこの八個條である、今この八個條を一々に註解してをる暇はないが、八正道と云ふのは前にも云つた通り、八の中正なる道、即ち佛敎の所謂中道孔子やアリストレースの敎ふる中庸のことである、然らばこの中道とか中庸とか云ふことは、何にものから見て、中道であり中庸であり、如何なる他物に對して中道であり中庸であるかと云ふに、それは釋迦自ら轉法輪經の中に公言せられてをる通り、一は極端なる禁欲主義肉慾勵殺の苦行と、又一は放逸無慚なる極端の亂行を縱にして恬然顧みず、却てそを奬勵する快樂主義、唯物主義、感覺主

義（讀者は婆羅門の苦行外道、例之ば跋伽婆仙の如き、又は斫婆迦即ち順世外道の唯物主義快樂主義なと思ひ合はさるべし）との中間に立つて、そのどちらにも偏せずその一方にのみ傾かぬ中庸の履行を釋迦は勸められたのである、極端なる快樂主義と極端なる禁欲主義との兩者の中庸を取つて進むのが、眞の道德の要義である、これが眞解脫に到達するの道である、是れが生老病死の四苦を度滅するの眞の方法であると、かう敎へられたのである、然れば人生は多苦であるからと云つて二途に此の世がいやになり、肉躰を殺し肉慾さへ絶てば、それで解脫が得られるかの樣に思ひ、その極身を殺してでもしてしまつた方が、早や途であらうと、自暴自棄して、自殺でもしてしまふのが、眞に解脫に達するの道ではなくつて、眞の解脫の地位に達し、眞に生老病死の四苦を免るゝことの出來るのは、中庸の道を守り中庸の德を實踐躬行するに在る中道を實際に嚴守勵行するに由つて、初て到達することが出來ると敎へられた、こゝが又自殺を以て解脫と思つた者那敎と佛敎との違である。鹿野苑の論法は四聖諦八正道であつて、その要旨は人生を苦界と觀じ、その苦を斷滅するには中庸の道德を實踐躬行するに在ると云ふことに歸着するのであるが、その敎は極めて易簡平明で、少しも他の奇とする所はないのである、然しこの說法は釋迦成佛以後最初の說法であるから、佛陀の熱誠はその說法の全部に現れ、佛陀の人格は生き〳〵としてその說法中に躍如たるものがある、佛陀の初轉法輪が一旦釋迦に不信用を措いてその所を去つた憍陳如等の五群比丘を感化して、直に佛門に歸せしめたと云ふことは、蓋しこれが爲めである、こゝで佛、法、僧の三寶の基が出來た、彼のパリサイの敎徒は已れ等の敎師と異つて耶蘇の說法を聞いてそは權威をもてる人の如く說くと云つたさうであるが、吾人は佛陀の初轉法輪の說敎には確に普通の婆羅門敎の學者に就て敎を受くるのとは違つて、權威をもつてをるものから說法を聞くの感が非常に多いのである、嗚呼何んと佛基三敎の兩聖その人格の感化期せずして致を一にするものがある所以を見る可きではないか、余は實にこの釋迦の初轉法輪の四聖諦八正道の說法は、之れを耶蘇の山上の垂訓と併べ稱して、各々佛基兩敎の敎主の人格を想望することが出來やうとおもふのである（耶蘇の山上の垂訓は新約全書馬太傳第五章にあり）。

釋迦が鹿野苑に留錫して說法されてをる間に、波羅奈斯の一長者の子耶舍（ヤシヤス）なる者をも敎化して沙門となし、尙ほ進んでその父母を初めとして耶舍の妻奴朋友等皆な佛門に歸依して在家の佛弟子となつた、こゝて以て初めて在家の男信徒即ち優婆塞（ウパーサカ）と在家の女信徒即ち優婆夷（ウパーシカ）とが出來た、それからして釋迦はその諸弟子を四方に派遣してその福音を諸方の人民に宣傳せしめられた。

釋迦は鹿野苑を去て摩揭陀の王舍城に至る途上に於て、釋迦が成道前に道を訪ひし三人の事火外道を敎化して佛弟子沙門となし、王舍城の郊外杖林（ヤスナヴァナ）に於て法本無

我の教理を說いて外道の斷滅無論の一種常(實在論の一種)二見に執着する迷見を破し、万物殊に人は因果法網中に出沒起伏しつゝ行く所の業感の理を說破して頗る剴切痛快であつたから、國王頻毘沙羅は直に佛門に歸し、竹林精舍を建立して釋迦說法の道場と定められた、そして又三人の婆羅門舍利弗、目犍羅夜那即ち目犍連及び摩訶迦葉また佛門に歸し爾來摩訶迦葉は佛教界の重鎭となつたのである。

そゝ時又舍衛國に一人の長者があつて、能く孤獨援けなきものを憐みて之れに財物を施與したから、阿那多擯荼揭即ち給孤獨といふ名を得てをつたが、この人が又篤く釋迦に歸依して釋迦の爲めに、自ら舍衛國の太子祇太の園林を購つて、之れを釋迦に寄附し、精舍(寺)を建立して佛教弘通の資としました是れは彼の有名なる祇園精舍であります。

然るに佛は成道以後五年を經て、偶々その父王淨飯の病篤きことを聞かれたから、その古郷に歸りて父王に一たび省せんことを企て、遂に本國に還へられましたから、父王は大に喜ばれ親戚故舊の耆耋者な大早の雲霓を待ちこがれてをつた樣な有樣で釋迦を迎へました、然るに一方は名にし負ふ王家のことゝて、その王家の太子である釋迦が、偶々十二年目でもどつて來たと云ふに、三衣一鉢の乞食比丘の相形であるから、何ぼなんでも世間の手前からもどうかそんなことは今日がぎり止めてもらひたかつた、襤褸一枚に片缺椀一つ手に持つて、王城の周圍を托鉢して歩るかれては實に居ても立つても堪まらないのである、そこで王家の人々はどうか釋迦をして再びもとの悉達多太子にしたいと思つて切に是れを釋迦に請ふたが、釋迦は諸行無常にして浮世の頼みがたく、榮華は如幻如夢に過ぎないから諸方に遊化して一切衆生に佛陀大悲の妙法を宣說することゝそ其に自己の天職である、有形にして小なる國王とならんよりは無形にして大なる斫迦羅伐底即ち轉輪聖王となることが自己の本職であると云ふことを諄々として說法せられた、そこで又釋迦の說法に感激して異母弟難陀實子羅睺羅を初めとして、貴族阿蒐樓馱も皆な佛門に歸して比丘となり、釋迦の叔母波羅闍波提及び耶輸陀羅等又出家して比丘尼となつた、是れが比丘尼の初である。

仰々釋迦は二十九歲で出家し、三十五歲で成道して佛陀覺者となり、賓壽八十歲を以て入滅せられたのであるが、其間東奔西走席暖まると云ふ暇なく、四方に遊行して佛陀大悲の化を、四姓の別なく何れの階級の人民にも等しく光被せられてをつたのである、殊に釋迦が四姓の別の如き門閥は全くその眼中に置かれていなかつたと云ふことは、其の信者の中には王侯相將貴族平民を普く網羅してをつて摩訶迦葉の如き大學者もあれば優波離の如き理髮業をやる首陀種もある頻毘沙羅王の如き貴人王侯もあればアムバパーリの如き賤業の娼婦もある、甚きに至りては憍尼利摩羅と云ふ盜賊の悔ゐ改めて出家したのさへあつて、皆な一樣に釋迦の威

化を蒙り、佛門の弟子は門地の高卑に由つて次第を定めず、智慧德望の多少に由て自ら上下の別がきまつてくるのであつた、異邦人の使徒ポーロが基督の中には希臘人なく猶太人なく男なく女なく主人なく奴隸なく、是れ等の區別は皆な基督の中に於て一になつてしまふとかう云つてをるが、丁度佛教もさうであつて、釋迦の眼中には婆羅門なく刹帝利なく毘舍なく首陀なく、皆一味平等の法樂を享受することが出來るとは、尙ほ四大河の水が同一海中に歸入して同一味の海水となると同一であると、釋迦は說かれたのである、增阿含經の中に、四河入海復無異名、四姓出家同稱釋氏と云ふたのは則ちこの意味である、釋迦の敎では再生族と云ふ語は婆羅門敎で云ふ樣な門地の上から云ふのではなくつて、道心の有無に由るので、淸き道心の發起した者は如何なるものでも、皆な再生族であるそれであるから佛の說法は、又當時婆羅門敎の哲學者の云ふ樣な乾燥無味の煩瑣哲學でもなければ、又後世の佛敎徒が互に宗派根性に驅られて、自讃毀他妄りに他を擠排するが爲めに作つた瑣煩なる宗乘でもない、巧に醫喩を用ゐて簡易にその法を說かれ、釋迦と云ふ一大人格の根底から滾々として湧き出してくる甘露の法水を以て群生を潤されたのである、それであるから釋迦が說法に用ゐられた言語は、決して梵語即ちサンスクリット語やペーリ語の樣な、今日歐洲人の拉丁語希臘語、日本人の和漢文に相當する、印度の學者間丈に通用する言語のみではなくつて、其地方々々の俗語を用ひて說法せられたのである、或る婆羅門の如き、釋迦の說法を全く當時の學術語即梵語に翻譯したらよからうと云ふことを釋迦に請ふたが、釋迦は之れを却けられたと云ふことであつて、釋迦自らは勿論又その弟子にも、等しく各地方の俗語の卑を避け殊更ら梵語やパーリ語を以て說敎せよとは命ぜられなかつたのであつた、是れは丁度耶蘇が其說法にヘブリユー語や希臘語計りでなく、依然彼の俗語アラマイック語を使用されてをつたと同一であるして又耶蘇の福音は比喩が多いが、釋迦も亦どうもさうであつた樣である、基督敎では種子播きの比喩とか芥子種の比喩とか云ふことは隨分バイブルの中でも有名であるが（馬太傳第十三章）丁度是れと同じ樣な比喩談が、釋迦の說法にも在る、今その一二を示めせば、先づかう云ふ風である、則ち或る時キサーゴタミーと云ふ一人の若い婦人があつたが、その婦人がその最愛の一子を病氣さして、とう〳〵喪つた、然しその婦人は悲哀の情に堪へなくつて、どうかして、もう一度生きかへしたいと思つて、非常に起死回生の名樂もがなと、諸方をさがしまはつてをつたが、時に偶々釋迦の所へやつて來て死んだ子供を救ふ樣な何にか名藥はありませんかと尋ねた、すると釋迦は深く思はるゝことがあつて、芥子種をもつてこいと仰せられた、芥子種さへもつて來たらば、それで死んだ子供を生かしてやらうと仰せられた、然しこゝに一つ大切なことは、その芥子種は是れ迄まだ何人も死んだことのない家からもらつてこなければい

かないと云はれた、そこでキサー、ゴタミーと云ふ若い婦人は宜うございますと云つて、直ぐ樣諸方の家に就て芥子種はないかと尋ねてあるいたが、芥子種は何れの家にも有つたが、その家でまだこれ迄何人も死んだことのないと云ふ樣なる御眺らへ向の家は一軒も見當らなかつた、そこでしばらく諸方をうろつきまはつてをつたあとで、キサー、ゴタミーは釋迦佛陀の許へ再び飯つて、其事を言上し、芥子種は何處にもあるけれども死人をまだ出さないと云ふ家は一軒もありませんと云ふた、すると釋迦が、そこだ、世は無常である、老少不定と云ふとは何人も免れないのである、獨り生れ獨り死し獨り去り獨り來る、冥土の旅には親子兄弟夫婦朋友、誰れ一人も伴侶になつてくれるものはない、こは實に浮世の眞相である、最愛の子を亡くして悲哀に沈んでをるのは獨りおまへのみではない、世は皆なさうであると、かう諭されたから、キサー、ゴタミーも今はと氣が注いて、直に佛門に飯して比丘尼となつたといふことである、これが有名な芥子種の比喩である、又成道十一年目に釋迦が王舍城附近を遊化してをられた時、偶々迦戸婆羅堕閣（カシーンヴァラドヴァージャ）と云ふ婆羅門が畊作の祭をするのを見てをられた、其時諸人その釋迦たること知つて敬禮をしたすると婆羅堕閣は喜ばざる色あつて釋迦に云ふには我は御前（おんまへ）の見らるゝ通り、自ら額に汗して畊し、種子を時いて收穫を得、それに由つて立派に獨立して生活をして行くのであるが、汝比丘果して何に者ぞ、徒に他人に依つて衣食してをるとは、以ての外のことではないかと、かう反語しました、すると釋迦の云はるゝには、いや〳〵さうでない、我れも又畊して蒔き、收穫（をさめ）て食ふてをるのであるとかう云はれた、然し婆羅堕閣は比丘よこれは可笑（おかし）い、汝は農具一つも持つていないではないか、それで自ら耕しつゝ、額に汗して食つてをるとは抑々何事であるかと、又かう反問しました、釋迦は徐に諭して云はるゝに、我は正思、正信、正業等の農具を用ひて佛種を播きぞうしてこゝに正覺の收穫涅槃の果を得てをるのであると、かう云はれた、そこでこの婆羅門も釋迦の言に服し、遂にその口をつぐんでしまつたと云ふとてある、是れは種子播の比喩である、釋迦の平素の說法は皆なかう云ふ風に、易解直截實に寸鐵人を殺すと云ふ慨があつて、而かもそれが比喩で、所謂喩に非れば語り給はぬとパイブルの中に耶蘇のことを書いてあると同一である、決して彼の煩瑣なる哲學上の議論や、空論に耽つた淸談ではなかつたのである、それは又丁度耶蘇がその說法に比喩を用ゐられて、少しもパリサイ敎徒などの樣に學者臭い所のなかつたのと同一であらう、それは彼の有名なる耶蘇の訓誡である天國芥子種の比喩や種子播の比喩（馬太傳第十三章）などを讀んで見れば直ぐ分かるのである、今煩を厭はず比較研究の爲めバイブル中に在る耶蘇の比喩物語を適出してみやうならばかうである、則ち一日農夫が植物の種を播きに畑に行ふとしたがそのとき路傍へ遺した種は空中の鳥に啄みくはれてしまつた、又其農夫が瘠地に遺して行

つた種は幸に萌え出したけれども、根がはびこらなかつた爲めに日光の強力に燬かれてとう〳〵中途で枯れてしやまつた、次に又その農夫が路傍の荊棘の中へ遺して行つて種は、僅に成長はしたけれども、遂に荊棘の爲めにその發達を妨げられてしまつて十分大きくなり得なかつた、然るにその農夫が肥沃の土中に播いた種は十分その發育を全うすることが出來てその種の百倍にも六十倍にも乃至三十倍にも大きく生木したとのことである、と云ふのが、耶蘇の云つた種播きの比喩である、次に芥種の比喩はかうである、抑々天國は之れを喩へてみやうならば芥種の樣なものである、人若し之れを取つて畑に播けば凡ての植物の種よりも小さいけれども、生長すれば他の草木よりもずつと大きくなり、大空の鳥まで來てその枝に宿る程の大木となるのであるとかう云はれてをる。

然し又こゝに注意す可きことは、釋迦と耶蘇との二聖が使用されてをるこの比喩の說法を讀んでも直ちに分かるのであるが、等しく比喩物語で易簡直截の說法でも、釋迦のは矢張印度アールヤ民族の思想の系統を受け繼いでをられるからどこか理論的な所がある哲學風な所がある、之に反して耶蘇の方は元來耶蘇が哲學風な頭腦のない國民であるセム民族の中に生れたのであるし、その經歷から云つても耶蘇は一賤工の子供であり、その幼年時代の敎育も碌なも者はなかつたに違ひなく、耶蘇が深く學問した經歷などは餘り詳くパイブルの中に見えてゐない——唯一個所路加傳第二章四十六節に敎師と問答したことが書てあるばかりである——であるからしてどうしても幼少の折りから學問武藝の研鑽に勤めてをられた釋迦のごとく、その頭腦が學問的になつていないと云ふ一事である、こゝは極能くかみ分けんければいかぬ、釋迦と耶蘇とは世界の二大聖人であるから、非常に能く似寄つた所もあるが、又非常に違つた點があるのである、この兩者を混同してはならない、是れを明にするのは實に宗敎を學問的に研究する宗敎學者の責任である、然るに近頃は哲學から宗敎が彼れ是れ批評されるのを厭つて、西洋の宗敎家が甚哲敎は哲學でない、哲學と宗敎とは全く別物である、それであるから、哲學からどんなに宗敎が批評されやうが、そんなことは構つたことはない、哲學は宗敎を是非する譯にいかないのであると公言して、基督敎に逃げ場を與へてをるのを見て、大變都合のよいことゝ思つて、佛敎者もすぐ之れを眞似し、佛敎も宗敎であつて哲學ではない、殊に釋迦の思想の如きは哲學でなくして福音である、してみれば今日の哲學から佛敎を彼れ是れ批評するなど云ふことは謬つてをる、佛敎は哲學からどんなに攻擊を受けても構はないなどと、放言して憚らない人々がある樣であるが、是れは大變謬つた話であつて、一知半解の基督敎の知識を矢鱈振り舞はして佛敎を辯護しやうと云ふ無謀の輕舉から起つたことで、古いウパニシアッド以來六派哲學を初めとして、皆印度の思想は哲學宗敎合一の點に立つて出來てをるのである

と云ふ事實を忘れた謬見であらうと思ふ、殊に大乘教の如きは、カント、フイヒテ、シエリング、ヘーゲル、ショーペンハウエル、ハルトマン等の獨逸哲學の進歩せるものとその幽邃高遠を爭ふに足るのであつて、さうしてその佛教の淵源が實は釋迦の思想に在つて初ると云ふ以上は、少しも哲學の知識のない、大工の小供の創めた基督教とは、餘ほど同一とは見做されないと云ふことに注意せねばならない、釋迦と耶蘇との間には無論類似點はあるけれとも、又この差異點を思はないものは胡椒を丸のみにしたものだと評さなければならないのである、既に說明した通り釋迦は無師獨語の眞理を發見する前には阿羅邏迦蘭とか鬱陀羅とか云ふ樣な當時錚々たる僧侶派の哲學者と議論を上下し僧侶派の學說に同意が出來ずして、是れ等の學者の許を去つたと云ふてはないか、然るに耶蘇の傳記には一もかう云ふことは見えてをらない、こゝが私が明に耶蘇に比べて釋迦は一歩進んで哲學的であると云ふ所以であります、然しながら釋迦は成る可く例の比喩談で、何人にも理會出來る樣平易に而かも熱誠籠めて說法せられたのであつて、決して乾燥無味な煩瑣的哲理思辨に耽けられたのではない、否なそんな乾枯落寞の空理は釋迦の大に擯斥されてをる所であつた、それは釋迦がブッチ、アゴッタと云ふ婆羅門が、我は有なりとするか無なりとするかと云ふ問に對して、有とも無とも答へられなかつた所以である、若し之れを有と答へられたならば人をして常見に陷らしむ、若し之れを無と答へられたならば聞く者をして斷見に陷らしむ、斷常二見ともに釋迦の極力排斥さるゝ所であつて、共に釋迦の中道即ち中庸主義にかなはないのである、若し我即ち精神は有ると云ふ常見に陷るとすればどうであらうか、それは明に僧侶哲學の如く我の實在を許さなければならない、若し又我即精神は無いと云ふ斷見に陷つたとすれば、順世外道などの樣に唯物論になつてしまふのである、釋迦は我があるとする西洋哲學で云ふバークレーの樣な有我論者（唯心論又は心靈論）でもなければ、カバニーやフオグトの樣な無心論者唯物論者でもない、眞理はその中間に在つて存すると云ふことを信じられてをつたのである、そこで是れ等の問題には一切答へられなかつたのである、要するに釋迦は靈魂即ち我は有るか無いか、世界は有限であるか無限であるかなどゝふ樣な問題の研究に耽るのは、實際の宗教には餘り必要ではない、寧ろ無用の閑事業であると、かう考へてをられたらしいのである、そこで又箭喩經（中阿含經中にある）に在る樣な垂訓が現はれてくるのである、學者仔細に思ふ可きである、箭喩經の垂訓は一の比喩として考へても中々面白いし、釋迦が徒に空談以て世界の有限無限などを論ずる哲學的學究主義を排斥せられた有樣が、紙上に躍如として現はれてをるから、その大要を爰に擧げてみやう則かうである、或時に釋迦が祇園精舍に留つて說法してをられた時、鬘童子（マールンキヤープッタ）と云ふ佛弟子があつて、一日釋迦に尋ねて、世界は常住であるか無常であるか、有限であるか

無限であるか、身心の兩者は同一であるか違つてをるのであらうか、佛陀は死後存在さるゝか將た又存在されぬかと云ふ樣な問を發して、釋迦に是非この問に明答してくれよ、若し釋迦にしてこの問に明瞭なる答辯を與へてくれないときは、我れはもう淨行を止め、佛弟子であることを今日からよさうと、かう云ひ詰めたゝると釋迦はそんなことは甚だ理由のないことであつて、我れがそんな間に答へるか答へないかに由つて、淨行を止めるなどと云ふことは、以ての外のことである、それは丁度毒箭に當てられて痛手を負ひ苦み惱んでをる所の人に向つて、醫師が醫藥を與へやうとしてをるときに、若しその人の云ふに、我れはこの醫藥が如何にして造られ、如何なる成分から出來てをるかと云ふことが分からない中は、この藥は決して服用しない、又全躰已れをこんな目に合はした奴は婆羅門であるか、刹帝利であるか、毘舍であるか、將た又首陀であるか、己れの當の敵の目附らない迄は、決して用藥はしないと腥張つてると同じ事である、その人が緩急事宜に通ぜぬことの愚なることは何人も笑ふてあらふ、その藥の成分の取り調べや、敵の穿鑿の如きは、先づ痛手を治療して緩々やつてもまだ〳〵決して晩くはないのである、然るに先づそれを知らなければ藥を用ゐないと云ふのは、豈に事の先後緩急を知らないものと云ふ可きではないが、今も丁度是れと全じことで、無常迅速の世の中に立つて、如露如電の生命を有ち、朝は夕を頼みにすることの出來ぬ蜉蝣の生涯を送つて居ながら、其生老病死てふ毒箭の痛手を抱いてをつても、尙ほその四苦を解脫し療治しやうともせずに、先づ世界の終始有限無限など云ふ閑問題の解決を圖るは、愚に非ずんば則ち狂である、汝比丘宜く悛改して眞に佛道を成ぜんが爲めに如實に修行せよと訓誡された、こは實に佛が濫に形而上學的空想に耽ることを避けられたと云ふ明かなる證據である、そのことは丁度希臘の大賢ソークラテースが詭辯論者の樣に妄に口舌を弄して、戯論の上に於て、勝を一時に決めやうといふ樣なことを全く擯け卑んで、如實修行の實踐道德を主張されたのと同一轍に出づるものであらう、蓋しソークラテースの前にプロタゴラス、ゴルギアス、クリチアス等の如き詭辯論者の唯物論的感覺主義や快樂論あれは、釋迦の前には順世外道の如き極端なる詭辯論唯物論感覺主義快樂論があるし、ソークラテースも釋迦も、共に等しく是れ等の世道人心を惑ひ、風敎の紊亂を來す可き惡風を一洗しやうと思つて、奮然として身を挺して、蹶起されたのであるから、その思想の推移する所遂に致を一にするに至つたのは決して偶然でないのである。

釋迦はかう云ふ風に、年々その夏雨期三ヶ月間、結夏安居と云つて精舍即ち寺院の中に家居安座して、說法又は觀念に餘念なく、雨期過ぎれば常に四方に周遊して大法を宣說し、或は舍衞國に或は、摩揭陀國に祇園に竹林に、足跡殆んど恒河の平原に洽く、上は頻毘娑羅や波斯匿の如き王侯より、下は優波離の如き賤民に至る迄、等し

くその德化に沐浴し、不死甘露の法雨に霑はざるものなしと云ふ有樣になり、眞に四海同朋博愛平等の大慈悲主義を實現することが出來、多くの人の安樂の爲め、世間の憐愍攝受の爲め、人天の利益安寧の爲めに、四方に周行遊化せられてをつたこと、此に四十五年、王舍城を出でゝ當時阿闍世王の築いてをられた波吒籃子城を過ぎて、將來同地の繁盛ならんことを豫言し、醯蘭若河即ち跋提河畔に出て、此地の並木即沙羅雙樹の下に於て、病を得て臥床せられた、釋迦は遂に自らその起つ可らざることを知つて阿難陀等上足の弟子を枕頭に集めて、無餘涅槃(死)の近けることを諭し、若し彼れ等比丘弟子の心に疑ふ所あらば、遠慮なく此際釋迦に質す可きことを命ぜられた、時に滿坐肅然として皆な容を改め、唯涕泣嗚咽するのみであつて、衆皆な水をうつたばかりに森としてをる、唯その間時に慟哭の聲が一坐の靜さを破るのみであつた、時に偶〻蘇跋陀羅即ち善賢比丘と云ふ婆羅門がそこにやつて來て、佛世の値ひ難く正法の聞き難きを稱して、釋迦に臨終一期の說法を請ひ奉つた柄、釋迦は更に之れが爲め大法を獅子吼せられ、彼は直に佛弟子となつた、釋迦は最後に諸弟子に向ひ會者常離生者必滅の理を說いて世間相の無常を明にし、須彌山如何に高しとも大海如何に深しとも、日月如何に明かなるも、大地如何に堅固なるも、遂に消磨に飯し、枯竭に終り、西沒に飯し、無常に了る所以を諄々として訓戒せられ、決して釋迦の入涅槃(死)を以て憂惱と爲す勿れと諭され、尋いて釋迦が涅槃の雲に隱れたる後は、最早や生きた佛陀の說法を聽聞することが出來なくなるからして、釋迦の生前說示した所の戒律波羅提木叉を嚴守して、諸比丘の大師と仰ぐ可きことを遺命し給ひ、この戒律こそ則ち諸弟子が巨夜の明燈にして、貧人の大寶である、一切眞實の智も亦之れに緣つて究竟することが出來るから、弟子は宜くこの戒法に隨順して、それを唯一の大師と仰がねばならぬと云ふことを、懇々敎示せられ、寶壽八十を以て遂に涅槃の雲に隱れ給ふたのである、時正に紀元前四八〇年頃であつたのである、嗚呼鳥の將に死なんとするその鳴くや悲く人の將に死んとするその言や善し、と三界の大道師釋迦佛陀臨終の垂誡は如何程遺弟の信念を感奮激勵したかは想像さるゝであらふ、然し釋迦のこゝで云はれた戒法と云ふものは、決して後世に云ふ如き二百五十戒の、五百戒のと云ふ樣な戒法ではなくつて、極その根本的の戒律であつたことは勿論である、殊にその戒律の如きも、重んず可き所は戒の精神に在つて、戒の文字の上に存しては居らないと云ふことは明瞭である、釋迦自らもそれを公言してをられた、そこでその根本戒律の如きは諸惡莫作、諸善奉行、自淨其意、是諸佛敎、とふ、七佛の通戒を初めとして、五戒十戒位のものであつたらしい、その五戒十戒の如きも隨犯隨制で出來たので、惡いことをした者があつた度毎に戒律を規定してそを戒慎せしめられたのである、十戒の出來たことに附ては後人の附加した傳說もある樣であるから、その成立の歷史はこゝ

に擧ぐることを止めて、彼の七佛の通戒の偈と稱せられてをる諸惡莫作諸善奉行云々と云ふ戒律と、五戒の成立した次第顚末を今簡單に述べて釋迦の戒律が隨犯隨戒であつた所以を明にしてみやうと思ふ。

先づその七佛通戒の製せられたのは、釋迦が舍利弗と目犍連とを以て僧團中の上位に置かれたとき、僧伽中の比丘に不平を云ひ出したものがあつたから、この制戒を與へられたのである。

次に不殺生戒はどうして出來たかと云ふに、或時釋迦が王舍城で雨期結夏即ち安居してをられたとき、その大雨を凌ぐ爲め諸弟子が小さなる假の草小舍を結んで、銘々にそこに住んで安居するのである、然るに王舍城の市街宅地の旺盛と共に、家を造るに用ふる草木が拂底になつて來て中々僧侶の自用に迄足らなくなつて來たそこで檀尼迦と云ふ比丘は、もと瀨戸物職の家に生れた陶家の子であるから、安居に用うる建物の窓とか、戸とか、閾とか云ふものを造る材木の不足を補ふ爲めに、その邊の赤土を取つて來て陶器に製して、陶器製の窓戸を造つた、然るに釋迦はそれを見られて、その檀尼迦が使用した赤土の中には無數の微小動物がをるから、その土で安居の家材を製するのはつまり生物を殺すことになるので、釋迦は大に檀尼迦の今後を戒められて、こゝに不殺生戒が出來た。

次に又不偸盜戒はどうして出來たかと云ふと、六群比丘と云ふ惡比丘があつて、日暮に或る河畔に洗濯をしてをる人の白布を盜んだことがあつたから、こゝて釋迦は不偸盜戒を制して是れ等の惡を戒められたのである。

次に不邪婬戒はどう云ふ歷史をもつて起つて來たかと云ふに、須提那と云ふ一長者の子供が佛門に歸し、釋迦に從つて比丘の生活を八年間やつてをつたが、八年目にその故郷に歸つて父母に省した所、須提那はその父母が荐に比丘の生活を止めて家系の斷滅を防げと强請するに逢つて、止むなくその元の妻と同衾して、一子を擧げたのである、然るにその後須提那は釋迦の所へ歸つてからも、常に妻に接したことが氣に懸つてならなかつたのである、戒定慧の三學は佛敎に於ては幷び重んじて、何れも輕重なきものでなければならんのに、須提那はこの中の戒を破つたからどうも良心に責められ、苦痛に堪へなかつた、そこで須提那は釋迦の前でそのことを懺改した、すると釋迦は寧ろ毒蛇の口に觸るゝも女人に觸るゝ勿れ、毒蛇に觸るゝも罪なく、女人に觸るれば死して地獄に墮すと、かう云はれて、不邪婬戒を制せられたと云ふことである。

次に不妄語戒はどうして出來たかと、云ふと、それは婆裘比丘と云ふ惡沙門が、徒にその中間の比丘の德行高いことを稱讃して俗人を僞り、供物を得て之れを着服したことがあつたから、そこで佛はさう云ふ虛言を云ふ、即ち妄語を云ふことはならないと、戒められて、不妄語戒を制せられたのである。

次に不飲酒戒はどうして出來たかと云ふと、矢張婆裘比丘が前に云つた樣な卑劣手段を用ゐて財寶を得、それで以て美酒佳肴に飽き、一日一食の制を嚴守しないから、佛は不飲酒戒を制して、是等の徒を戒められたのである（以上五戒の歷史は高楠博士の聞錄抄出）。かやうな工合にして、不殺生、不偷盜、不邪婬、不妄語、不飲酒の五戒が出來たのである、然しあまり永くなるし、又後人の附會說もあるやうであるから、十戒の成立した歷史は之れを說くことを畧して、その戒目丈を擧げてをかう、それと云ふのは佛敎の所謂十戒なるものと、モーゼの所謂十戒なるものとを、比較對照してみんと欲する人の爲めに、頗る便利であらうし、且つ又この二種の十戒を比べてみても、有神論なる猶太民族の思想と、無神論なる印度アーリヤ民族の思想との違がよく分かるであらうと思ふからのことである、そこで佛敎の十戒と云ふのはかうである、則ち前の五戒の外に、(一)非時の食を食はぬこと、(二)歌舞作樂せぬこと、(三)香鬘を冠り彩香を顏にぬらぬこと、(四)高大の牀に座せぬこと、(五)金銀を受け蓄へぬこととの五戒であつて、前の不殺生、不偷盜、不邪婬、不妄語、不飲酒の五戒と合はせて、都合十戒になるのである、そこで今左に又比較對照の爲めに、モーゼの十戒なるものを擧げてみやう、是れに由つて如何に佛敎と猶太敎との十戒が異同してをるかゞ分かりしで又それが兩敎の根本思想の異同から起つてをると云ふことが、知れるからである、學者深く思を潛めて比較研究するがよい、そこでモーゼの十戒と云ふのはかうである。

第一汝我面の前に我の外何物をも神とすべからず、第二汝自己のために何の偶像をも彫むべからず、又上は天にある者下は地にある者ならびに地の下の水の中にある者の何の形狀をも作るべからず、之を拜むべからず、これに事ふべからず、我エホバ汝の神は嫉む神なれば我を惡む者にむかひては父の罪を子にむくひて三四代におよぼし、我を愛しわが誡命を守る者には、恩惠をほどこして千代にいたるなり、第三汝の神エホバの名を妄に口にあぐべからず、エホバは己れの名を妄に口にあぐる罪を罰せずしてはおかざるべし、第四安息日を憶えてこれを聖潔すべし、六日の間勞きて汝の一切の業を爲べし、七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務をも爲すべからず、汝も汝の息子、息女も汝の僕婢も、汝の家畜も、汝の門の中にをる他國の人も然り、其はエホバ六日の中に天と地と海と其等の中の一切の物を作りて、第七日に息みたればなり、是をもてエホバ安息日を祝ひて聖日としたまふ、第五汝の父母を敬へ、是は汝の神エホバの汝にたまふ所の地に、汝の生命の長からんためなり、第六汝殺すなかれ、第七汝姦婬するなかれ、第八汝盜むなかれ、第九汝の隣人に對して虛妄の證據をたつるなかれ、第十汝その隣人の家を貪るなかれ、又汝の隣人の妻及びその僕婢、牛、驢、馬ならびに、凡て汝の隣人の所有を貪るなかれ（舊約全書出埃及記第二十章）。

今このモーゼの十戒を佛敎の十戒に比べてみると、名は同く十戒であつても、その意味內容は餘程變つてをる、一は有神論、一は無神論の見地から立てられてをる、モ

「モーゼの十戒には神の命、神の命、と云ふことが、繰り返へされてをるけれども、佛教の十戒には少しもこんなことはない、從つて佛教道德は自心より發するので、倫理學者の所謂自律的である、之れに反してモーゼの十戒に見えた道德は、我れ以外の他の神から發するので、即ち他律的である、尙ほ又佛教の十戒は全然道德上の根底からばかり成立してをるのだけれども、モーゼの十戒はさうでない、まだ餘程倫理的宗教以外に自然的宗教の臭味が遺つてをる、西洋の學者は佛教の十戒もモーゼの十戒も等しく何々する勿れと云ふのだから、全然消極的であると、かう云ふが、實は自分も一應はさうであると思ふ、然るに西洋の學者は更らに進んで、成程モーゼの十戒は消極的であるけれども、それを補ふに耶蘇が出て來て、積極的の道德主義を教へた、そこが大變佛教と違ふ所であつて、こゝが基督教が佛教に一歩擅んでゝをる所である、それであるから耶蘇は有名なる山上の垂訓でもつて、かう云はれた、汝自らを愛する如く、汝の隣人を愛して、その敵を憾む可しとは律法（猶太教）の教ふる所である、然しながら我れは今汝等に告げん、汝等は汝等の敵を愛し、汝等を詛ふ者を祝し、汝等を憎む所の者を善みし、汝等を殘害する所の者の幸福を神に禱れ、古の人に告げて姦淫する勿れと言へるとあるは汝等の聞きし所である、然れど我れ汝等に告げん、凡そ婦を見て色情を起す者は中心既に姦淫したるものである、目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言へることあるは汝等の聞きし所である、然れど我れ汝等に告げん、惡に敵することなかれ、人汝の右の頰をうたば亦左の頰をも轉じて之れにうたしめよ、裏衣を取らんとする者には外服をも亦取らせよ、此の如くするは天に在す汝等の父の子となるべきが爲めである、夫れ天の父は其日を善き者にも惡しき者にも照し、雨を義き者にも義からざる者にも降せ給ふのである、汝等己れを愛する者を愛するは何んの報賞があらふか、稅吏の卑きも、亦然かせざらんやである、安否を兄弟にのみ問ふは、人より何んの勝ぐれたる事があらふか、稅吏も然かせざらんやである、心の貧き者は福である、天國は即ち其人の有である、飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は福である、其人は飽くことを得るからである、あはれみある者は福である、その人は又あはれみを得ることが出來るからである、心の清き者は福である、其人は神を見ることが出來るからである、和平を求むる者は福である、其人は神の子と稱へらるゝことが出來るからである、要は唯天に在す汝等の父の完全が如く、汝等も亦完全す可しとかう教へられたのである、是れ豈に耶蘇の宗教が純道德的であつて、吾人に道德の實行を教ふる積極主義たる所ではないか、ポーロに由つて教へられた信と望と惠との基督教の三大道德主義も全くこゝに淵源してをるのであつた、モーゼの消極的律法道德の他律的なるものは、耶蘇になつてから、大に積極的自律主義となつたのである、然るに今猶つて釋迦の五戒十戒の教を讀むに、皆な消極的に何々する勿れと禁止するに止つて、少しも積

極的な所がないと、かう云ふのは、西洋の學者が佛教道德と基督教道德を一應比較した上の議論である、然しながら自分は決してさうは思はぬ、釋迦の教の中にも十分耶蘇の山上の垂訓に劣らぬ積極的の訓戒があると思ふ、成程五戒十戒丈けでは消極的の規定に過ぎないけれども、佛教道德は唯是れ丈けで盡きてをる次第ではない、既に前にも引用して置いた通り、七佛通戒の諸惡莫作、諸善奉行、自淨其意、是諸佛教てふ偈の中に見えてをる、諸善は皆な之れを奉行せよと謂はれ、更に進んで自ら其意を淨うせよ、是れが佛教だと勸められた所なぞは、十分積極的である、耶蘇が心の淸き者は福（さいはひ）であると云はれたのと殆んど言葉迄同一ではないか、法句經を讀むに、又耶蘇の山上の垂訓と寸毫の違ひもない文句が見えてをる、則ち憎みを止むるは憎に由るのではなくつて愛に由るのである、憎は愛に由つて初めて熄むと、かう云つてをる、又人は戰場に於て萬人の敵をも敗ることは出來やう、然れど心の敵を敗る者こそ眞勇の人である、我れを憎むの人を憎まず、憎みあるの人の中に處して、平然たる者は幸である、怒を鎭むるは怒ではなくつて誠心と實意とに在る、惡に勝つは惡ではなくつて善である、僞に勝つは僞ではなくつて眞に在る、人若し正法を得ば總ての賜を得るに勝さる、醍醐の法味は何にものか之れに若かん、法の歡は總ての喜に勝さる、慾望の心火を滅盡したるの人は直に又一切の喜憂を解脫するものであると、かう說かれてをる、學者若し一たび虛心平氣、思を潛めて之れを先きに、擧げたる耶蘇の山上の垂訓に比較してみるがよいさうしたならば、蓋し思ひ半に過ぐるものがあつて、彼の釋迦の道德は消極的の一方に走つて少しも積極的方面の道德を說いてをらないなど云ふ批難は、之れを出さうと思つても到底出す譯にはいくまい、否な獨り釋迦の道德と耶蘇の道德とが、その意に於て同一にして符節を合はす如してあるのみならず、又その文字章句の末迄も能く一致暗合してをることが明になるであらふ。

偖て段々と述べて來た通りであるから、こゝからして釋迦の哲學、宗教――印度の人は常に哲學宗教の兩者を分離しなかつたのである――と道德との根本主義を要約して、その結論を與へてみればかうであらうと思ふ、則ち釋迦はこの現象世界殊に人生を目して、從來の印度哲學諸派と同く、生老病死の苦界なりと斷じ（人生多苦觀）之れを四聖諦に分類して、その然る所以を說明し、偖てその多苦なる人生を解脫する（厭世觀）には、如何にす可きやと云ふ方法を與ふるに、八正道てふ中道の道德の實行を以てしたのである、既に現象界即ち此世界の眞相は、生老病死の四苦、更るゝ〻襲ひ來つて暫時も止まることなく、前滅後生、新陳代謝、恒轉暴流の如く、何にものか能く常住なるものならんやと、須彌高しと雖も大海深しと雖も、日月大地何にものか能く萬古不變なるものあらんや、桑田變海の嘆は至る所に起るのである、故に諸行（森羅万象）無常（三法印の一）なりとの斷案を得るのである、――希臘の哲學者

ヘーラクライトスの万物流轉說――既に諸行は無常である以上は、吾人の精神肉躰亦無常でなければならない、我が身心は畢竟色即ち物質と受、想、行、識即ち精神――この五を佛者は五蘊と云ふ、即ち假合して物心となつて現はるゝものである――が假に聚合して出來上つてをる所のものであるから、縱令五感に感ぜられなくつても、四六時中常に新陳代謝しつゝあるのである、さすれば僧侶哲學などの思つてをつた樣な、心と云ふ本躰即ち靈魂實躰、又は精神の本躰と云ふ樣な我即ちアートマンなるものはないのである、なぜなれば我とは常住――佛教家は之れを常一主宰の性質あるものと云ふ――の本躰即ち靈魂實躰を意味するものであるのに、天地の森羅万象万事万物皆無常であるから、何處にも斯かる常住の本躰がある可き道理がないからのことで、即ち常住の本躰である我なるものも亦決して是れなしと斷定する樣になつたのである、法本無我、即ち諸法（万物）無我（三法印の一）と云ふ根本義は、諸行無常の根本義に尋いで出てくる譯けである、佛教が無我即ちアナートマン）を以て眞理とするのは、こゝにあるのである、――無靈魂說――然るに世人多くは智眼暗くして四聖諦の理に通ぜず、無我の眞理の見開きがつかないからして、そこで色々の謬見が生じて來て、不道德な非行も起つて來る、菩提の道に遠かつてくるのである、であるから佛教では四聖諦從て無我）の理に通曉しないことを、無明に蔽はれてをると云ふのである（こゝで無明とは英語のイグノランスに當る）、之れに反してこの無我や四聖諦の理に通曉したものは、直に又た八正道即ち中庸道德の實踐躬行に努むる譯になるのであるに出つて、非常に德行の君子となることが出來るのである、然しこゝに非常な大問題殊に基督教の人々が、佛教の無我說に對して下す所の批評は、どうして無我であるのに道德の實行が出來るか、元來無我なる人間がどうして道德上の責任者となることが出來るかと、かう云ふ疑問である、然し是は自分の意見では彼の基督教が先入主になつた西洋基督教家の偏見から起つた大早計の疑問であらうと思ふ、基督教の神學がこれ迄規定してをつた樣な靈魂實躰と云ふ樣なものを假定しなくつては道德が成り立たないと、一途に思ひ込んだ偏見から來た、神學者の疑問であらうと思ふ、今日の心理學や倫理學は基督教の神學が云ふ樣な靈魂實躰を立てないで、即ち精神の現象丈け、知情意の作用丈けで、立派に道德上の責任をも說明し、道德の根本である人格の成立をも說明して、少しも不都合を感じないのである、して見れば釋迦が無我といふことを說いて、靈魂實躰を否定し、その根據に立つて、その上で道德を立てたからと云つたとて、左のみ驚くには當るまい、寧ろ基督教の神學が夢想してをつた樣な、靈魂實躰たるアートマン即ち我を立てない方が、最近の科學思想に能く合つてをる譯けではあるまいか、こゝが佛教が歐米に在つても科學者などの今日智識ある社會の歡迎を蒙つてをる所以の一であらう、無我であつては道德が成り立たないのではなく、

却て佛教道德の根底は實にこの無我の眞理、無我の一點に存してをるのである、耶蘇はこの無我と云ふ事を云はなかつた爲めに、天父の神と云ふものを假りて來て、天父の愛の根底から、その同胞兄弟に對する博愛の行爲を勸めたが、釋迦はこの天父の神の代りに、哲學上無我と云ふことを說いて、こゝにその慈悲道德の根底基礎を置かれたのである、彼の我と云ふ如き、自己を永久他人に區別して、城府を設けねばならぬ者がないからこそ、一視同仁、四姓平等てふ慈悲博愛の道德が實行されてくるので、我に執着して他人を凌いでも我れを益さうと云ふ樣な考がある人には、眞正の道德は決して實行されないのである、然し既に前にも云つた通り、佛教は無我を說いたからと云つて、受想行識の如き現象界に顯はれた精神作用の存在は之れを容るすのであるから、決して道德上の主躰即ち責任者を失ふ樣なことはない、それは丁度今日の倫理學は靈魂實躰の存在を說かないけれども、智情意と云ふ精神作用上、人格なるものゝ成立を說いて、そこに倫理上の主躰責任者を立派に立て來てをるのと同樣である、かう云ふ風に觀察をしてくると云ふと、佛教の無我說が倫理をして不成立に了らしむるのではなく、却てその反對で、それが釋迦の道德を立てられた根底になつてをるのである、釋迦が四姓の別を問はず、普ねく弟子を四方に派して、貴人富者賤工奴婢の嫌なく、その妙法を宣布せられ、四十五年間足跡恒河の畔に普く、周行遊化せられた利他博愛の道德は、一に皆その根底を無我の眞理上に置いてをつたのである、彼頻毗沙羅王をして佛教に歸化せしめたのも、又釋迦の法本無我の說法であつたのである。

既に身心は五蘊の假和合であつて、常に變々化々して、瞬時も止む時なく、暴轉恒流の如く、炷焰の炎々として、燃えて止まざるが如く、新陳相謝し常に相轉輾して寸時も止ること無きものならば、世に果して一事一物も止住するものなきか、元來無我ならば人の死や即ち是れ蠟燭の火を吹き消したと一般、肉躰の死滅と共にその後に一物も殘るものあるとなかる可く、さうなると云ふと、佛教て云ふ善因善果、惡因惡果と云ふことを受けるものが無いことになつてしまふてあらう、然れば無我說即ち無靈魂說を取つて居る佛教は、唯物論であるかと、かう云ふ疑問が出てこやうと云ふのである、然し釋迦は明に順世外道一派の唯物論には贊成されなかつたので、唯物論を斷見てあると云つて排斥されてをらるゝことは、僧侶の有我說を常見てあるとして擯けられてをるのと一般である、此ことは頻毗沙羅王の問に對して、例を引いて十分明瞭に釋迦は道破されてをるのである、喩へば土と水との相合力に由つて植物の種子から芽葉が出て來たとすれば、その芽葉の生じたときは最早や既に芽葉であつて、元の種子でないから常と云ことは出來ぬ、然し又種子が變じて芽葉となつたにしても、種子が芽葉と云ふ形を保存して存在してをる以上は、縱令もとの種子が變形をしたにしろ、全く無くなつてしまつた譯でないから、斷と云

ふ譯にいかぬ、唯暫く因緣力の和合した結果、或は種子となり或は芽葉となつて存在してをるのである、之れを佛教家は又譬喩を以つてかう云ふ風に說明してをる、則ち引きよせて結べば假の庵なり、解くれば元との野原なりけりの一句である、然し前の例に由つても明に分かる如く、同一植物にしても、或時は一時種子と云ふ形狀を取り、或時は一時芽葉と云ふ形狀を取つたにしても、芽葉は最早や種子でなく、種子はまだ芽葉ではないけれども、種子はだん〳〵と發達して、芽葉となつて行く可き所の勢力を、土や水から得てをるので、芽葉は既に種子でないけれども、其生々の勢力は、既に種子の中に存してをつて、そこから取つて來てをるのである、此勢力こそ種子芽葉を通じて夫々一定の分量を以て存續して行く所の――無形物ではあるが――一つの勢力である、釋迦はこの勢力を稱して業即ち羯磨と呼ばれたのである、今之れを吾人々間の例に取つて云ふてみるならば、吾人には別に、靈魂實躰たる我と云ふ樣なものはない、吾人の身心は四六時中常に變化しつゝあるのだけれども、吾人が一刻一刹那、道德的行爲者として行つて行つた所の善惡てふ行爲の成果は、前後互ひに相轉輾推移していつて、無形ではあるが、永久不滅であるのである、之れを業と云ふのである、今この業を斷滅してしまはない限りは、生死輪轉を免れないのである、人間が生々死々して生死海裏に生滅起伏して行く所以のものは、一刻一刹那にやつて行く所の吾人の行動行爲即ち吾人の道德的行爲に善惡ある

が爲めである、そこでこの業を斷ち截らなければ、生死を解脫する譯にいかない、別の言葉で云つて見れば、生死を解脫する爲めに吾人の行爲を休止し、それを無爲寂靜の境に幽屏し去るのが、一番捷徑であらう、こゝから佛教の寂靜主義が起つてくるのである、然し一方から云つてみれば生死輪轉は吾人行爲の結果とは云ふものゝ、それは畢竟惡行爲の結果から起つてくるのであるから、そこでその惡行を止めて善行を奬勵すると云ふことが、必要になつてくる、此點から云ふならば、生死を解脫せんが爲めには、出來る丈け善行を勵まなければならないと云ふことになる、こゝが又釋迦四十有五年間大活動の演出された活動主義の根底をもなしてをるのである、この點から云ふならば、安きことなき猶ほ火宅の如き三界を解脫するには、出來得る限りの善行を勵んで、一切の惡行を止め、所謂諸惡莫作衆善奉行の聖旨を實踐躬行すると云ふことになる斯くして煩惱の心火を滅熄したる曉には、則ち生死を解脫したのである、その境界は則ち是れ涅槃である、又之れを有餘涅槃と云ふ（有餘涅槃とは身は尙ほこの世に在つても、心の慾火を斷滅し去つた狀態を指して云ふたのである）、又是れを涅槃寂靜（三法印の一）と云ふ、蓋し涅槃とは梵語にて、ニルヴーナと云ひ、ニルとは英語のアウトにてヴーナとは英語のブローである、然ればニルヴーナとは吹き消すの義である、果して然らば何にものを吹き消すかと云ふに、それは謂ふ迄もない煩惱の心火瞋恚の焰を吹き消すのである、既に煩惱の心火瞋恚の焰を

吹き消してそが滅無に帰し去つた所は、則ち是れ消極的に云へば寂靜涅槃（寂靜）であるが、之を積極的に云へば生死輪轉を解脱し、生滅々己と共に寂滅爲樂の境界である、最上安穩（ナンニヤーン）最上圓淨（パラマーレンヂヤロ）である、歡喜地である、是れ有名なる佛教學者マックス、ミユラーやチルダース諸氏の主張する所であつて、氏は涅槃はその消極的に煩惱の心火を滅盡し去つた、滅無の狀態を指すと同時に、積極的には最終究竟の歡喜地と云ふことを意味してをるのであると云はれた所以である、實に涅槃は空無である、然し涅槃は決して世間でもつて俗に云ふ、空だの無だのと云ふ如き、全く何にも無い、あやめも分らぬ暗夜（ヤミヨ）と云ふ樣な意味の空無ではない、然しと云つて、また五慾の世界に於て煩惱の盲者（めしい）の凡眼に映じてをる樣な意味の有でもない、金が有る、衣類が有る、など云ふ意味の有でもない、果して然らば涅槃は有か無かと云ふに、釋迦が靈童子の問に答へられなかつた樣に、又維摩が文殊の問に對して默してしまつた樣に、默してしまつた方が寧ろ適當であらう、凝然大德が見月（ツキヲ）指（シ）得意（ヒトヲ）忘言（ワスル）と云つたのも此邊の消息を傳へたのである、然し止むなく之れを口に言てみるならば、空でもなく、と云つて有でもない、そは眞空妙有とでも形容す可きものであらうか、然れば釋迦の涅槃を以て、通俗有り來たりの意味に於て、虛無と云ふのは固より當らないのであつて、その無の裏にはすでに有の意味が保存してをると云ふことを忘れてはならないのである。

然し更らに進んで、釋迦の涅槃を以て之れを基督教（耶蘇）の神、天國若くは眞宗で云ふ阿彌陀如來極樂淨土など云ふものに比べてみれば、確に釋迦の涅槃は消極であることは、否定することが出來ない、一は抽象的であると云ふならば、一は具躰的である、一は無形の理を以て說明し、一は有形の物象に形寄（カタヨ）せて解き明かすと云つてもよい、そこでさう云ふ具躰的の天國の說明にのみ慣れてをる基督教徒は、佛教の涅槃を一目見て、消極的であると云ひ、佛教は虛無論だと誣ゆるのも、無理はないのである、そこで佛教自らも一時世に反動し感激して起り、殊に釋迦と云ふ不世出の一大偉聖の人格に由つて活働し統御されてをつたからして、教主釋迦の當時はその說く所の涅槃は、縱令抽象的であつたにしろ、縱令消極的であつたにしろ、佛教は信者億兆の崇信を得て、人生救濟の事實は着々として進行して行つたのであるが、佛日一たび沙羅双樹の影に隱れ、佛丈六の色身は祈連禪伐底河、畔荼毘一片の白烟と化し去るに終つてしまつてからと云ふものは、釋迦の遺弟は一時にその信仰歸依の中心點目的物を失ひ、唯茫乎として盲者の杖を失つたに等しき狀態に陷つたのである、そこで釋迦の遺言に從つて、我が亡き後は戒律を以て汝等の大師と爲せとの聖旨を奉じ、戒律の結集をもやつてみたが、尙ほ無形の戒律では之れを以て衆心を一點に集注する標的を見出すことは餘程難いのであつた、消極的の傾向ある涅槃は又此時に當つて遺弟歸托の中心點となることが出來がたかつた、そこで遺弟教

主を思ふの至情は遂に彼れ等を驅つて、教主釋迦の說き給ふた說法の眞理を以て萬世不易千古不磨の聖諭であると、そを渴仰するの餘り、遂にその不朽不滅の眞理を說き給ひし教主の人格を以て、眞理そのものの恒久不滅なると同一視して、佛身の不滅を主張するに至り、次第に佛陀崇拜の端緒を開く樣になつて來たのである、是れ實に元來無神論なりし佛教が、有神論に化する楷梯であり、さうして遂に後世基督教の有神論と相距ること遠くない結果を惹き起す樣になつた發端である、思へば眞個に一奇と云はんければならんが、耶蘇や釋迦の如き一大偉聖の人格的歸仰の中心既に謝し去つてしまつた以後の宗教に於ては、是非信者歸仰の目的物たる神を釀出するに至るのは、又必然の理數であらふ、そこで教主の人格が信者歸仰の中心を形ち作つたのは、獨り佛教のみならず、基督教でもさうであり――耶蘇は神子としてその本性天父と同一視され、三位一躰說が起つたのである――且つ又當時佛教とその成立の事情を同うして、佛教と共に前後して印度に行はれてをつた一宗教者那教も亦無神說であつて、その結果遂にその教主を神化してそを崇拜し、之れに神事する樣になつたのである、十九世紀に於ては佛蘭西の無神論哲學者オーギユスト、コムトは、神を立てないで一新宗教を創建しやうとしたが、遂にそは人間宗として人間――尙ほ適切に云へば人若く人性又は一般に人間そのもの――を崇拜することになり、色々古代の英雄偉人の人となりを崇拜するよりして、コムトの人間宗は無神論たる、神なき宗教からして、一轉して偉人崇拜の多神教となつてしまつた感があるのである、してみれば宗教なるものをして實際に世に實益ある樣行はれしめんとするには、釋迦や耶蘇の如き偉大なる教主の人格的感化の存してをる場合を除くの外は、信者歸仰の中心となる可き目標即ち神佛を立つることを必要とするのであらうか、そは兎に角余は今佛教がその教主の死後如何に發達變遷したかを追蹤せんければならん場合となつた。

偖て今釋迦入涅槃の當時の情態を考へてみますに、阿難陀はその教主釋迦と涙を呑んで幽明界を異にすると云ふ譯になつたのであるが、釋迦の高弟摩訶迦葉は釋迦の入涅槃の間に合はず、一週日の後に後くればせにかけ附けて葬式丈けには間に合つたのであるが、教主の死と共に異端が起こりさうであつた、それと云ふのは須跋陀羅比丘（前出のとは同名異人）と云ふのが、もう教主が亡くなられたから、戒律なども之れからは勝手に變更してもかまふまいといふことを云ひ出したから、そこでそれでは釋迦の入滅と共に佛教も跡を絕つに至るであらうと云ふ心配が起り今の時に當つて先づ宜く釋迦が遺命として、我が亡き後は汝等の大導師とせよと云はれた戒律を取り纒めて邪義を訂すの標準としなければならないと云ふ議が熾んになつて來て、此て遂に佛滅後すぐに王舍城の附近七葉窟（サプタパルニ）でもつて迦葉阿難等の高弟諸比丘を督して所謂第一結集なるものを行つたと傳へられてある、然し

その實此の時は解脱戒以下の戒條を諸弟子相寄つて會誦し、釋迦在世の教訓を遵弟等相集つておさらひをして合誦した丈のである、決して佛教の典籍の筆錄が出來た譯けではない、但し傳ふる所に由れば、この時阿難陀經藏を結集し優波離は律戒を結集したと云ふ、阿難陀、優波離、迦葉等は教主上足の高弟であつて所謂上座であつたが、當時この上座の結集即ち窟内の結集に與らないので、別に窟外で結集をやつた一群の比丘がある、之れは則ち婆師波の率ゐる所の大衆部である、それであるから此の傳說に由れば釋迦滅後すぐ樣窟内上座部と窟外大衆部との二派に分かれる傾向があつたと云はなければならない、それで上座部は保守黨で大衆部は進歩派である、是が佛滅後第一の結集即ち宗教會議とでも云ふ可きものである。

それからして佛滅後百年程たつてから、又異端邪說が佛教部内に起つて來たから、そこで毘舍利城即ち廣嚴城に第二の宗教會議（第二結集）が開かれたのである、それは毘舍利地方の進歩派の大衆比丘が、金錢を受けたり酒を飲んだり又は其他凡て十ヶ條程戒律を緩かにしやうと主張したから、そこで之れに反對する保守主義の上座の比丘は戒律の勵行を主張し、この大衆一派の行爲を非認する議決をせんが爲めに毘舍利に一大宗教會議を開き、大衆比丘の所說たる十事の非法（戒法を緩めんとする十ヶ條の提議）を否定することを決議したのである、然し大衆一派の人々は上座の決議に服さなかつたからして、こゝに明に大衆部（中印度の佛教）と上座部（北印度の佛教）の分裂が出來たのである、此時は實に迦羅阿育王の時代であつたのである、然し此會議は新律の增加ではなくつて舊律のおさらひ即復讀會誦であつたのである、勿論此時にも佛典が筆錄された譯けではなかつた。

更らに進んで第三の結果即ち第三回の宗教會議は達磨阿育王の時代即ち紀元前二五〇年の頃に波叱盧子（華宮城）に帝須を座首として開かれたのである、達磨阿育王は孔雀王統即ち摩利耶王統に屬する旃陀羅笈多王の孫であつて、その初めは首陀種であつたが當時旃陀羅笈多王は國家亂れて英雄各地は蜂起するの風雲に際會し、遂に此に自ら王と稱して印度を統一し、孔雀王統の基を開かれたのであつた、してこの達磨阿育王は實にその孫に當るのである。

阿育王はその初めは婆羅門教徒であつて頗る殘忍酷薄の王だつたと云ふとてあるが、一旦泥梨陀と云ふ比丘の教に隨喜して、前志を翻して佛門に歸した後は、全く別人の如く寬仁大度の明君となられたのだと云ふことである、それであるから王は一名善見王と呼ばれてをる、リス、デギッズ氏は之れを仁王と譯してをるのも全く之れが爲めである、紀元前二四六に帝須を座長として第三回の宗教會議を國都波叱盧子に開かれたのも全く王の命に由るのである、是れ即ち第三結集と云はれてをるのであつて、この時帝須が自ら當時の哲學諸派を辨難攻擊した迦陀跋偷と云ふ論藏の主なるものが出來、經律論の三藏が揃ふた、但し此結集に佛典が筆錄さ

れたのではない、佛典の筆錄は紀元前初世紀の初迄まだ無つたのである、王は佛教に於けるコンスタンチヌス大帝とても云ふ可き賢君であつて、佛教を以て國教となし釋迦の博愛慈悲平等の眞精神を体し、國内國外を問はず廣く佛教主義の行き渡らんことを企圖せられ、四方に宣教師を派して外國布教を實施され、此時佛教は東方にては或は支那に迄這入た樣な形跡があるし――秦始皇當時の沙門室利防の支那に來りたる傳統を參照せよ――西方てはその遠き小亞細亞の地方にも及んだのてある、佛教が若しセム民族の思想に影響したことがあるとすれば實にこの時てあつたのてある（彼の猶太教の一派で禁欲主義を主張するエッセネ派の如きは全く此時に於ける佛教の感化から起つたのてあると云ふ、殊に阿育王の王子摩哂陁と王女僧伽密多とは、佛門に歸して共に錫嵩島に航し、島地に佛教を施くことを努められ、佛寺を建て菩提樹を移植し、遺教をも傳へて以て、後世南方佛教の基を開かれたのてある、後ち紀元四三〇年の頃に高僧佛音が中印度からやつて來て、錫嵩佛教の聖典を大成したのも決して偶然てないのて、その種子は既にこゝに成つてをるのてある。

阿育王は佛教の博愛主義を實地に躬行せられ、傳導師を四方に派して平等的平民主義を宣布せられたのみてなく、懈怠是生死、精進是涅槃（泥曜陀が阿育に奬めた言てゝ）活動主義を實踐し、道路橋梁の造營から、貧民を賑はし藥草の施與を初として、王の德禽獸に迄及んで、爲めに肉食の結果生物を屠ることを禁止せられた、其佛教を四方に施くにも極めて包容主義普遍主義てあつて、徒に他宗教を異端邪說視せず、偏狹主義を捨てゝ能く宇宙の眞理公平無私の人道を弘布するることを以て布教の理想とせられたのてある、それてあるから釋迦の博愛主義平等主義は阿育王に至つてその實地に行はれたのを見るを得たと云つても宜いのてある、であるから阿育王は帝王として佛教を保護した所はコンスタンチヌス大帝が基督教を保護したのに類し、その佛教々理を遠く印度以外の地に迄及ぼし、眞に世界万國の民の中に弘布したのは使徒ポーロの偉勳に比す可きてある。

阿育王は斯くの如き賢明の君主てあつて佛教の興隆に力を盡されたが、王の死後四十年即ち紀元前一八〇年頃には王の大臣弗沙密多僧（プシャミトラ）して王位に就き大に佛教を迫害し、所謂三惡王出現の世となるに至り、この虛に乘じて婆羅門教はそろ〳〵復興の機運に向ふに至つた、然し紀元後第一世紀の半に至ると、小月民族の迦膩色迦王印度に出てゝ再び三寶を興隆し、脇沙提婆（パルシヴァ）設摩（デーヴァ）世友（ヴァスミトラ）法救（ダルマトラータ）等の如き有名なる高僧が出ましたが、迦膩色迦王は上座部の制を容れてその國都罽賓（カシミール）に五百の比丘を會し、脇尊者（パルシヴァ）を首座として第四回の宗教會議を開き所謂第四結集なるものをやられた、即ちこの時に出來たのが大毘婆沙論（マハーヴィバーサ）てある、第四回の宗教會議の時迄には既に筆錄されて佛典が出來てをつたのてある、さうして又其言語も此第四回の

結集に於ては初て學術語たる梵語が用ゐられた――是迄は主に俗語であつたらしい――ので、そこでこの時頃からして佛教は外部からは婆羅門教の感化を蒙り內部からは上座部大衆部爭議の結果、佛教は大に原始の將態を遠かる樣になつて來たのである。

然るにこの迦膩色王の時に當つて空前の一大明星が佛教界に顯はれて來た、之れは則ち有名なる馬鳴則ち阿濕縛窶沙である、馬鳴に至つて上座大衆の二大爭論を融化し大成して、從來の小乘佛教以上に一大組織を立て、さうしてこの時迄、次第に發達して來た大乘佛教を完成したのである。

抑、教主釋迦の佛教は無我論であつたことは前既に說明した通りであるが、教主の人格的感化は能く信者崇向の中心をその一身に集め、信者の强い憑依歸托の中心たる神を教主以外に要求するに至らなかつたが、教主の滅後釋迦人格の感化全く見ることを得ざる樣になつて來た時は、信者はなんとなく物淋しく感じ、次第にその信仰の中心點の具躰的なるものを要求するに至るといふことは自然の勢である、釋迦は勿論その入涅槃の時に當つて、釋迦の死後は戒律を以て汝等の大道師だと思へと迄敎へられて、信者憑依の中心點を指示されたけれども、無形の戒律ではとても教主人格の具躰的有形の感化に更へることを得ないと云ふことは云ふ迄もないことである、佛滅後の遺弟はどうも信仰の中心點がなくなつて心ざみしくてたまらないのであつた、そこで釋迦の說かれた說法の眞理が永遠不滅である如く、その永遠不滅の眞理を說法された釋迦その人も、又永遠不滅でなければならないと云ふ風に考へを進めて來た、そこで釋迦丈六の身は死滅に歸してしまつたが佛陀の報身は永遠不滅である、佛陀の法身は永遠不滅であると、かう考へて來たこの考は佛滅後次第に發達して時々保守派たる上座部と進步派たる大衆部との間に衝突をやり其思想の潮勢は滔々として石を嚙み岸に激し飛沫白雪を飛ばして進んで來た有樣であつたが、遂に馬鳴に至つて是れ等の思想を組織大成して大乘佛教の妙旨を開顯することになつたのである、馬鳴は婆羅門教の一神三躰說（梵天と毘婆奴と濕婆の三位の神は婆羅門教の三位一躰說であつて、基督教の天父と神子と聖靈との三位一躰に類してをるのである）とその化身說と相前後して佛に法身、報身、應身の三身あることを說いて三身說を立て、報應二身を以て衆生の宗教的歸托の中心點となし、信仰の具躰的對象たるの用に供じ、さうして一方にては法身を以て、宇宙の本體不生不滅の眞如と合一視し、さうして更に眞如を中心として宇宙万有の生滅起伏する狀態を哲學的に說明解釋したるものが馬鳴の根本思想であつて、所謂眞如緣起なるものは是れである、然るに元來常住恒存不生不滅の絕對平等界である眞如が、如何にして無常生滅の相對差別界を現ずるかと云ふことを說明せんが爲めに、馬鳴はそを以て吾人認識の謬妄から起こると爲して、無常生

滅相對差別の相は無明から起こるのであると說いたからなると釋迦の佛教に於ては少しも哲學的の意味のなかつた――唯四聖諦の理に暗いといふ意味に過ぎなかつた――無明てふことが、馬鳴になると云ふと形而上學的の意味を有し、世界の生滅起伏する根本原理となつて來た、釋迦の佛教ではイグノランス即ち無知の意味であつた無明は、馬鳴に至つては認識論に云ふ謬忘又は虛妄即ちファンタスマゴリアの義になつてをる、これは丁度吠檀達派の哲學が差別界は無明から起ると云つた形而上學的說明に歸つたと見てもよい、然し馬鳴の眞如說なるものは佛教に哲學上の基礎を與へて、理論上婆羅門教に對抗して行かうとするには大變都合がよからうが、實際の宗教としては餘り六かし過ぎるから、馬鳴は宗教的方面には、八か釜しく鼓吹して、將來に發達す可き他力門の基礎をこゝに開き、將來阿彌陀佛極樂淨土及法藏比丘の修行、攝取心光常照護など云ふ考の源泉となつたのである、思ふに馬鳴は小乘佛教を一歩進めて大乘佛教に轉向せしめた一大偉人たることを失はと云ふことは明かである、其哲學的頭腦の廣大にして徹透せる、その宗教的信念の崇高にして趣致深き、若し之れを中世基督教々會の人物に比したならばアウグスチヌスに比す可きであらふ。

馬鳴に尋いで印度に於て大乘佛教組織を一層完備し玉成したる者は龍樹即ち那伽阿周那（紀元二世紀の頃）と其直弟迦那提婆の二師である、龍樹の生涯に就ては色々怪誕な傳說もあるが、要するに彼は婆羅門の族に出で穎悟の資を具し才識衆に勝れてをつた人らしい、然るに彼は青年氣鋭の質であつて、情慾に驅られて一夜友人三名と共に王宮に忍び入つて宮女を姦し、その友人等は皆捕へられ死に處せられた、然し龍樹獨り旨く免れたので、彼れはそこで大に先非を後悔し發心出家したのである、提婆の如きも亦豪毅膽斗の如き法將であつて、夙に求法の爲めに其一目を眇し、常に外道と對論して折伏の利劍彼等を恐れしめてをつた、然し彼れは不幸にもその爲めに外道から暗殺されてしまつた、その意氣凜として見るべきものがあるではないか、提婆に大丈夫論の著ある實に偶然でない、龍樹提婆二人の哲學主義は、因緣所生法我說即是空と道破して、一切皆空主義を說いて、八不（不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不去）の中道たることを主張し、一切の差別相を打破し去り打破し來り打破し盡したる所に忽然として眞如の本躰を開顯すべきことを說いた、中論の不斷亦不常、不生亦不滅、是說名涅槃とは則是れである、彼の鎌倉時代の凝然大德が、八不妙理の風妄想戲論の塵を拂ひ無礙正觀の月一實中道の水に浮ぶと云つたのは、則ちこの間の消息を傳へたものである、然しながら龍樹の說は如何に巧妙でも今日の哲學上から云へば、どうしても認識論的見地に立つた無宇宙論である、そこで當時印度の諸哲學者も龍樹の學說を稱して虛無論と許したのであ

るこの虚無論の旨趣は龍樹提婆の著書中論十二門百論の三論中に明瞭である。然し尚進んで考ふる八不妙理の風で妄想の雲霧を拂ひ除けてしまつたその當体は果して何にものであるか、その雲霧の中から現はれて來た所のものは何んであるかといふに、無礙正觀の眞如の明月より外はない、今その抽象的なる眞如の明月と云ふことをもう一層具体的に且つ宗教的に云つたならばどうであらうか、そは直に具体的の佛陀如來となつてこなければならないのである、そこで龍樹も十住毘婆沙論の易行品に於ては難行道易行道の二を區別し、衆生の安心立命には易行他力の教に從ひ彌陀の願力に縋つて極樂往生するのが一番近か路であると云ふことを說いたのである、それであるから龍樹は馬鳴と同じ樣に一方では大乘教の哲學組織を完成し、之れと同時にその哲理應用として實際的方面に於ては益〻宗教的信仰を皷吹して、宗教としては最も効能著しい他力教の基礎を完成し、加之尚一歩進みて其弟子龍智に附屬するに眞言密教の秘法を以てした、即ち龍樹の作と稱せられてをる釋摩訶衍論や菩提心論の如きはこの意を述べたのであつて、眞言密教の萌芽は既に龍樹に初まつてをつたのである、かう云ふ風に龍樹は佛教の理論的方面にも將た又實際的方面にも行き渡つてをり、又その實際的方面に於ては淨土教にも密教にも關係し、その他後世に發達した佛教は悉く龍樹と多少の關係を有つて居ないものはないのであるから、龍樹は後世能く八宗の祖師と呼ばれたのであるそれは尚基督教に於てはアウグスチヌスが新舊兩教の祖師であつた如く、又トーマス、アクイナスが基督教神學にアリストテレースの哲學を應用して組織大成したのと好一對である、それであるから龍樹は獨り佛教思想の統一者であつたばかりでなく、當時發達して來た婆羅門教の思想をも佛教中に取り入れ、彼の薄伽梵歌中の思想の如きは、明にその神秘的智識と信仰及び攝護とを以て、龍樹の大乘佛教中に貢献したものと云ふ可きである、日本の眞言密教中に往々婆羅門教の痕跡のあるは蓋し是れが爲めであらう。

龍樹に繼いで紀元第四世紀の頃印度に於ては、無着即ち阿僧伽、世親或は天親即ち婆藪槃豆の兄弟があつて、印度哲學の上に於ては後來馬鳴の眞如緣起に對して賴耶緣起と稱する唯識論（一種の唯心論）の基礎を創め、さうして宗教的實際的方面に於ては、矢張馬鳴と同く否な馬鳴に一歩を進めて淨土往生を說き、阿彌陀の願力不思議に依て衆生の濟度さるゝと云ふことを主張したのである。

その後無着、世親の思想は護法と戒賢とに由て繼承し大成せられ、龍樹提婆の思想は淸辨と智光とに由つて布演せられ、彼の空龍樹、提婆）有（無着、世親）の議論は頗る當時に喧かつたものである、しでこの無着世觀の教系を戒賢が七世紀の頃、印度の摩揭陀國那爛陀の寺院に在つて說法してをつた時に、彼の有名なる支那の求法僧玄奘が印度に行つて前後十六年の歲月を費し、戒賢から無着世親に淵源する有宗

即ち後世支那に於ける法相宗を面授して來たのである。[illegible]

無着世親の時代は丁度有名なる力日王（ヴィクラマーディトヤ）が中印度に覇を稱してをられた時代であつて、印度の文化は非常に熾んな時であつた、殊に王は寛容の態度を取つて外道（例之ば金七十論の著者、數論派の自在黒（イシュヴァラクリシュナ））をも佛教と等しく善く之を遇せられた、有名な那爛陀の精舍も此王の時に出來たのである、尚ほ進んで戒日王（シーラディトヤ）の如き、矢張この寛容主義であつて、傳ふる所によれば、戒日王は紀元六三四年に恒河の畔の翔若鞠（カンニヤクブジ）開（ヴァルダナ）即ち曲女城に於て第五回の宗教會議を開かれたが、此會議の模樣を見るに婆羅門教徒と佛教徒との間に論辯もあり、北方佛教と南方佛教即ち大乘教徒と小乘教徒の間にも議論があつた樣であるし、唐の玄奘は此會議に出席したとのことである、戒日王は那爛陀の寺院にも幾多の資財を寄附して其維持に當て、大に佛教を保護された、然し玄奘が印度に行つた頃には佛教は將に衰頽に傾んとしつゝあつた時であつた、之に繼いで第八世紀の頃には有名なる吠檀（ヴェーダンタ）派の再興者商羯羅（シャンカラ）阿闍利（アチャリヤ）なる哲學者出て、婆羅門の正統派を揚げて佛教に對峙し、民間の信仰にシヴとヴシヌの崇拜盛んにして、益々佛教を婆羅門教化して、遠く眞言密教に影響し、紀元第十一世紀の頃には、回々教の闖入があつて、佛教はオリッサ及び迦濕彌羅（カシミール）地方に僅に其餘喘を保ち、後ち十三世紀の頃佛教は全く印度の生土から消滅するに至つたのである、然れど佛教が印度の故土に消滅したのは、取りも直ほさず釋迦の云はれた



と傳ふる我が法東漸の兆であるので、是れから佛教は支那や西藏から尙進んで三韓日本に渡來して來て、その發達は宗教としては頗る空前の偉蹟を呈する樣になつたのである、然しこの發達史は佛教の教義史及び教會史の如き特種の研究に屬す可きものであるから、餘り詳しくは云ふてをらぬが、今ほんのその大躰を一瞥して、佛教てふ偉大なる思想界の勢力が、古今人心を感化しつゝあつた經歷進路を研究するのは決して無用の閑事ではなからふと思ふ。[illegible]

針て講義をもう少し進めて見やうと思ふ。それであるから今から此の方

然し佛教の東漸を追蹤する前に、一寸彼の印度本國に於ける佛教消滅以後の大勢を考へておきますと、紀元第十一世紀以後印度に於ては回々教が非常なる勢力を以て印度の信仰界に闖入し、十三世紀以後益々猖獗を極め、佛教を殄滅し新婆羅門教即ち印度教を迫害しましたが其結果として印度教と回々教とを折衷して造り出した新宗教シク教が出來、アクバル大帝（一五四二年―一六〇五）又大に寛容主義を以て新宗教の樹立に努められた、基督教も亦紀元第三世紀の頃初めて印度に通入つたと云ふが、その後その勢力は殆んど無きも同然であつた、然るに紀元第十六世紀以後歐洲と印度との交通が段々開ける樣になりましたからして、政治上にはクライブ（一七二五―一七七四）やヘスチングス（一七三二―一八一八）など云ふ健兒、相踵いで印度に渡航しますし、ジェスイット教先づ印度に入り十八世紀に基督教の

新教がやつてまゐりました、そこで又その結果遂に印度教と基督教とが合同してラーム、マフム、ロイ氏（一七七四―一八三三）の稱道せられた新宗教なる梵教會即ちブラフマ、サマージ――一八三〇に初めて開かれましたが――出來、チアンダー、セン（一八八四沒）等又少壯の氣鋭能く道德的宗教の本旨を發揮せんことに盡力し、主として社會問題に意を注いでをります、佛教の側では輓近米人オルコット――神智協會を組織し先年日本へも來りました――や錫甯佛教の上座スマンガラ大僧正を戴いてその下に活動し、ついこの頃日本にこられたドハルマパーラ氏――大菩提會を組織してをります――の活動の如き、大に見るべきものがあるのであります、要するに印度に在つては十三世紀以後佛教が一たび消滅してからと云ふものは、新婆羅門教即ち印度教の復興となり、之に加ふるに外國船載の新宗教なる回々教や基督教等の異分子が印度教の中に入り乱れ、落花繽紛撩乱として狐藉の有樣を呈し、さうして今日に至りましたのは印度に於ける現今宗教界の實狀であります、然し印度の本國に於てはかやうに佛教が一時全く消滅に歸し去つてしまひ、唯僅に其餘喘を現今に保つてをると云ふ哀れなる有樣でありましたが、佛教の本性は世界的普遍的であることは丁度基督が世界的普遍的であると一般であつて、さうして基督教も早く其生國猶太の地に消滅してしまひましたけれども、その後歐米の天地に旭日の昇る勢で斯教の教田を開拓して立派に發達しました如く、佛教も亦早くその本國印度の地に消滅してしまひましたけれども、印度以外の各地例之ば錫甯、緬甸（ビルマ）、暹羅（シヤム）、（南方佛教）等より尼波羅（ネパール）、西藏（チベット）、蒙古、滿州、朝鮮、安南、柬埔寨（カンボジア）、スマダラ（北方佛教）等を初めとして、殊に支那日本に入り來つて其本國にては嘗て見ることも出來なかつた樣な偉大な發達進歩を成遂して今日に至つたのであります、然しこゝでは是れ等諸國に流布してをる佛教をその發達に照じて一々論明してをる譯には行きませず、又その必要もありませんから、朝鮮や西藏を傍系として支那日本を正統として、彼の佛教が印度の生土を離れて支那に弘通するに、如何なる經路を取つて進んで來たかを、極簡單に一瞥して見やうと思ふのである。

そこで先づ佛教が公然支那に傳つたのは後漢の孝明帝永平十年（紀元六七年）であつて、支那の禁惜月支國に使して月支國から佛像經卷及び攝摩騰（カシヤパマーランガ）竺法蘭と云ふ二名の梵僧を連れて來たのに初まるのである、然し後漢の明帝の前、既に秦始皇帝の時沙門室利防と云ふものが、支那へやつて來て佛教を弘めたことが歴史に見えてをる、してこの室利防が支那へ來た時は、印度の阿育王の當時であるから、王が四方へ佛教の宣教師を派遣した時、或は支那にも亦よこしたかも知れぬのである、その後前漢の武帝（紀元前一四〇―八七）の元狩年中に、將軍霍去病と云ふ人が、匈奴を征伐して金人（佛像）を得來つたと云ふことがあるし、前漢の哀帝元壽元年（紀元前二年）には景德と云ふ者西域の月支國に行き、佛教を習つて歸つたと云ふことがあ

るから、既に此時から、佛種は支那に移植されてをつたらしい、然し、公然佛教の支那に傳來したのは、後漢の明帝の時である、是れからして代々の支那皇帝は多くは佛教に殊遇優待を與へられたから、漸次有名なる高僧碩德が、印度地方から支那內地にやつて來て布教する樣になり、又支那からも有名な僧侶が或は流沙、葱嶺、路なきに路を求め、或は南海の波濤万里天風に怒して八重の潮路を推し分けつゝ印度に向ひ、或は經卷を得、或は名師より直接道を傳へ、遂に晉末から六朝唐の時代に亘り、西歷五世紀から八世紀に及んで、印度の本國には見ることの出來なかつた所の支那十三宗（毘曇宗、成實宗、律宗、三論宗、涅槃宗、地論宗、淨土宗、禪宗、攝論宗、天台宗、華嚴宗、法相宗、眞言宗）の發達を見ることゝなり、一切藏經の飜譯を完成するに至つたのである、彼の第一世の摩騰、法蘭、五世紀の法顯、六世紀の宋雲、七世紀の義淨、玄奘の如き、皆な遙々支那から印度に渡り、多年の辛苦艱難に百折不撓の精神を鼓舞して、三藏を佛の生土に求めたる法將であるし、又彼の五世紀の鳩摩羅什婆、六世紀の菩提流支、菩提達摩、眞諦、七八世紀の交に於ける彼善無畏、金剛智及び不空の如き、皆な印度西域の諸國より佛陀の遺法を齎し、不惜身命の大勇猛心を以て、言語風俗を異にした支那へやつて來た佛門の龍象である、その求法弘教の熱情と功績とは、何んと實に驚くに堪へたものではないか。

# 第十五章　支那古代の宗教と儒道二教の發達梗概

そこで是れから支那佛教の發達して行く有樣を御話し申す可き順序となつたが、然し彼の紀元初世紀に於て公然佛教が支那に這入る前に於ては、支那の宗教は、どんなものであつたかと云ふことを、一通り知つておく必要があらうと思ふ、それであるから極ざつと佛教渡來以前に於ける支那宗教の有樣を考察して見やうと思ふのである、抑々支邦の古代に於ける宗教はどんなものであるかと云ふに、そは畢竟天然崇拜と精靈崇拜との二つを出でないのである、彼の書經、禮記などを讀んで見ても、天子が四季の變り目などに於て、四方の山川を祭り天地に祈ると云ふ樣なことをやらるゝし、又諸侯伯が死んだ先祖の靈に告げて御祭をするとか云ふことがあるし、天の事は時に之れを上帝と云つて、信賞必罰を取り行ふ所の人格を有つてをる、一種の神の樣に考へてをつたらしい痕跡があるが、孔子（紀元前五五一―四七九）に至つて、却て無人格の天と云ふ文字を餘計用ゐて、人格的なる上帝の語は殆んど用ゐない樣になつた、然し支那人の云ふ天にしろ又は上帝にしろ、彼の山や川を祭ると同じ樣に、天然崇拜であると云ふことは明瞭である、この天と云ふ字は一と云ふ字の下へもつていつて、大の字を書いたので、則ち一に從ふ大で、渺茫とした同一樣の無限の蒼穹が、如何にも宏大に吾人の頭上を覆つてをるの有樣に驚嘆し

て、そを神化し神事する樣になつた所から天を神として崇拜する樣になつたのであらふ、支那人にはこの天然崇拜と同時に、祖先の靈魂を尊ぶ風が熾んであつた、孔子の如き非常にこの風を重んぜられてをつた、それでこの先祖の靈魂と云ふ考と、天地山川の中に在る神靈と云ふ考とが結び附いて、支那の精靈崇拜を形ちづくつてをるのである、それであるから支那古代の宗教は天然崇拜と精靈崇拜とから成つてをると云つて先づ差し支へ無からふ、こゝに云ふ精靈とは則ち彼の支那人の云ふ鬼神に外ならないのである、それで支那古代の宗教はバビロニア及びアッシリアに、セム民族が這入り込まなかつた以前の宗教と餘程能く類してをるので、則ちアッカヂアの宗教と最も能く似てをるのである、支那古代の人種も恐くこのアッカヂア人ではあるまいかと思はるゝのである、則ちアッカヂアの宗教は精靈崇拜と天然崇拜との兩者から出來てをつたのである。[illegible]から云ふ國に天地山川を崇拜し、祖靈の崇拜は盛んに行はれてをつたけれども、支那ではこの祭祀に與かる所の者は、天子又は諸侯の如き一國の主權者であつて、侯伯の勤めは、軍國の事務の外に又この祭祀と云ふことがその主なる職務であつた、從つて支那の宗教には印度猶太の如く僧侶と云ふ特別に宗教の事にのみたづさはることを本職としてをる一階級は存してをらなかつたのである、一國の主權者が即ち又祭祀の長をやつてをると云ふ所は、日本古代の神道に能く似てをるので、

此點に於て支那は祭政一致の制であつたと云つても差し支へなからうしてこれは又幾分か羅馬の宗教に似てをるので、羅馬では極昔は、祭司の職は僧侶と云ふ特別の人のすることではなく、政府の一役人であつたのである。[illegible]以上論明したる所に由つて之を考へてみれば、支那の古代宗教は天然崇拜と祖靈崇拜、若くは尙廣く云つて精靈崇拜であつて、之れに加ふるにその宗教の表現は、印度の樣に沈思冥想を主とするものでなければ、禁欲苦行を旨とするのでもなく、又猶太の豫言者の思ふてをつた宗教の樣に、精神的なる正義と愛とを中心とした宗教でもない、支那の宗教は二に神を祭る祭祀の儀式にのみ集中してをつたと云はなければならない、然しその祭祀を司るのは僧侶てふ特別の一階級の者の特權ではなくつて、寧ろ諸侯伯の務めである、從つて當時支那は祭政一致の制度であつたと云ふ可きである、しかして又その宗教の本質は前に云つた通り、天然崇拜と精靈崇拜とであつたから、所謂自然的宗教であつて、まだ倫理的宗教になつてをらないのである。[illegible]

然るに周末即ち紀元前五五一年の頃に於て孔子が魯に生誕せられて、支那國民の精神界に一大刷新を企圖せられたけれども、その關する所は普通に宗教と云ふ所のものよりも、寧ろ道德と云ふ範圍に屬するのであつて、孔子は出來る丈け天とか天道とか鬼神とか云ふことを避け、子不語怪力亂神を以て主義とせられた、又その

道德界のことにしても、將た又政治上のことにしても、孔子は努めて新規を衒ひ奇矯の言を弄することを避け、自ら祖述堯舜憲章文武と公言せられてをつた、古聖先王の遺敎を顯揚するに過ぎんと云はれてをつた、それであるから社會改良家としても、道德界の刷新者としても、一宗の開祖としても、孔子は他國に於ける同一偉人の生涯に比するに、何んとなく華麗でない所があつて大に質素である、然しその質素な所が孔子の特色である、そは孔子の短所であると同時に又その長所とも云へるのである、然し自分の考に由れば、如何に孔子が祖述憲章、古人のじきたりを其儘發揚し勵行するばかりであると云はれたからと云つても、孔子には全く何等の自家獨特の創見もないとは云へないと思ふ、矢張孔子は一種の才氣を揮つて名を先王の古例に藉り、當時の世道人心に一大革新を遂行せんと欲した一偉人たるに相違ないのである、唯それをするに當つて、孔子は支那の國情が尙古の風に富んでをるに由つて、それに適合する樣、民俗に顧みて着々精神界の改革に着手されたから、モハメッド、ルーテル、カルヰン等のやつた宗敎改革の樣に目覺しい活劇否な寧ろ大悲劇は演出されなかつたのである、こゝが又た孔子が釋迦や耶蘇とも大にその趣を異にしてをる所であつて、こゝに吾人は同一各國の偉人でも、各〻その異色のある所を認むるのである、殊に孔子には耶蘇がパリサイの徒を罵つた樣な激烈な性質の顯はれてをる說法は一もない、孔子は決して釋迦が四姓の別を顧みなかつた樣に、從來の國風に背反した行爲は少しもなかつた、否な寧ろ孔子は努めて從來の國風に同化し適順しやうとしたのである、支那民族の特性として、彼の希臘風の進取棄銳の空氣中に生長した文學者ヂオゲネス、ディオゲネス、若くはルソー等と自ら違つて、孔子は獨り外部に順應する爲めに尙古主義を採つたばかりでなく、概して昔を尊び述而不作、信而好古の流儀の性質を具へられてをつたと云ふことも亦疑ふ可らざる事實であらう、今要約して孔子の主義とする所を云へば、理想を未來永遠の先きに置くと云ふ樣な進歩主義ではなくして、却て過去堯舜三代の遺風を墨守すると云ふ保守主義である、その云ふ所行ふ所は宗敎的ではなくして、寧ろ道德的である、社會政策家的である、政治家的である、從て超自然的の天國や未來死後の世界をのみ渴仰して一向神の敎を説ふと云ふ樣な風ではなくして、現實の事實を重んじ、現世に於ける五倫五常の道を實踐躬行することを敎ふることを先とし、少しも他の奇なる自然的知識を主とせられたのである、この世を脫れや愛と云ふ樣な厭世主義でなく、寧ろ人事を盡して天命を樂むと云ふ樣な樂天主義である、孔子が少しでも極端でない嫌のあることは直ぐこれを避けられた樣云ふことは、彼の老子が以德報怨と云ひ上に對して、以直報怨以德報德とした方が善いと云はれたのでも分かる、孔子は詩を謳詠したり又は禮樂を重んぜられ

て、感情と云ふことも決して無視されたのでは無いが、孔子の所謂宗教なるものは祭祀の儀式を外にしては殆んど皆無であらふ、この點は獨り孔子ばかりではなく、支那思想の正系は殆んどかうであつて、支那に於ては決して希臘や日本に見る樣な男女の愛、物のあはれとふ如き感情的分子は、その宗教の中に表現してをらない、神韻縹緲として思想の放奔してをる希臘のポメーロスや印度の梵陀に見る樣な神話的宗教は全く一も支那に於て見出すことが出來ない、この點に於て寧ろ支那の宗教は羅馬の宗教に酷似してをると思はれるのである、羅馬の宗教はキケロも云つた通り、祭祀の儀式是れ宗教と云ふ有樣である、支那の古代宗教も亦丁度かうである、羅馬人の宗教が感情の側に全く缺乏してをる如く、支那の宗教も全くこの側の發達を缺いてをる、支那の宗教は羅馬の宗教と同じて、矢張律法的である、羅馬人は神に禮するに當つても、神威の峻嚴なる、信者は恰も法官の前にでも引き出された犯人の樣に思つて、その神を拜するにも頭をさへ擡げることを能う爲さなかつた、と云ふことであるが、支那の宗教にも餘程この傾があるやうである、從つてその宗教は自然的であつて無邪氣で天眞爛漫と云ふ樣な所は全く無く、唯形式儀禮の一方にのみ奔つてをる、所謂禮儀三百威儀三千てふ有樣である、孔子自らも餘程この形式主義を好かれた樣で、その少時既に嬉戯の間にも俎豆を陳ねて禮容を設くと云はれてをる位である、今日でも支那人が葬式の時には泣男と云ふものを雇つて來て、之れに號哭の聲を發せしめて、葬を送らなければ、何にか終を厚うするのの體に飲けてをる樣に感じてをるのである、然るにその肝心の喪主たる親戚緣者はどちらかと云ふと、全く悲しさうな顏もしないで、談笑の間棺槨に屬して行くと云ふ風である、誠に物の事も是れ程形式の末にのみ奔つた甚しい例は無いであらふ、孔子の思想にも、支那民族の特風である、この形式主義が盛んであると云ふことはどうも免れなかつた樣である。

前に段々と申し述べて來た樣に、孔子は一向堯舜三代の遺敎を布演することに努め、決してその他か別に一新機軸を出さうと云ふやうな考は、どつちかと云へば先づ無かつた方である、そこで孔子の敎へた所は倫理道德の敎であつて、その根本義は何にも強ち獨り支那人種丈けに特別限つてをると云ふ譯でなく、その性質頗る普遍的世界的のものであるのに、尙孔子立敎の態度がどうも或は堯舜と云ひ三代と稱して、支那太古の帝王賢聖を理想として、つたから、その敎はどうしても耶蘇や釋迦の世界主義四海同胞主義と違つて、まだ國民性の餘臭が全く消え去らない趣きがある、そこで孔子自らも東狄之有君、不若諸夏之亡と云ひ切つて、獨り自ら中夏を以て居り、他を野蠻未開の人民として卽ける樣な傾がある、少くとも四海万國の民に父と子と聖經の名を以て我が道を傳へよと云つた、耶蘇の普遍主義や、衆水の海に入つて、一味なるが如く四姓等しく佛門に帰して又再生族と非再生族との

區別全く殺すと考へられた、釋迦の世界主義とは自らその有樣を異にしてをる所があるそれであるから若し耶蘇や釋迦の精神を以て、純世界主義又は純普遍主義と云ふならば孔子の教へは所は半世界的又半普遍的であると云はなければならない少くとも孔子には釋迦や耶蘇の樣に國民的特種性を全然無視して自己の新主義を實現しやうと云ふ樣な考へは毛頭ない、寧ろ支那國民てふ小圈内に於て、道德や社會や政治の改良を計ちふと云ふのであるそれであるから自分はこの點では、孔子を以て釋迦や耶蘇に比するよりも、寧ろ猶太のモーゼに比すべきであらふと思ふ何せと云ふに孔子は支那國民が從來諸先聖王に由りて發達させられて來た、國民性を帶びた道德主義＝＝之れを宗教と稱すべきんば宗教的信念＝＝社會政策若くは一種の政治主義を大成組織したのであつて、恰もモーゼが從來イスラエル國民の中に發達して來た思想信念を組織大成したと同一の位置に在るからである。

以上述べた通り孔子に至りて大成された所の思想が支那思想の正系であつて、それが古聖先王から連綿として繼續して來たのを、孔子が組織大成したのであつて、孔子の孫子思（紀元前五〇〇頃）及び高弟孟子（紀元前三七三＝三八九頃）などを閲て益々發達して來た、然るにその思想が餘り現實的で聖人は常を云つて變を云はず主義を固執して一向中正を重んずるの極、餘り單調一趣で平凡に流るゝ嫌があるから



如何に現實的で他の奇を好まない支那民族でも、どうも是れ丈けでは滿足が出來ないものと見えて、孔子と相前後して、その思想は却て現實を輕んじて現實界以上の深奥を希求し、その立論奇峭にして常に世人の意表に奔逸し、倫理道德の常規を脱して超道德主義を採り、人倫五常の教を以て聖人の僞に出づと喝破して、頭から之れを冷罵し去り、さらして所謂ゆる流の復初主義に由つて悠然地上に自然を樂み、道德主義の狹隘なる拘束を壞つて、超倫理主義を主張した學匠がある、是れは則ち有名なる老子（紀元前六〇〇頃生）その人である、それであるから老子は斷然その道德經に於て、大道廢有仁義、智慧出有大偽、六親不和有孝慈、國家昏亂有忠信と喝破し、絶聖棄智民利百倍、絶仁棄義民復孝慈、絶巧棄利盜賊無有と迄道破し、五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令人口爽と大喝し、以て明に孔子一流の常識主義現實主義道德主義形式主義論者をして、如何にもその議論の大膽不敵にして、奇矯警拔なるに思はず青天の霹靂、その耳朶を掩ふに遑らず、覺えずその心魂を寒からしむるの慨があつた、孔子がその思想形而下に泥み、努めて死を說き、天道を道ひ、鬼神を談ずるを避けたるに反して、老子はその思想形而上の哲理の深奥幽邃なるものに出入しその道德經の劈頭に、天地万物の本源眞因を明らめ、無名天地之始、有名万物之母と斷じ、太初無名の道を目して玄之又玄、衆妙之門と嘆稱し去るに至つたのである、老子の思想は列子（紀元前四七〇＝三七〇頃）莊子（紀元前三七〇＝二七〇頃）に傳つて

稍神秘的分子を含有することゝなり、無爲恬澹自然を尊ぶの風は益々盛んとなり、仙丹に千歳の齢を保ち、無何有の鄉に逍遙するの神仙的生活を、髣髴の間に夢想するに至つたのである、是れはしして彼の所謂方士なるものを生じ來つて、老子の教は道教として、永く支那民間の信仰界にその勢力を有し、儒教の現實主義の不足を補充して、宗教的に人心が現世以上を、要望するの希求を滿足せしめつゝあつたのである。

抑々孔子と老子とは、殆んどその時を同うして起こり、老子は孔子よりも一層先輩である、老子はその思想の深遠幽邃なる孔子と雖も大に畏敬したつた所であつて、孔子は老子着想の出沒端倪す可らざるものあるを稱して、老子を龍に比した位である、周代に於ける思想界の二大明星孔老二子は互に邦を異にして起こり、孔子は鄒魯の地に生れ老子は荆楚の野に現はれ、この兩人の者一たび相見るの機會はあつたけれども、十分その議論を上下して、各自の抱負を披瀝し、談論の風生を見るを得なかつたのは千歳の遺憾である、殊に孔子を繼承して鄒魯の潮流を代表して出てたる孟子と、老子の思想を大成して荆楚の思潮を双肩に擔つて表はれたる莊子とは、共にその文辭辯論に妙を得たる、一たび大堂の下に相會し、その相異れる思想の蘊蓄を闡はすことが出來たならば、餘程目覺ましいものがあつたらふに、此兩人のもの亦、時を同うして生存してをつたのに、是れ又一回も相見るの機會がなかつたのは頗る殘念なことであつた、然れど孔子の後に孟子あり、老子の後に莊子あつて、互に鄒魯荆楚の二大思潮を大成し、一は儒教たる支那思想の正系を整備し、一は道教たる支那思想の傍系にその基礎を成し、爾來この二者正傍兩思系をして、永く支那上下の精神界を支配し、以てその二大重鎭を爲さしむる根底基礎を形つたのは千歳の偉觀である。

秦の始皇帝（紀元前二四六―二一〇）一たび儒士を坑し儒書を火し、儒教を嚴禁されたことがあつたが、それも永くは續かず、前漢紀元前二〇六年紀元後二四起こるに及んで、大に儒教を再興し儒書の散逸してをつたものを收集し、前漢の高祖は親ら魯に幸して孔子の廟を祭られた位であるから、それからと云ふものは、儒教はこゝに復活の機運に際會することになつた、然かのみならず、從來單に道德の教であり社會政策であり政治主義を主としてをつた所の儒教は、稍宗教的の色彩を帶ぶる樣になり、祖靈崇拜てふ支那固有の思想と結び附いて、孔子の靈を祀ること次第に盛んになり、代々の天子は屢々孔子を追諡してその德を贊し、遂に孔子は宛然無形なる思想界の帝王、無冠の皇帝てふ尊位に昇るやうになつた、從つて釋奠の禮は歷朝の痛く重んずる所であつて、今日山東省に在る孔子の廟の如きは中々莊大端嚴なものて、その結構頗る華麗を極めてをる、廟内には孔子の像と位牌とを中心として、その四方には孔門の諸弟子及び孔子の父母と孔子の妻と孔家五祖の靈を併せ

祀つてをるのであり、又北京の大學國子監に在る孔廟は毎年三回帝王親ら之れに詣拜し國家の職勝は必ずその廟に告祭すると云ふ有樣である、その外支那全土を通じて、孔廟の數は千五百の多に上り、毎月一日と十五日とを以て例祭日となし、年に春秋二期を下して大祭を執行し、政府の官吏臨場して之れを行ふことゝなつてをる、支那人はその佛教徒であり將た又道教徒であるにしても決して孔子の教を全く無視する者は一人もないのである、又以て孔子の教が孔子の歿後如何に支那全國の人心を支配して力あるに至つたかを見る可きである。（[illegible]）孔子の教は元來無神論に近いものである、少くとも神を以てその教理の中心骨髓とはしなかつたのである、然し孔子は天とか鬼神とか云ふものを、全く否定されたのではなかつたことは、釋迦が諸天とか梵王とか云ふものゝ存在を全然排斥し去らなかつたのと同一である、と云つて、又孔子も釋迦も共に是れ等の神格を以て自己教說の中心點とはせず、却て是れ等の神格を以て、自己の教說中から度外視してをつたと云ふことは同一樣に出てたのである、然るに儒教も佛教もその教主の死後漸次その教生の人格を崇拜し、教主の靈廟を禮拜し教主の諸弟子迄もその存名なるものは、之れを崇拜する樣になつたのである、それであるからこの點に於て、釋迦と孔子の遺教が後世に發達した形式は、丁度オ[illegible]ド、[illegible]ドの無神論的實證哲學からして、氏の人間宗の現はれ出てたのと餘程軌を一にしてをる所があると思ふ、則ちコムトは基督教の神を否定して實證哲學の根據から人間を中心とし、人性を崇拜し、人間そのものを崇拜すると云ふ一宗教たる所謂人間教又は人類教なるものを創始したが、人性を崇拜し人間そのものを崇拜すると云つても、餘り漠然としをる所から、その人性の精粹を一身に鍾めて、人性が最も能く現はれてをると考へらるゝ所の、古代の偉人聖哲を擇び拔いて廿九人を得、之れを月と日とに配當して崇拜するに至つたのである、それであるからコムトの人間宗は、その主義理論の上に於ては、無神論であつて、その實際に現はれた所では幾多の聖賢を崇拜すると云ふ所謂多神教と云ふ有樣になつて來た、自分は釋迦や孔子の無神教もその教主の死後に發達した有樣は丁度この趣があると思ふ、然しこゝに注意す可きことは、釋迦も孔子も共に無神論者であつて、その死後教主崇拜が次第に有神的形式を以て現はれて來たのであるが、印度人と支那人とは根本的に人種の性格が異つてをる所から、印度人の想像力に富める、元來無神論であつた佛教は、偉大なる有神論に發達して來ましたが、支那人の詩的想像力に飲乏してをる、如何に孔子を尊崇しても、孔子は全く人間以上の存在者即ち神たるには至らなくつて、依然孔子は一種の人間であつた、唯人間中の最も偉大なる聖人として之れを崇拜するに過ぎなかつたのである、それであるから支那歷代の帝王は孔子を追諡して王とか皇帝とかの位は與へたが之れを神とは云はなかつたのである、こゝは佛教思想と儒教

思想とが根本的に異つてをる所であらふと思ふ。

儒教は支那思想の正系である、その正面的の發達である、支那の國教であると云つても差し支へない、その故は代々の皇帝は、時に或は老を排し佛を黜けられたことはあつても、支那の歴朝餘程亡道の君主でも、秦始皇の如きものを外にしては、未だ曾て一人も孔子の教を以て治國平天下の要道とされなかつたものはないからのことである、それで儒教が支那思想の正系であり、その正面的發達であると同時に道教は丁度その傍系であつて、その反面的の發達を爲したものであると云つても差し支へないのである、孔子の教が外儀を重んじ禮容を尊び堯舜三代の治を謳歌して、修身齊家治國平天下の實を擧ぐるのを以てその教の本旨としてをるに反して、老子は一切是れ等のものを擯けて用ゐない、却て外儀を重んじ禮容を尊ぶのを以て迂なりとし、有害無益として顧みない、老子は忠孝仁義などと口八釜しく云ふから、却てその實が擧がらないのである、宜く人生の自然に一任し拘束を加へない方が眞に修德の實が擧がるのであると、かう主張して、恰も自然の儘に任かせよと云ふ、ルーソーの復初主義の如きものを稱道したのである、恍洋自恣無爲恬澹、超然として世外に悠遊自適しやうと云ふのは老子の理想である、それであるから老子の教からして三國の頃清談の徒が起つて來て、甚しきに至つては、竹林の七賢人など稱して、徒に酒に酗して人世の常事を輕んじ、爲す事もなく優遊徒食、しだらない

不規則無秩序の生涯を送るのを以て自ら是れ高しとすると云ふ樣な風を作り出す仕末になつたのである、然し斯樣な思想の傾向は、早く既に莊子に於てその暗潮を兆してをるのであつて、莊子の南華眞經一部を繙く者は何人もこの間の消息を認むるに躊躇しないであらふ、偖て又かう云ふ風に老子の教からして、無爲逸遊是れ高しとする清談の風が生じてくると共に、又老子の思想からして養氣長生の術を尋ねて神仙の寶壽を享けたいと希ふ思想の傾向が生じて來るに至つたのは自然の結果である、それと云ふは老子が無爲恬澹世塵の累はす所とならないで、自然を樂むと云ふのは、則ち窮屈な人世の羈絆を離れ、禮儀作法など云ふ小事に心を惱まさないで、悠遊自適、呑氣に一其生を了し、天壽を全うしやうと云ふことに外かならないからのことである、そこで老子以後この思潮の趨勢は中々大したもので、當時人々周室の瓦解奸雄の割據、兵馬倥偬として戰國亂離、人生の朝夕を保す可らざる修羅場を目擊してをることゝて、斯かる塵世の外に悠遊して無爲恬澹徐に長生の計を回ぐらさうとするのは人性自然の要求である、そこで養氣長生の法を講ずるは道教の一大眼目となつて來た、秦の始皇帝が儒士を坑し儒書を火せられたにも關らず、獨り道教のみ始息の殊遇を蒙つたのは、蓋し是れが爲めである、始皇の如きは方士の誣言に眩かされ必ず仙丹を求めて以て養氣長生の得らる可きを信じられたのである、漢起こるに及んで、前漢の武帝（紀元前一四〇―八七）の如き熱心な

る道教の信者として、方士李少君なる者が、能く竈を祠れば丹砂を化して黄金と爲す可く、蓬萊島裏の仙者以て見る可く、若し之れを見て封禪したならば、不死長生を得と、盧を眞實しやかに說き勸めたのについに誑されてしまつて、屢々莫大の資を投じて海上に遠征隊を派遣し、蓬萊の神仙を探らしむるに至つたのである、後漢の世桓帝(紀元後一四七―一六七)又道教を信じ老子を祭られたことがあつたその後三國から六朝に亘つて、道教は一弛一弛或は帝王の保護を得或は政府の迫害に逢ひ、必しも常に政治上の擁護を蒙つてをつたとばかりは云へなかつたが、前漢以來道教の根底は愈々深く、その教旨益々人心に浸染し、漢末亂離の餘を承けて、流石現世主義なる支那の人心も厭世的悲哀の調を帶び來つて、此間老莊の流行は益々旺んになつて來、或は恬澹自恣、世を藐視し去つて、僅に安心の地を求め、清談酒に隱れて心の醉を遣るなど、皆な道教の影響ならざるはなしと云ふ有樣であつた、彼の前に云つた竹林の七賢人(山濤、稽康、阮籍、阮咸、向秀、王戎、劉伶)を初めとして、王弼、何晏、夏侯玄、荀粲、陳思王曹植、葛洪の如き比々皆な然りである、唐(六一八―九二二)に至つては、唐家が李姓で老子と同姓であると云ふ點で、太宗(六二七―六四九)高宗(六五〇―六八三)共に道教を保護し、老子を追謚して太上玄元皇帝となし、道教の勢力朝野に振ふの有樣であつた、玄宗(七一三―七五五)に至つては、孔子と共に孔門の諸弟子を附祀するの例に倣ひ、老子と共に列莊二子を併せ祠るに至つたのである、宋(九六〇―一二七〇)元(一二七九―一三六七)朝に亘つても、道教は概して政府の優遇を蒙り、宋の徽宗(一一〇一―一一二五)の時全國の寺院を改めて宮觀とし、僧を德士となし、僧尼を女德士とした位であつたが、元の世祖忽必烈(一二六〇―一二九四)の如きは、道教が祈つて皇后の死を癒やしたのを以て、非常な殊遇を與へたと云ふことである、忽必烈の朝に事へてをつたマルコポロの記錄に由ると、當時の道士は祈禱禁厭を主とし、我國の修驗者の樣なものであつたのである、然し元の世祖忽必烈は至元十八年(一二八一)に至つて神秘虛誕の分子なき老子道德經一部の外は一切道教の書を焚き捨て、道士の髮を削らして僧徒と爲したと云ふことである、之れは道教の爲めに非常な迫害であつたのである、之れに反して元亡び明興るに及び、明の太祖(一三六八―一三九八)を初めとして、その他明の歷朝は大に道教を優待したのであるが、然し明の孝宗(一四八八―一五〇五)以來現今の清朝に至つては、道教は俄然政府の保護を失ひ、清の康熙帝(一六六二―一七二二)の如き道教は迷信多く、良民を蠱惑するを惡んで之れを嚴禁せらるゝに至り、道教の妖術を行ふものは之れに刑罰を科すとの敕令を天下に公布せらるゝに至つた位である。

以上は大略道教の歷史的發達でありますが、道教が老子本來の幽玄深邃なる哲學思想を離れて通俗化し、民間の信仰とならふとして來ましたとき、茲に道教は獨り老子を以て祖とする丈けにては尙ほ足れりとしないで、道教の源は黄帝(紀元前三

〇〇〇頃）の太古に在りと說き出し、黃帝が龍に乘つて上天せられた時、その侍臣は龍髯をつかまへて共に天に昇らふとしたけれども、龍の髯が拔けて地上に落ち、とう〳〵昇天することが出來なかつたが、黃帝のみ獨り龍に從つて天に上ることが出來て、こゝに不死の齡を保たれたと云ふ傳說が附會され、道敎の遠祖を老子以前の黃帝に迄求めて、その古色蒼然たることを衒ふ樣になつた、して又道敎が民間信仰として勢力を張る爲めには、老子道德經に見えてをる樣な、哲學上の空理虛想では到底駄目であることは云ふ迄もないが、その遠祖を黃帝に求めた許りでもまた不十分であるから、そこで道敎は、一方では感應篇（是れは唐代に一書に集められたものらしいのである）の如き、俗耳に入り易い道德の敎を流布することを努めると同時に、他方では支那太古の宗敎である天然崇拜と精靈崇拜とを、その敎系中に取り入れて、高山大川峰壑溪谷をも神靈の躰として、その不可思議力を崇拜し、不死長生を得んと願ふ思想と、離れ難き關係ある、人間の運命を豫知したいと思ふ要求は、道敎中に占星術の旺盛を致し、この地上に在る木火土金水の五元素を天上の星宿に配當して、木星火星土星金星水星として、大に是れ等の星宿を崇拜し、是等の星に由つて人間の運命を卜占することを敎へたのである、この思想は漢代より漸興して來た儒敎の陰陽五行十干十二支の說と共に支那の迷信を形ち作つた基となつた、その外又雷電を神化して雷神として崇拜し、龍蛇を神化して龍神となし、大に之れを畏れ崇めたのである、一八七四年に天津に大洪水のあつたあとで、蛇が出て來て、或る神祠の中に這入つた時は、洪水の爲め龍王の出現があつたと云つて、人々云ひ囃し、東洋のビスマルク李鴻章自らもその祠へ駕を枉げてその蛇を拜んだと云ふことであつた、又軍國の保護神としては、道敎の神となつた關羽を崇拜することが盛んであるし、富の神としては財神最も廣く崇拜されてをる、彼の不死長生を得たと云ふ神仙なる者の信仰の如きは、昔より道敎一般の信仰であつて、西王母黃石公など云ふ仙人の傳說に附會して、神仙を想望してをつたが、畢竟この神仙なるものは、その不死長生を庶幾すると云ふ思想と結び附いて、彼の古代の精靈崇拜を一層具躰的に考へたものと見ることが出來るのである、その道敎の三清なる三個の神は則ち道敎の三位神である、然しそれは後に佛敎と道敎との關係を述べる所で更に云ふつもりであるから、こゝでは略してをくが、尙終に一言す可きは今日支那の龍虎山には玉皇上帝なる神の化身であると云はれてをる道敎の法主が住んでをる、是れ實に宛然西藏の喇嘛（ママ）法王や、眞宗の法王や羅馬法王を道敎中に見る樣なものであるとのことである。

## 第十六章　支那佛敎の發達と儒道二敎の關係

前漢以來老莊の虛無哲學と、不死長生の術を講ずるの迷信とは、當代人心の奧底に

浸染しつゝあつた時に當つて、佛教は俄然西土より傳はり來り、王家の尊崇を蒙るに至つたのである、流石に現世主義なる支那人の頭腦も既に儒教の蠱を嚙むが如き乾燥無味の形式主義に滿足しないで、先づ虛無恬淡に流れ或は荒唐怪誕を旨とする道教を延いて是れ等の缺陷を補はんと孜にあせりつゝあつた時に當つて、一方では道教の寂靜無爲主義と趣を同うし、又他の一方では道教にいや勝さる不思議を說く所の佛教が當代人心の自然の要求に適應したのは、決して怪むに足らんのである、そこで後漢の明帝永平十年紀元六七年而て、佛教が摩騰、法蘭の二梵僧に由つて公然支那に這入つて來る樣になつてからは、譯經に造寺に着々として佛教思想は支那人の腦裏に浸染し、殊に永平十五年に佛道二教の優劣を白馬寺で火驗し、佛教はその不思議の幻術に巧なる、まんまと首尾能く道教に打ち勝ち、道教の右に出づるの法と云ふ實を示してからと云ふものは、天下靡然として佛教に帰依する樣になつた、後漢の桓帝（一四七―一六七）亦佛教を尊び黃金の佛像を鑄造して之れを親祭するに至つたが、獻帝の初平二年（一九一）には、牟子と云ふもの儒者の身を佛教を信じ、世の己れ儒者を以て佛教を信ずるを誹議する者に對して、理惑論なる一書を著はして之れを辨じた位であつた、爾來三國六朝の初めに至る迄、干戈止む時なかつた支那の社會は、人心をして世の無常を觀ぜしむること頗る大なるものがあつたと見えて、佛教は日々に其弘通を速にすると云ふ有樣になり、譯經の事業佛寺の建立佛像の鑄造梵僧の優遇等、佛教はその弘通上に非常なる便利を得、戰國の奸雄も半夜人無きに當つて、己のが既往を回顧して將來を思ひ、その曾て刃に斃つたことの多き、無辜の蒼生を塗炭に苦めたことの數知れざる、未來死後の身の空恐ろしく、流石に心に安んぜぬ所があると見えて、大に佛に帰依し、未來の冥福を祈つて僧を供養する樣になつた、則ち孫權、孫皓の康僧會に於けるが如き、石勒の佛圖澄に於けるが如き、符堅の道安に於けるが如き、孝武帝の竺潛に於けるが如き、桓伊の惠遠に於けるが如き、皆なさうである、かう云ふ風に紀元六七年に佛教が支那に這入つてから凡そ三百有餘年間は、主として支那佛教の素地を造りその基礎土臺をこしらへる爲めに、佛教僧侶は主として經文を譯し寺院を建て佛像を鑄ると云ふ樣なことをのみ勞めてをつた、殊に羅什以前に於ては安世高、支婁迦讖、支謙、康僧會、竺法護、竺法蘭の如きその主なるものである、然し彼の有名なる龜茲國の三藏鳩摩羅什婆が、晉の安帝隆安五年（紀元四〇一年）に、秦主姚興に迎へられて初めて長安にやつて來てから、支那に大乘教の盛んに勃興する初めを爲し、從つて支那佛教に佛教の本國印度よりも見ることの出來ない嚴然たる宗派の別を形成する樣になつたのである、然し勿論小乘教では毘曇宗と云ふのが羅什が長安に來る前二十年、即ち紀元三八一年に、僧伽跋澄、僧伽提婆、曇摩難提に由つて既に支那に這入つてをつたが、この時はまだこの毘曇宗即ち小乘の有部宗に對峙して、別に十派の門戶を

擬へた宗派はなかつたから從つて毘曇宗自らも唯僅に先に支那に行はれてをつたと云ふばかりで、まだ嚴然たる宗派の形を取つては存立して居なかつたと云ふても差し支へなからふじて見れば羅什が紀元四〇一年に、この小乘有宗に對して大乘の空宗を輸入するに至つて、初めて支那に佛教宗派の分裂を見るに至つたのである、尙ほこの毘曇宗と云ふのは、唐の玄奘（六〇二―六六四）以後は同く小乘有部の教であつた＋毘曇宗の進歩派＋俱舍宗に合併してしまつたのであります。

彼の羅什が傳へた三論及び之れと共に持つて來た成實の二宗は、共に大小二乘に亘つて空宗であつて、三論宗は龍樹、提婆の中論、十二門論、百論の三論を基礎にして開いた宗旨である、所謂龍樹の八不中道の妙理は本宗の根本義である、支那の三論宗は嘉祥大師吉藏（五四九―六二三）に至つて組織大成せられ、さうして吉藏歿後須臾くして唐朝中葉より漸く衰頽に傾いたのである。

羅什の傳へた成實宗も矢張三論と同じ樣な空宗であるが、三論は大乘教であるに反して成實は小乘教であると云ふ遂がある、然し成實は小乘ではあるけれども殆んど小乘であつて大乘の壘を摩すと云つた樣な進んだ教理である、それであるから我が國鎌倉時代の大德凝然（一二四〇―一三二一）は成實を評して、所說入玄覺是大乘之極所解居曲疑即上衍之妙と贊稱せられたのである、元來成實は紀元五世紀の頃印度に於て龍樹、提婆の無相大乘勃興以後、訶梨跋摩が小乘教中に在つても、のした所のものであるから、自ら大乘の風趣を帶びてをる所のあるのは決して偶然でないのである。

成實宗は俱舍（毘曇）の如き小乘中の有宗に對して、等しく小乘中より空宗を主張するものである、抑々無我と云ふことは通佛教の根本主義であるから、俱舍（毘曇）も成實も等しく採用する所の原理であるが、この無我即ち我空と云ふことは許るして也法空と云ふことを許るさないのが俱舍（毘曇）の採る所の立脚地である、則ち俱舍（毘曇）宗に在つては、宇宙万有を七十五法即ち七十五元素に分析して、三世實有、法躰恒有と說いて、是れ等の七十五元素即ち七十五法の實躰は空でないと云ふことを主張するのである、然るに成實宗になると、是れ等の諸法躰即ち諸元素も、又我と同く空であると云つて、我空と同時に法空を主張するので、之れが成實宗である、こゝが殆んど成實宗が大乘三論の一切皆空主義に近い所である、然るに成實は、これ程三論に近い說を立てながら、何ぜ大乘でないかと云ふと、成實は理論上我法二空の證を開いてをるけれども、實際上からはまだどうしても、法躰の實有であると云ふ迷執――即ち所知障――を斷滅することに躰達してゐないから、縱令我を空とするの證を開いて――煩惱障は全く全滅して――をつても、まだ純粹の大乘と云ふ譯にいかないのである、是れ吉藏、智顗の如き高僧が、成實宗を以て小乘と判決した所以である、成實は六朝梁の時にその最盛を極め、唐朝になつてからは衰頽に陷つ

てしまつた。

羅什の西來に後るゝこと十餘年即紀元四二四年に至つて、中印度の僧曇無讖と云ふ者、支那の西北部なる涼州の姑藏に於て大槃涅槃經を譯じて、一切衆生、悉有佛性の理を鼓吹し、初めて涅槃宗を開き、羅什の成實三論とは消極的空宗に對して、大乘中に於て積極的有宗を創め、華、天、密、禪の如き實大乘甚深の妙理を開顯する先驅をなしたのである、涅槃宗は曇無讖以後道生、慧嚴、慧觀の三師盛んに之れを傳へ、六朝より隋に亘つてその全盛を極め、唐の中世以後は智顗の天臺宗に合併せられてしまつたのである、思ふに智顗の天臺宗の所依たる法華經は涅槃經と同性質の經文であるからである。

紀元五〇八年即ち梁の武帝の天監七年には菩提流支と勒那摩提との二名の梵僧が支那にやつて來て、世親の十地論に基いて地論宗を開きましたが、地論宗は唐の初に華嚴、法相の流行と共に、この兩宗中に吸收せられ、その六相圓融の形而上學は華嚴宗の中に入り、八識緣起の心理論は法相宗の中に攝せらるゝに至つたのである。

然るにこの地論宗を傳へた菩提流支は、支那にけ於る淨土教の正系中その初めを爲した人であつて、淨土の三部經を逐意的に解釋した世親の著往生淨土論を翻譯して（紀元五二八）その教旨を齊朝の曇鸞（四七五―五九四）に傳へ、これから道綽（五五二―六四五）善導（六一三―六八一）に傳つて、易行他力の念佛は支那で大成せられ、その弘まつた區域の廣大なる、その流行の歲月の永き、支那佛教中禪を措いて他に比類なき淨土教の發達を見るに至つたのである、然し支那に他力念佛の教を廣めたのは、流支に先ちて既に廬山の白蓮社の慧遠（三八七―四一六）があるし、唐代に於ては慈愍三藏惠日（六八一生）と云ふ人があつて、十八年間印度に旅行して、淨土教を傳へて來たが（紀元七一九）、支那に於ける淨土教の正系は菩提流支に初まつて善導に大成したのに在るのである。

その流布の範圍から云つても、又その弘教の歲月から云つても、淨土教に比して、未だ俄にその優劣を定めがたい一大宗派が支那にある、是れは則ち菩提達磨の禪宗である、禪宗は釋迦が靈山會上に拈華瞬目を以て口舌の說法に代へられたるに源を發したのであつて、その當時會座の大衆中獨り摩訶迦葉のみ以心傳心、釋迦拈華瞬目の眞意を了し破顏微笑したからして、釋迦は直にその正法眼藏涅槃妙心を以て迦葉に附屬し、僧迦梨衣を賜ふてその證とせられたと云ひ傳へられてあつて、直指人心、見性成佛、不立文字を標榜して立つ所の宗旨である、菩提達磨は實に迦葉以來的々相承し來つた第二十八祖であるといふことである、達磨は紀元五二七年即ち梁の大通元年、海波万里一葉の片舟に掉して遙々印度から支那の廣州にやつて來たのである、然るに不幸にして達磨は梁の武帝の容るゝ所とならなかつたから、江北の

嵩山少林寺に蟄居し、面壁九年靜座觀念に餘念なかつたと云ふことである、時に偶々達磨は一日慧可（初めの名は神光）の人となりしを見拔いて之れに法を附屬し、支那に留ること九年遂に世を去つたのである、そこで慧可より的々相承して支那禪宗の第五祖弘忍に至り、弘忍の門下千有餘の徒弟中神秀と慧能（六三八―七一三）との二大俊才を生じたのであるが、弘忍は神秀が偈を頌して、身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿遣惹塵埃、と云へるものと、慧能の菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃、との兩者を對照して、慧能の一層大器なるを知り、一夜慧能に釋迦相承の衣法を附屬したのである、こゝで禪宗は二派に分れ、慧能の禪を南宗頓教と云ひ、神秀の禪を北宗漸教と稱する樣になつたが、北宗は後世餘り振はない、獨り南宗のみ唐宋元明の間に榮え、五家（曹洞、雲門、法眼、臨濟、潙仰）七宗（以上の外に楊岐と黃龍とを加ふ）の派別を見るやうになつたのである、支那の佛教中永くその人心を支配して今日に至つたものは、澤山の宗派中獨りこの禪と淨土のみである、換言すればその修行の方法に於て困難を極めた華天性相の教ではなくつて、その實踐の最も簡易なる禪と淨土との二宗である、李唐の末葉に至り他の宗派は漸く衰頽して落日西山の趣があつたが、淨禪の二家は李唐以後宋元明の三朝に亘つて、尙ほ上下の信仰を博して居つたのは、眞個に所以ありと謂ふ可きである。

然るに又紀元五六三年陳の文帝天嘉四年に眞諦なる印度僧が無著の攝大乘論を支那に翻譯して攝論宗を興しましたが、後ち玄奘が唐の貞觀三年紀元六二九年から十六年の歲月を費し、幾多の苦心と艱難とを排して、印度に渡つて法を求め、皈唐の後その上足の弟子慈恩大師窺基（六三二―六八二）と共に、無著世親の教系に屬する法相宗を弘むるに至つてからは、攝論宗はその教理の相類せる法相宗の中に吸收せられてしまつたのであるが、この所謂法相宗なるものは嚮者の三論宗と相並んで眞如と万有との圓融無礙なることを說かないから、佛教中權大乘に屬するので、而かもその立敎の旨義は全然反對の位置に立つてをるものである、則ち三論宗は前にも云つた通り大乘中の空宗であるが、法相はその有宗である、三論は八不を說いて万事を空了し去るに反して、法相は八識緣起を說いて現象界の存在を是認するのである、三論は實相論であるに反して法相は緣起論である、三論は認識論上の考察に由つて消極的に中道の理を顯さんと努め、法相は認識論上の考察より入つて積極的に阿賴耶識の存在を立て、諸法と隔絕せる凝然眞如の本體を想望するのである、是れ同一樞大乘に屬するものゝ中でも、三論法相の異れる要點である、法相宗は唐代の二高僧玄奘、窺基の力に由つて俄に勃興したのであるから、是等の二高僧世を去るに及び、慧沼、智周の龍象その跡を承けないではなかつたが、唐の玄宗（七一三―七五五）の開元以後は大に衰頽に傾いたのである。

以上論明した通り羅什か一たび長安にやつて來てからと云ふものは、支那佛教は

非常に隆盛の域に向ひ、天風錫を飛ばして諸高僧の印度支那の間に往來する者非常に頻繁となるに至つた、そこで又宗派の分立引きもきらず、支那佛教は恰も春風一過櫻桃梅李一時の春と云ふ有樣で、各妍を競ひ美を爭ふが如き風情であつた、それであるから支那佛教は天台、華嚴、兩宗の興起と共に、その理論的發達を大成して儒者の百花爛熳の果實を全く收め得たるの有樣となつたのである、天台が法華涅槃の兩經と智度論とを教理の所依となし、一種の觀念論的實在論の下に立つて空、假、中の三諦を說き、一念三千、一心三觀の妙理を談じ、本躰現象の融通無礙なることは即ち理事無礙論の奧旨を樹立して、釋迦の一代經を智者大師智顗（五三八―五九七）の該博宏大なる頭腦能く五時、八教の綱目の下に解釋するに至つては、獨り佛教々理の發達も近世カント以後に於ける獨逸哲學の觀念論的實在論派とその幽玄を爭ふに足るの慨があり、ヘーゲルの歷史哲學の思想に出入して雌雄を競ふに足るのみでなく、佛教の祖國印度の本土には未だ曾て見ることの出來なかつた至大なる發達を支那になしたものと云はなければならないのである、殊に又た彼の華嚴宗が華嚴經を所依として十玄、六相の範疇を設け、天台の理事無礙論から一歩を進めて事々無礙論を樹立し、無盡緣起を說定するに至つては、シェリング哲學（本躰現象の中で本躰に重きを置いて立論したもの）に一歩を進めて、ヘーゲル哲學（本躰現象中現象に重きを置いて立論したもの）の根本義に直進し來つた趣があつて、その深遠の想、宏大の致、西洋十九世紀初の哲學思想が早く既に六七世紀の頃に於て、東洋支那の佛教中に起り、さうしてこの紀元六七世の頃は西洋に在つては、所謂中古の暗黑時代、基督教の教權が希臘哲學自由の美花を萎靡凋落せしめ、僅に亞剌比亞の一隅にその餘薬を保ちつゝあつたのであると云ふことを思ひ合はす時は、吾人は支那佛教の發達を敘し來つて實に一種云ふ可らざる無限の感想に打たれるのである、自分の見る所では華嚴宗に繼いで起つた――勿論眞言宗は支那では僅に印度からその種子を移植したに過ぎないので、日本の空海に至つて大成されたのであるが――眞言宗の如きも、僅に華嚴の事々無礙論の理論を實際の方面に應用して、六大、四曼、三密となし、佛と衆生との間の感應を說く、加持祈禱となした丈のことである、してみれば天、華の兩大乘は、支那佛教理論發達の精華を鍾めてそれを大成したものと云はなければならない、してこの天、華の兩大乘はその兩者殆んど時を相前後して興つたので、天台はその初め慧文（北齊の頃）慧思（五一五―五七七）の兩師あつて支那天台の實行的方面を開拓してをつたが、隋の智者大師智顗（五三八―五九七）の非凡なる天才に由つて儒者に示めしておいた天台の教理は組織大成せられてたのである、然し玄奘の窺基に於けるライプニッツのヲルフに於けるが如く、智顗の思想をまとめて之れを文辭に表はし、天台の三大部（玄義、文句、止觀）の如き大冊を成就したのは智顗門下の俊秀灌頂（五六一―六三二）である、その後ち唐に至つ

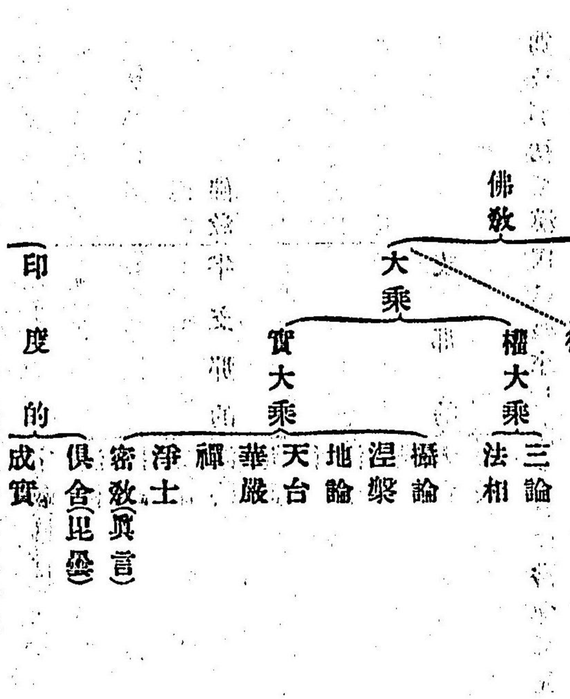
ては滿然（七一一―七八二）の台宗を中興するあり、宋の時に知禮（九六三―一〇二八）再び之れを興隆するやうになり、知禮以後天台に山家（事造の三千を立つるもの）山外（事造の三千を許るさぬもの）の二流を分つに至つたが、宋以後は大に衰頽に飯したのである、然るに天台宗とその盛衰を共に興にしたものは華嚴宗である、則ち華嚴宗には智顗に少しく後れて杜順（五五八―六四〇）の如き名匠あり、天台の滿然と相並んで華嚴の澄觀（七三七―八三八）あり、天台の知禮と相並んで華嚴の淨源（一〇八八歿）の如き高僧が出てをるのであるが、獨り此間に處して卓然華嚴の宗風を煽揚し、斯教の玄旨を發揮された者は唐朝の賢首大師法藏（六四三―七一二）その人である、法藏は天台の三大部を完成した灌頂と少しく世を後にして出て、探玄記を著はし紀元四〇八年に來朝した佛馱跋陀羅の漢譯した華嚴經に註釋を施して華嚴宗を大成せられたのである、法藏は金獅子の比喩に由つて法界無盡緣起を說いて大に則天武后の皈依を得たと云ふことである、然し華嚴宗も天台宗と同く宋末には衰頽に飯してしまつたのである、華、天の兩家に至つて、實大乘甚深の妙理は遺憾なく發揚されたと云つてよいのであるが、かやうな工合に哲學風の理論に長じてくると、實行の方は兎角退歩しがちなものである、理論實際の兩方面が一樣に併進すると云ふことは實際上餘程出來難いことと見えて、華、天の實大乘家が互に競つてその論旨、玄の玄を叩き微の微を闡くと云ふ有樣になつて來ると、彼の釋迦入涅槃の際唯一重大なる遺囑であつた戒行の實行戒律の厲行と云ふことがおろそかになつて來た傾がある、所謂能く言ふ者は能く行はずの諺に洩れず、教理の高尙を衒ふ者は實行之れに伴はないと云ふ風が段々教界に現はれて來たから、こゝに持戒嚴重の聞え高き唐朝の南山律師道宣（五九六―六六七）は、斯く僧風の擧らざるのを慨して戒律の勵行を期し、道宣は釋迦滅後優婆離、優婆毱多、曇無德をへ曹魏の時初て曇摩迦羅（二二二）及び曇諦（二五〇）の二人に由て支那に行はるゝに至つた所の戒風を發揚しやうと云ふことに專心熱衷したそこで道宣は時世の必要に應じて所謂小乘の戒法を大乘の意を以て解釋し、戒律は必ずしも小乘教徒の些事でない、それは大乘教徒の是非とも履修せんければならぬものであると云ふ旨を明にして、律宗でふ一宗を興隆したのである、是れ實に道宣の力である、今道宣が彼の所謂小乘の四分律を解釋するに主として大乘の意を以てしたのは、當時支那に華天の如き實大乘幽玄高妙の哲理が世に時めき、戒律の如きは小乘徒の些事として時人の顧みる者がなかつた秋に於て、世に戒律の勵行を勸めんとするには、その策としてどうしても勢こゝに出て、小乘戒中に早く大乘の意を存し、大乘教徒と雖も戒律は嚴重に尊重しなければならないのであると云ふことを鼓吹しなければならないのである、それであるから道宣はかう云ふことを云つてをる、曰く、見奉律者輕爲小乘毀淨戒者重爲大乘と、又以て當時の弊風が如何に道宣をして律宗の興隆に感奮せし

めたるものがあつたかを見る可きではないか、道宣以後律宗には宋代の元照律師（一〇四八―一一一六）あつて律宗を中興し、元朝の初に至る迄律宗は頗る盛んであつた、殊に元照の如きは生きて律範を弘め死して安養に飯ることを必生の志願としてをつたのであるから、元照律師に由つて支那の淨土教も亦大に盛んになつたのである、東坡の如きも一方では禪理に心を潛むると同時に一方では淨土教に感化されてをつたのは元照の德化に由るのである。

密教（眞言）は前に既に一言してをいた通り、其教理は全く華嚴宗の事々無礙論の應用に過ぎないので、唯哲學風なる華嚴の術語を變じて、宗教的文字に更へたのみである、然し眞言密教が教相判釋をやつて、嚴然たる一宗として成立したのは、支那で出來たのではなくつて我が日本の空海に至つて初めて成つたのであるから、こゝには唯眞言密教の支那に渡來した由來丈を述べて、支那十三宗發達の概要を終へやうと思ふのである、抑も眞言密教は印度では龍樹（紀元二世紀）龍智（七世紀）に濫觴し、婆羅門教の影響を加へて支那に輸入されたので、善無畏（六三五―七三五）金剛智（六七一―七四一）不空金剛（七〇七―七七四）の三人に由つて支那に傳つたのである、殊に不空の如きは獨り眞言密教を輸入したばかりでなく、經論の飜譯に於ては玄奘と相並んで唐代の二大明星を爲し、玄奘不空の新譯は羅什眞諦の舊譯と相對して永く佛教文藝不朽の寶典となつたのである、そこで唐の代宗の如きは不空に飯依せられたこと最も厚く、不空の病が革つたとき、肅國公に封じ食邑三千戸を賜つたと云ふことである、然し不空は元來出家の沙門であつたから、之れを屑としないで再三再四固辭したけれど、遂に允るされなかつた、そこで不空は喟然として嘆じて云ふには、自分は法を以て世を濟ふと志してをつたのに、豈に料らんや死に臨んで濫に封爵に汚されんとは、と言つて入寂したさうである、代宗皇帝は不空の死を哀惜され、之れが爲め廣朝三日に及んだと云ふ、又以て不空の人となりを知る可きであらう、不空の高弟に惠果（七四六―八〇五）と示ふものがあつて、我國の空海は入唐して惠果から眞言密教を面授して來たのであるが、然し眞言密教は唐末以後は支那に全く衰頽を極めてしまつたのである。

以上論明した所で、東晉の孝武安帝二朝の頃即ち紀元四世紀の終からして、六朝を經て李唐（六一八―九〇七）の中葉に完成した支那佛教十三宗の發達を大躰述べたのであるが、今迄講じた所でも自ら明かである如く、後漢の明帝永平十年即紀元六七年に佛教が支那に這入つてから、五世紀の初め羅什が長安にやつて來る頃迄は（紀元四〇一）まだ宗派の別を見なかつたのである、羅什以後漸く分派の激甚なるものを逢ひ、晉末より六朝李唐の間は、支那佛教の全盛時代とても云ふ可きものであつて、その十三宗の開立は皆なこの時である、して李唐の末葉から宋朝（九六〇―一二七九）の末に至つて、是れ等の宗派は大率衰頽の色を呈し又稱するに足らない樣

になつたのである、然るに獨り此間に處してその勢力を滅滅しなかつたのみならず、宋から元明兩朝に亘つて益々隆盛を極めてをつたのは禪と淨土との二教である、然じこの二教も紀元十七世紀の頃清朝に至つて、大に振はなくなつたので、之の間元朝（一二〇六―一三六七）より西藏の佛教即ち喇嘛教が支那にその頭を擡げ出し、現今の清朝に至つても、獨り尙ほその勢力を有してをるものはこの喇嘛教のみである、然じこの喇嘛教の發達に就いては、後ちに更に辯明するつもりであるから此には之れを說くことを止めて佛教が支那に興隆するに及んでから、その本來支那土著の宗教であつた儒教道教と如何なる關係を以て發達進步して來たかを、左にもう少じ瞥見してみやうと思ふのである、然しこの儒道、佛三教の關係を調ぶる前に、以上支那佛教の十三宗を二つの方面から分類して、さうじて學者の便に供することゝしやう、則ちその一は大小二乘大小二乘の區別は第一我空を說いて法空の理に昧達せぬものを小乘とし、我法二空を立たるものを大乘とす、第二眞如緣起を立するものを大乘とし然らざるものを小乘とす、第三佛の三身說を想定するものを大乘とし生身の佛のみを說くを小乘とす、と云ふ區別からの分類と、その二は單に印度から佛教を輸入じたばかりであつて、特に支那で以て特別の發達をしなかつた佛教と、その原種は印度から來た佛教でも、支那へ來てから非常に發達した佛教との、この二に分別じたものを表示してみやうと思ふ、然じ辭を簡單にする爲め、前者を印度的佛教と名け、後者を支那的佛教と命じ、さうして又全く印度佛教そのまゝの直譯的輸入とも云へず、さりとて又支那に來て全く別に一家を大成したと云ふ迄にも至らない、この兩者の中間に位した半は印度的半は支那的とても云ふ可き佛教があるから、之れは假に便宜の爲め半支那的佛教と名けてをかう。



佛教
- 半支那的
  - 三論
  - 涅槃
  - 攝論
  - 地論
  - 法相
  - 律
  - 淨土
  - 禪
- 支那的
  - 天台
  - 華嚴
- （密教（眞言））

佛教が初て漢代に渡來したときに當つて先づ之れと爭を釀したものは道教である、佛教が渡來してから五年の後、即ち後漢の明帝の永平十五年に道士緒善信、費叔牙に由つて、道佛二教の優劣を白馬寺にて火驗した時、道士全く敗を取つて全然佛教の勝利に歸してしまつたが、之れと同じ樣な爭が北齊文帝の天保年間と周の武帝の建德年間とにあつて、その時は道士陸修靜や張賓士等に由つて企てられたのである、是れ畢竟道教と佛教とは儒教と異つて、共に幽玄の旨趣を敎へ不思議を談ずる所からして、兩雄並び立たずの感の通り、先づこの兩敎間に爭鬪を見るに至つたのである、然るにこは現世敎なる儒敎と一は來世敎なる佛敎とは、その受け持ちの範圍が異る爲めか、その初めは先づ甚しき衝突もなく濟んでいつた樣である、その後漢代の儒士牟子の如きは理惑論を著はして、既に佛敎の侮り難きを公言した位である、三國六朝の交に於ては儒敎が支那思想の正系として重んぜられてをつたのは勿論、道佛の二敎に至つては或は帝王の保護を得、或は君主の迫害に逢ひ、一揚一抑一浮一沈、殆んど定めなき運命を有してをつたのだが、其間放伐篡弑の繁き、五胡入寇の難等、轉た人心をしてその堵に安んぜしめず、世は厭世的悲調に傾きつゝあつた時であるから、時代精神は超自然的出世間的宗敎を要求して、現世以上の樂土に安心の基礎を得たいと思ふのは、自然の要求であつた、そこで佛敎の如きは時に魏の太武帝（四二四―四五二）周の武帝（五六三―五七七）唐の武宗（八四一―八四六）の如き、廢佛毀釋家の迫害を蒙りましたけれども――所謂三武の難――その敎勢駸々として日進月歩の有樣を呈し、之れを先にしては宋の文帝（四二四―四五三）の如き、梁の武帝（五〇二―五四五）の如き、隋の文帝（一五八―六〇四）の如き、之れを後にしては唐の太宗（六二七―六四九）玄宗（七一三―七五五）代宗（七六三―七八〇）の如き、皆な佛敎外護の重任を盡されざるは無つたのである、又之れを先にしては隋の煬帝の八年（六一二）傳奕の上書があるし、之れを後にしては唐代の文豪韓愈斷然奮起儒敎の正系を標示して、佛骨の表を上つて（八一九）獨力以て佛敎（道）を碎粉し去ら

んとしまして、亦手時代思潮を障へんとした、その儒教の爲に睦つて忠實なる熱誠の程は盛ず可きて有りますけれども、淺薄の議論到底佛教哲理の幽玄に抗す可くも見えなかつたのてある。そこて一方ては儒道佛三教の爭鬪排擠あると同時に、他方ては之れ等三者を調停融和せんとする運動も起つてこなければならない、それは丁度彼の基督教が歐羅巴へ這入つた時もさうてあつて、アールヤ思想と猶太の信仰とはその初めの程は互に敵視し異端視してをつたけれども、遂にはプラトーンやアリストテレースの希臘哲學と基督教とは、互に手を取つて攻守同盟を締結する樣になり、そこて中世の神學なる者が出來たのてある、支那に於ける儒道佛の三教も亦この傾向が無いと云ふ筈はないのてある、そこて彼の牟子の理惑論以來既に五世紀の中葉に於て、張融（四四四―四九七）のこの方面に着目するあり、顧歡（南齊の永明の末年に死す）譚峭（六朝後半の人）の徒之れに繼ぎ、李士謙（五八九、隋初の人）文中子王通（五八三―六一七）の如きも、皆な儒道佛三教の調和に着目した人てある、則ち文中子（王通）は佛は西方の聖人なりと斷じ、進んて儒教道教佛教の同一なるを道破し、三教……一矣と喝破した、梁の武帝は窮源無二聖、測善非三英、隨分各受、榮差別豈爲意と云はれて、儒道佛を調和せられんとした。

佛教と道教とは互は敵視してをつた間より、早く既に道教は佛教の傳說を取り入れて、自家藥籠中の物たらしめんと睦つたのてある、則ち老子が生れたときはその母の左腋を割つて出たと云ふが如き、釋迦降誕の傳說を藉り來つて道教の教理を潤飾し、又釋迦が菩提樹下に端坐して正覺を成ぜんとしつゝあつた時、魔王波旬（マーラ・パピヤーン）幾多の誘惑を以て之れを妨げんとして、時に美女を送つて釋迦の心を迷はしめんと試みたと云ふ傳說は、道教の中に轉入し來つて、かう云ふことを云ひ傳へてをる、則ち彼の老子が將に隱れんとして函谷關（或は流沙に通行する玉門關とも云ふ）を過ぎた時、關の今尹喜は老子を止めて我が爲あに書を遺せと迫つたからして、老子は道德經一卷を著はして之れに與へたのてある、それからこの函谷關を出ててから、老子はその終る所を知らないと、歷史には書いてあるのだが、こゝに釋迦の惡魔誘惑てふ傳說が這入つて來て、老子は關外の荒野て、桑樹の下に三晝夜休ふてをつたとき、惡鬼が美人の形をして現れて來て、老子を誘惑しやうとした、しかしこのとき老子は泰然として靜に云ふ樣には、如何なる美人も畢竟血を盛つた肉塊の醜惡に過ぎんから、美人なぞに心を動す可きてないと云ことを喝破して、化生の美人を追退けたと云ふことてある、是れは釋迦の惡魔降伏てふ傳說から假りて來たものに相違ない樣てある。

もう一つ確に佛教思想が道教に影響してをると見えるのは、道教の三位一体を形ち作つてをる三眞の考てある、三清とは玉清元始天尊（即ち盤古混沌氏）と大清宣德天尊（太上老君即ち老子）と上清玉晨靈寶天尊の三神てあるが、道教に於けるこの三

清の像は、支那の道教の寺に安置せられ、一見しては殆んど佛像と區別の附かない位能く類似してをるのである、是れ又明かに佛教が道教に及ぼした影響である、然しアミオーやレミュザーの樣な學者が、老子道德經の第十四章に、視之不見名曰夷、聽之不聞名曰希、搏之不得名曰微と云つた、この夷、希、微の三字は、猶太教の神エホヴの子音ヱ(j)とホ(h)とヴ(v)とを取つて、その音を漢字で寫したものであるので、支那にては耶蘇の出世に先つこと六世紀の昔に於て、唯一眞神エホヴの道を傳へてをると云つて、夷、希、微の三者を道教最古の三位一躰の如く、云つたけれども、この說は一片の空想に過ぎんと云ふことは、東洋の人は勿論、西洋の人でも今日ではさう信じて來た樣であるから、こゝに詳論はしないことゝしやう、然し兎に角道教中に云ふ三眞てふ一種の三位の神は、今日支那の道教寺院に這入つて見ると云ふと、その像は全く一見して佛像に擬ふ樣に出來てをるさうである。

から云ふ工合に道教と佛教儒教と佛教との三教は次第に融和調停の實を擧げて、傅奕、韓愈の如き排佛論は淺薄採るに足らないことが分り、是れと同時に支那佛教の各宗派は、李唐(六一八―九〇七)の中世迄にその發達を完成するやうになつたから、佛教は儒道二教と相駢馳して優にその牛耳を執ることが出來る樣になつた、そこで唐代にその根底を固めた佛教思想は、非常に唐代以後に於ける儒者の頭腦を隱約の間に影響し、その間偶々唐の武宗(八四―八四六)周の世宗(九五四―九五九)の如き排佛家があつたにも關らず、隱仙李長者通玄の華嚴宗に歸せる(紀元七三〇)顏眞卿(七〇九―七八五)白樂天(七七二―八四七)柳子厚(七七三―八一九)杜鴻漸(七六九―殁)裴休(八五七殁)の如き、皆な唐代の名儒にして心を佛教に寄せ大にその影響を蒙つた人々である、僧侶に在つても亦各宗著名の碩德甚だ少くなかつた、然しそは嘗者に各宗の發達を叙する時述べて置いたから、こゝには云はないが、この影響は消々として底止する所を知らず、五代をへ趙宋(九六〇―一二七九)に至つて益熾んとなり、此に宋代哲學の精華を發揮するに至つたのである、實に宋儒性理の說は、儒教中に佛教哲理を吸收し去つて、儒佛の兩思想はこゝに鎔鑄陶冶せられ、以て渾然として玉の如く將た又幽邃高遠なる一大支那哲學を化成して現はれ來つたのである、宋代の碩哲程明道(一〇三一―一〇八五)程伊川(一〇三三―一一〇七)周濂溪(一〇一七―一〇七二)張横渠(一〇二〇―一〇七七)朱晦庵(一一二九―一二〇〇)陸象山(一一三九―一一九二)の如き、その說皆な表面上或佛教と異なるが如く或は之れに反對する如く裝ふてをりますけれども、その實佛教思想に由つて影響されてをるもの決して少くないのである、殊にその佛教思想は禪宗から來てをるのが重である、彼の陸象山の哲理思想を初めとして、それを繼承して支那の唯心論系を大成した明代(一三六八―一六六一)の碩哲餘姚の王陽明(一四七二―一五二八)に至つては、その唯心哲學が禪味を帶びてをることは到底否定す可らざる事實である、宋代に於て

は朱陸二子の外に歐陽修（一〇〇七―一〇七二）司馬溫公（一〇一九―一〇八六）蘇老泉（一〇〇九―一〇六六）その子蘇東坡（一〇三六―一一〇一）の如き皆な一世の名儒であつて、而かも厚く佛教の哲理を咀嚼し、儒佛を調和して一層支那思系の深邃を致したる人である、支那の儒教哲學はこゝに至つて陸離たる光彩燦として人目を眩するものがある、蓋し先秦哲學の外絶えて無き所にして、而かも先秦哲學に一歩を進めたものて、佛教哲理の影響亦實に大と云はんければならん、然し當時の儒教哲學はその表面だけ儒教哲學であつて、何處迄も獨立した思想の如く、儒者は云ひふらしてをるけれども、その內實に至ると儒佛の兩思想を執つて打つて一團とした、儒佛の精粹から出來上つた思想であると云はなければならない、唐代思想は唯儒佛の調和、儒道佛三教の一致を說定するに勞したばかりであつたが、宋代に至つては獨り儒佛の調和三教の一致を謀るのみが目的ではない、寧ろ儒佛の調和し得ること、儒道佛三教の一致す可きことは云ふ迄もなき事實として承認し、偖てかゝる性質の儒佛を渾融相即して、如何に一層深遠なる哲理思想を構成す可きかと云ふ問題に、當時の學者は知らず識らずその心力を傾注してをつたのである、勿論當代の學者は表には確に儒のみを以て一家を標榜してをつたには違ひないが、然し彼れ等の頭腦中に流行しつゝあつた暗潮は、儒佛の精華を採り、二教の眞髓を捉り來つて一大學說を構成しやうと云ふことに向つてをつたのである、それであるから宋代において陳摶（九八九歿）は劈頭第一に儒道佛三教の一致を主張して、孔子教之以正心正意修此身也、老子教之以煉身養氣生此身也、釋氏教之以明心見性悟此身也と道破して三教畢竟一てあると斷じ、眞宗皇帝（九九八―一〇一一）の如き、は釋崇論を著して奉彼十力輔此五常と云はれ、孝宗皇帝（一一六三―一一八九）の如きは、以佛治心、以道治身、以儒治世と說かれ、張商英（一〇四二―一一二二）の如きは儒療皮膚、道療血脈、佛療骨髓と云ひ、商英は維摩經を讀むに及んてからその前に無佛論を著はさんした筆を以て、護法論を草したのである、李泰伯亦僧契嵩（一〇七二歿）と佛教を論じ、喟然として、吾輩議論尙未及一卷般若心經佛教豈易知取と嘆じ、張方平（一〇〇七―一〇九一）曾て王安石（一〇二一―一〇八六）が、儒家は孔孟二子の後ち更らに人物の出しないことを嘆息して、物の語つた時、張方平は卒然聲に應じて、否な人なしとせんや、亦之に過る者がある、則ち馬祖、雲峯、岸頭、雲門、此輩驥騏皆な孔孟の配下に出てたのは事實である、唯彼等は孔孟の敎に滿足しないで、相擧つて等しく佛門に歸してしまつたのであると道破したと云ふに由つて考へて見ても、當時佛教思想が士大夫の思想を影響し、隱然其間に重を爲してをつた有樣が分るのである。唐代に勃興した佛教は五代の戰亂に由つて一時頹敗に傾いたが、宋代に至つて大にその形勢を挽回し、高麗の沙門諦觀を支那に徵して當時支那に散逸して獨り高麗にのみ有つた佛書を求め、禪、淨土、天台、華嚴、律の諸宗はその間幾多の高僧碩德を

輩出し、天台の知禮、遵式、華嚴の子璡、淨源、律の允懐、元照の如き、淨土に在つては省常の白蓮社の如き、元照の律以外に西方往生を勸めたるが如き、有嚴の淨行を重んぜしが如き、禪に在つては祖印、佛印等の禪師が老泉、東坡、歐陽修の如き儒士を感化しつゝあつた如き、その著名なるものであつて、殊に淨土と禪の二宗の如きはその勢力宋朝に至つて非常に隆盛を極はめ、その爲め禪にはその臨濟の下に更に楊岐と黄龍の二流を分つ樣になり、彼の司馬溫公、蘇東坡の如き禪の感化あると同時に淨土敎の影響は頗る大なるのである、元に至つて耶律楚材（一一九〇―一二四三）の如き、厚き禪宗の信者であつた、然し元代に於ては西藏の喇嘛敎が既に帝王の尊信と歸依とを蒙り、漸く從來の佛敎を取つて代はらんとする有樣になつて來たが、元を經て明代に至つても尙從來の佛敎中禪と淨土の二宗は全く舊觀を改めたと云ふ譯けて無かつた、殊に藕益大師智旭（一五九九―一六五五）の如きは或は閑藏知律を著はして讀經の者を便し、或は佛を以て儒を解して儒佛の合同を計り、普く佛敎諸宗を睥睨して卓然一家の主義を持し、さうして儒家の陽明と相對峙立して明代佛門の重鎭を爲したのである、然るに支那佛敎全般の形勢は最早六朝唐宋の盛時に比す可くもなかつた、明滅び淸起るに至つては、形勢日に非に新來の喇嘛敎獨り勢力を得て、從來の佛敎は痛く衰滅の悲運に逢つたのである、それであるから自分はこゝに支那佛敎の發達を叙することを止め、さうして之れと共に彼の西藏に發達して元に入り込んで來た喇嘛佛敎の何にものなるかを一瞥しなければならんのである。

## 第十七章　西藏佛敎の特色

西藏の喇嘛敎は印度から這入つた龍樹、無着等の神秘的大乘佛敎が一層この方面に發達したものであつて、遂に我國の眞言秘密敎の樣に剃髮した僧侶が大なる念珠を爪ぐり、美事なる僧冠を戴き、嚴かなる法衣を裳り、加持祈禱禁厭呪符に惟れ日も暇ちない有樣である、それは原始佛敎の平民的僧團組織を變じて羅馬舊敎の樣な僧官制度を採用し、所謂喇嘛法王の如きものを生ずるに至つたので、元來無神論であつた原始佛敎は、喇嘛敎に至つてその敎理の淵源を神秘に附せんが爲め、之れを久遠佛（アーディブッダ）ヴジュラドハラ（ヴジュラドハラ）の天啓に歸するとは恰も日本の眞言宗が大日如來を以てその宗の本尊と仰ぐと同じなのである、然し尙ほ是れ丈けでは足らないで、喇嘛敎の組織中には空海の眞言密敎と同く化身權化を想像し來り、幾多崇拜の對象たる佛菩薩を造り出す樣になつたのである、彼の觀音（アヴロキテシュヴァラ）の如き文殊師利（マンジュシリー）の如き阿彌陀（アミタ）佛の如き又その極樂淨土の如き、彌勒（マイトレーヤ）の如き、皆な西藏佛敎の好んで崇拜する所の諸神である、要するに喇嘛敎は日本の眞言宗と眞宗とを一に混合した樣なものである、その秘密なる呪文六字名號オム、マニ、パドメ、フム、を稱へ、香を燒

いて諸佛菩薩に祈禱を捧げ、不思議の靈驗を說く所は宛然日本の眞言宗そつくりである、又そが法主制度を採用して、初めの程は血統相承であつたが（紅教即ち喇嘛の舊教）後ち法脉相承に變へた（黃教即ち喇嘛の新教）何れにしても宛然眞宗大谷派や高田派の宗制を眼の前に見る樣な心持がするのである、その僧位僧官の次第順序の整然としてをる、又その啖肉の風あることは、今日でも喇嘛教は少しも眞宗に異らんのである、明治三四年の夏に日本に來た支那北京滯在の雍和宮の喇嘛僧阿嘉呼圖克圖の如きは、黃教僧であるから妻帶はしないが、肉は平氣で食ふのである、要するに佛教が西藏に這入る頃には、原始佛教の純朴簡古の風はいつしか消え失せてしまつて、婆羅門教の湼槃崇拜の影響を著るしく蒙つた龍樹、無着等の大乘秘密佛教となつてをつたので、それが又西藏人の意向に投じ西藏在來の宗教と手を携へて著しくこの方面を發達させ、遂に佛教が日本を措て、他國に見るとの出來ぬ法王制度を釀出して來たのであるから、今日西洋人の眼には一見して羅馬舊教にもまがふ樣なものと化成したのである、然しこの喇嘛教の法王制度は明代喇嘛教の改革者宗喀巴（一四一七―一四七九）が羅馬舊教の宣教師の支那に滯留してをつた者から、基督教の影響を蒙つて考へ出したのであると、ユック氏の如きは云つてをるのであるが、喇嘛法王の制度は必しも宗喀巴が羅馬舊教の法王制度を學んで而て後ち知つたのではなくつて、元主忽必烈が喇嘛僧拔合思巴――略して發思八―を以て尊んで帝師と爲し、西藏の政教を主掌する權力を附與した時に淵源してをるのであると云つてよい、唯その後宗喀巴がその事業を紹述し大成して今日の喇嘛教を化成するに至つた由來を述べてみやうと思ふ。

紀元七世紀の半頃迄（六四〇年頃）は西藏は世界の一大閉鎖國であつて、支那人にすらも能く知られなかつたのであるから、西藏佛教の詳しいことは分らないが、佛教は阿育王以後にはぼつ〳〵西藏邊に這入り印度あたりの僧侶も時々入藏してをつた樣であるが、まだ公に西藏へ這入つた譯でない、そこで紀元七世紀即ち唐代迄は畢竟能く西藏佛教の消息は分らないのである、それで先づ佛教輸入以前に於ける西藏古來の宗教と云つたら、何んであるかと云ふに、所謂精靈崇拜の一種でそはシアマニズムであつて、魔法妖術禁厭祈禱などの澤山その中に混入してをつた有樣は、宛然秦漢以來の道教を見る樣なものであつた、今日西藏人はこの西藏古來の宗教をボンと云つてをつて、喇嘛の紅黃二宗派に對して黑教と云つてをる、思ふにその教徒が黑帽を戴くからであらう、然るに紀元六四一年に唐の太宗文成主公を吐蕃王即ち今日の西藏の王雙贊思甘普に嫁したが、文成公主は雙贊思甘普の先后寧波羅王の女ブリクチと共に大の信佛家であつたから、忽ち雙贊思甘普を化して佛教徒としてしまつた、そこで雙贊思甘普は印度、寧波羅、迦濕彌羅、支那の四國から

著名なる佛教僧侶を招聘し大に佛種を西藏に播くことに盡力したのである、であるから雙贊思甘普王及びその二后は、その死後は共に觀音の化身であると考へられる樣になつた、特に又その大臣端美三菩提の如きは、佛典を印度から取り寄せて西藏語に翻譯することに努めた、雙贊思甘普の子孫に吃嘛雙提贊と云ふ王があつたが、この王は英主であつて四方を征服し、銳意佛教の弘通に盡力して、紀元七四四年に北印度烏萇の大德巴特瑪撒巴巴即ち西藏の通稱ローポンなる者を迎へて、秘密佛教を輸入し、ローポンはこの秘密佛教とその國從來のボン教とを合同して、一種の西藏佛教を化成したのは、恰も空海が密教を神道に習合して日本佛教の新組織を立てたのと同一轍である、そこでこれから西藏佛教は益々盛んになつて、紀元七四九年には佛教寺院を建立し、巴特瑪撒巴巴第三の法弟バルバンスは、最初の喇嘛となつた、抑々喇嘛と云ふ語は西藏の語で僧侶の尊稱である、そは無上士の義である、然るにその後郎達爾瑪王に至つて大に佛教を迫害したが、紀元八九九年に王はバルドルジェと云ふ喇嘛が弘法の熱心よりその手にかけられて弑されてしまつた、そこで佛教は再び西藏に興り、十一世紀の頃印度の僧アチーシア及びその弟子西藏僧ドムトンの力に由つて、西藏の佛教は大に革新され一生面を開いたのである、然るに紀元一二〇六年頃から元の成吉思汗の爲めに西藏は征服せられ、十三世紀の後半に至つて喇嘛教中絶世の偉人が現はれて來て、元の世祖忽必烈の知遇を蒙り喇嘛教中に西藏政教の兩權を吸收し去り、現今の法王制度を生成す可き基礎を形ち造つて、支那に迄手を伸ばし、支那古來の佛教に代つて喇嘛教獨りその全勝を稱へ、生きては帝師となり死しては大寶法王の諡を得たものが是れ則ち有名なる拔合思巴即ち發思八その人である、帝王の歸依を蒙ることの厚き蓋し唐朝の不空以來一人であらふ、これより喇嘛教は一方では宗教上にその勢力を張ると同時に、元朝の外護を得て喇嘛法王は西藏國政治上の元首たるの觀があつた、忽必烈が發思八に對するの關係は、恰もコンスタンチヌス大帝が基督教に對し、カール大帝が羅馬法王に對すると同樣の關係である、かう云ふ風に喇嘛教は一時旭日瞳々の勢を以て、元朝に瀰漫したが、發思八の歸依したのは喇嘛の舊教たる紅教であつて、この紅教も其後年を經るに從つて腐敗し幾多の弊害を生じて來たから、紀元十五世紀の初め、即ち明代に至つて宗喀巴なる名師出でゝ、遙に端美三菩提又は高僧アチーシアの昔に復へり、紅教の宿弊を一洗し血脈相承を廢して法脈相承となし、此に一大革新を喇嘛教中に實施したのである、宗喀巴の改革した喇嘛教は喇嘛の舊教即ち紅教に對しては喇嘛の新教とでも云ふ可きものであつた、そは黃衣黃帽を着するを以て黃教と云ふのである、西藏ではその實名之れを額爾德巴派と云ふてゐる、今日西藏の佛教として喇嘛教の牛耳を執つてゐるのは則ちこの黃教である、宗喀巴は阿彌陀佛又は文殊若く金剛手の化身と云はれ、達賴班禪二喇嘛の像と共

にその死後痛く崇拜されてをる、紀元一四一九年宗喀巴の死んだ後はその遺命に由つてその最高弟は達賴喇嘛と稱して西藏の首府拉薩に居ることゝなり、觀音の化身として尊崇されてをるし、その第二の高弟は班禪喇嘛と稱して英領印度の隣境札什倫布に居り阿彌陀の化身として崇拜されてをる、額爾德巴派は紀元一六四〇年即ち清朝になつてから、政教の兩權を全く自己の掌中に握つて、嚴然として西藏の僧侶政府を形ち作り、清朝からも駐劄西藏公使を派遣して喇嘛教を監督してをるし、喇嘛の方でも清國北京に阿嘉圖克圖の樣な有名な僧侶を常によこしてをいて、布教に盡力してをるので、現今清國の宗教は儒道二教は勿論基督教回々教の外、禪と淨土とを混合した樣な從來の佛教と、この喇嘛教が行はれてをるので、佛教中では喇嘛教獨り政府の優遇を蒙つてをるのである、然し喇嘛教は獨り西藏支那ばかりでなく、西藏を中心として滿州、蒙古、土耳古、シベリア、寧波羅、シキム、ボータンの地にも流布してをるのである。

喇嘛教はその昔し西藏から支那に這入り今日では恰も支那佛教の唯一の勢力であることは以上述べた通りであるが、佛教が支那から三韓日本に渡つて來た有樣は如何とは、是れ今や將に吾人が知らんと欲する所の題目になつて來ました、それですから是れからはこの方面の發達を述べてみ樣と思ふのです、然し以上段々と述べて來ました通り、佛教は西藏に這入つては多神的秘密佛教となつて、其教主釋迦の當時に於る活潑の生氣を鎖亡し、支那に這入つては六朝隋唐の間に一時その法運の隆盛を致しました佛教も、今や殆んど老朽事に堪へないと云ふ樣な有樣になつてをるのであります、然しその佛教は益々東漸して遂に我が日本にやつて參りましてからと云ふものは、又た一種の特色を持つた日本佛教を造り出したので、是は明に歷史上一大偉觀であると云はなければならないのであります、然かのみならず一切藏經が我國に完備して殘つてゐると云ふことは眞個に聖世の餘澤であつて、吾人宗教學者に取つては、我國は實に宗教の一大寶庫と云つて善いのです、殊にその佛教は今や我日本から更らに東漸して亞米利加に渡り歐洲に廣がらんとしてをりますし、又我が帝國内におきましても從來發達して來ました佛教と維新以來信教の自由に由つて一時に輸入されて來た所の基督教とは、互に相撃ち相磨して更らに一層の彫琢を得、さうして遂に又層一層發達した一大新宗教となり、眞の世界的宗教となつて全世界の舞台に打つて出でんとしてをるので、其機會は今や將に圓熟しつゝあると云はなければならないのであるそれであるから自分は今世界宗教の比較研究上當然の道行として、日本佛教過去の發達を一瞥してみやうと思ふのであります、然し日本佛教の發達は比較的世人も知つてをるとてあり、且つ多少其向きの書物もありますとですから、詳細はそれ等に讓り、叙述の順序上次章から極簡單に日本佛教の發達に就て一言を費すこととしやうと思ひます。

# 第十八章　日本の古代宗教概觀

日本に佛教が公然渡來したのは欽明天皇の十三年紀元五五二年であるが、然し欽明天皇の御宇以前繼體天皇の一六年即ち紀元五二二年に梁の人司馬達等が私に我國へ佛體を移植してをつたらしいのであると、さうすると云ふと繼體天皇若くは欽明天皇の御宇に至る迄は我が國には何等の宗教も無かつたかと申しますに決してさうではないので、我が國は神の國と云はれてをります位で、佛教の渡來以前にも既に宗教はあつたのであります、則ちその宗教は太古の神道であつて天然崇拜と祖靈崇拜とから成り立つてをつたのであります、例之ば天照皇大神は日の神即ち太陽の神に在して、而かも我れ〳〵大和民族の太祖に當らせられると云ふ考は、則ちこの天然崇拜と祖靈崇拜との合同から出來てをる宗教であると云はなければなりません、尙ほ是れ等の實例は古事記日本紀祝詞などの中に澤山に見えてをりますからして、今事々しくこゝにそれを羅列することは止めますが、要するにそれ等の天然崇拜と祖靈崇拜とが結び附いて成つてをる我國古代の神道なるものゝ特色を擧げてみますれば則ちかうである、先づ神道は樂天主義の上に立つてをる宗教であつて厭世主義の上に成り立つた宗教ではないと云ふことである、則この點はホメーロスやヘーシオドスの神話に見えてをる希臘の宗教に能く似てをるのである、次に神道は羅馬の宗教や支那古代の宗教に見た樣な儀式主義形式主義の宗教でなくつて、寧ろ赤裸々を尊び天眞爛熳を愛する宗教である、人性の自然其まゝを寫し出したと云ふ宗教である、そこは矢張り希臘の古代宗教によく似てをるのである、日本の宗教が多神教である點が希臘の宗教に似てをるばかりでなく、殊に日本人の想像に豐富なる、その詩的風趣の洩發する所は全くホメーロスやヘーシオドスの希臘の古代宗教に髣髴たるので、彼の神のことを諷詠した日本古代の歌集などを一讀してもすぐこの趣が分かる、そこは彼の乾燥無味なる支那人や羅馬人の宗教とは餘程異る所である、從つて希臘の神々に見る樣な男女愛情の關係なども矢張日本の神話にも度々現はれてをる、是れはどうしても日本の樣な風光明媚の山河を以て襟帶してをる綵花島と、山紫水明の希臘半島との氣候風色が雍和なるのは、共に自ら相似たるものがあるから起つて來た現象であらふ、希臘の古代宗教や日本の神道が現世的樂天的であつて、來世など云ふ考が餘り明瞭に現はれて居らないと云ふことも全くこの點から起るのである、殊に日本の古代宗教に至つては未來死後の世などと云ふ考へは殆んど發達してをらない、荒魂和魂、黃泉國など云ふ語はあるけれども、靈魂の不滅とか未來世の應報とか天堂地獄など云ふ思想は少しも發達してをらない、最もこれは獨り日本人ばかりではない、猶太教でもその昔アブラハムやモーゼの太古は云ふ迄もなく、猶太教の頗る發達

をした預言者の時代になつてからもまだ明瞭になつてをらない、それ等の思想が明瞭になつて來たのは猶太人が猶太の首府エルサレムを追はれてバビロン府に捕虜となつて行つてから後のことである、この點に於ては日本の古代宗教と猶太教とは能く似てをるのである、日本人は元來山水秀靈極清い空氣に養生されさう云ふ土地に棲住してをる爲めか、非常に清潔を好む人民であつて潔癖家と云つてもよい位なのであるが、その思想は神道にも表はれて清潔清淨と云ふことは大層重くなつてをる、この點は丁度波斯教そつくりである、然し日本の古代神道は希臘や波斯や支那の古代宗教と同じ樣に、自然的宗教であつてまだ道德的宗教になつて居ないのである、その神々の如きも希臘の神々と同じ樣に今日の道德上忍び難い行爲も多く見えてをる、その所謂清淨と云ふ觀念も單に肉躰の清淨と云ふことであつて、精神の清淨と云ふことを意味するのではない、然るに一たび猶太教の昔に沂つて之れを考へてみるに、この點は猶太教の方が餘程發達をしてをるのである、所謂モーゼの十戒なるものはモーゼ自らの手に成つたものでないとしても、その十戒中に盜を禁じ姦婬を誡め妄語の慎む可きことを說いてをる、さうしてこの思想は遲くも豫言者の當時には十分存してをつたことは明瞭であるから、この點は各國の宗教に比べて猶太教は非常に進步してをると云はなければならないのである、別の語で云はゞ日本や希臘などの諸國の宗教がまだ自然的宗教であつた時から早く既に猶太教は倫理的宗教になつてをつたことが分る、若し又日本の神道が八百万（ヤホヨロズ）の神々を併せ祭つてをる間に、自ら天照皇大神を是等群立多神の上位に置き至上神として考へてをる點は、丁度希臘の神話が幾多の群神を立てゝをる間に、いつかゾオイスの一神を以て諸神の上位にあるものとする樣になつたのと、思想發達の上に自ら軌を一にしてをるものがあるのである、日本は元來祭政一致の國柄であつて、政治と宗教とが全く同一視されてをり、政治上の元首は又宗教上の首長であると云ふことになつてをつた所は、丁度モーゼの猶太教と同じと云つてもよいのであるから、若し古代の日本人にして一朝彼の八百万の群立諸神を排却し去つて、獨天照皇大神の一神を唯一至上の眞神と爲し、之を全く倫理化して靈の神であると解釋すること、彼の猶太の豫言者の宗教に見るが如くしたならば、日本の神道は猶太教を凌駕するに足る一大宗教として發達することが出來たかも知れなかつたのである、然るに惜い哉日本の神道は這種の發達をし初める前に、之れを先にしては韓土より儒教が渡來して參つたし、之れを後にしては佛教が這入つて來まして、一は現世的倫理の方面に立つて我國古代思想の不足を補ひ、他は來世的宗教心の需要を滿足せしめて遂に永く心靈界の支配をその一手に掌握するに至つたのである。

# 第十九章　日本佛教の發達と神道儒教

日本の古代宗教が以上述べた樣な有樣であつた時に當つて俄然佛教は日本に傳つて來たのである、抑々正式に佛教を日本に傳へたのは百濟の聖明王であつて、我欽明天皇の朝のことである、然るにその初め佛教は紀元四〇〇年代蘇主符堅の時順道なる僧佛教を高麗に傳へ、後ち一世紀半の年所を閲し百濟の聖明王の時佛教は王者の保護を得て大にその教陣を韓土に張り、殊に三論の教義は嘉祥として彼の地に勃興し、其緣故に由つて我國の如きも三論の空宗が先づ傳つたのである、然るにその後支那に於ては彼の唐末五胡の兵亂佛教の命脈殆んど彼の地に絶えんとしたときには、高麗國より經論を支那に贈り、高麗にては所謂高麗本の如き一切藏經の刊行も出來たのである、是れ實に彼の崇佛家王氏の朝のことであるが、現代の朝鮮王李氏に至つては儒教を揚げて佛教を抑へた結果、現今の朝鮮佛教は實に見る影もなく、日本の諸宗派より布教してをるものを除いては、朝鮮僧侶は皆な不識無學採るに足らないので、或は持戒是れこと〻する漸派（教宗）或は唯一心に念佛是れ勤むる頓派（心宗）の二派あるのみであるが、日進文明の今日には殆んど無用の長物と云ふ外はないのである、若し之れを千有餘年の昔我國に迄佛種を播かうとした熱誠なる聖明王の當時に比べてみたら、朝鮮佛教の現狀も誠に慨す可きの極みではないか。

偖てこの有名なる韓土の崇佛家聖明王が、日本へ端嚴なる佛像、經卷の新奇なるものを貢献して來て、尙ほその上上表して、是法於諸法中最爲殊勝、周公孔子尙不能知、能生無量福德、成辨無上菩提、云云遠自天竺爰泊三韓、云云無不尊敬、由是百濟王臣明、云云奉傳帝國、云云果佛所說我法東流、と云ふに至つては、邦人豈にその言辭に一驚を喫し、神馳せ魂飛び、先づ佛とは果して如何なる神であらふか、兎に角に先づ見たい者であると云ふ樣な好奇心に驅られざらんやである、前に邦人は應神の朝紀元二八五年儒教の渡來した當時に於て、既に彼の土の文物に眩惑してをつたのに、今やその儒教の本家本元の韓國から、儒教の主人公たる周公孔子も及ばない甚深微妙の法門と云ふ觸れ出して持つて來た佛教であるから、佛とは果してどんなものであるだらふと、人々その德を先づ想望して壓氣に取られてをつたに違ひ無からふと思ふ、然るに朝廷では嚮者に何等の神をも立てず、倫理道德の教に過ぎなかつた儒教の來た時とは餘程違つて、今回は一種異樣の審神を祭る佛教のことであるから、果して受けて之れを祭つても善いものであるかどうか、又さうしても我國神の怒には觸れはせまいかどうかと云ふ疑が起つて來た、そこで朝廷では之れに就いて大議論が有つたが、その問題は獨り宗教上の問題とのみ見ることの出來ない複雜な政治上爭權の問題が加つてをるので、この時崇佛家の蘇我氏と排佛家の物

部氏とは非常な苦戦を試みたのである、然るにその結果は美事崇佛家の蘇我氏の勝利に歸したから、佛教は是れが爲め非常に弘教の好方便を得たのである、加之聰明叡智なる厩戸皇子即ち聖德太子（五七三―六二一）も亦佛教の篤信家であつて、自ら諸經の疏註さへ筆錄され、特にその憲法十七條の如き、佛教思想の根底に立つて神道儒教等しくその中に網羅した道德上政治上に渡つた教令訓戒を制定せられ、篤く三寶を敬ふ者佛法僧也、則四生之終歸、萬國之極宗、何世何人非貴是法と迄佛教を讃稱されたことである、から、佛教は旭日の昇る勢で以つて我が國の上流社會を風靡したのである、然し太子の當時は尚ほまだ宗派の分裂と云ふものを見るに至らなかつたのであるが、推古天皇の三三年紀元六二五年に、印度の龍樹、提婆を承けて支那の吉藏之れを大成した三論宗が、高麗僧慧觀に由つて我國の傳へられ、小乘の空宗成實宗は權大乘の空宗三論の附屬宗として這入つて來た、是れは實に我國に宗派の別を見る濫觴であつて、欽明天皇の朝初めて佛教が我國に渡來してから實に七四年の後であつた、之れに繼いで齊明帝（六五五―六六一）の朝道昭入唐して（六五三）玄奘から無著世親の教系である法相宗を面授して來て初めて之れを我が國に傳へ、この權大乘の有宗と共に又小乘の有宗俱舍宗をも併せ傳へたものらしいのである、然るに亦新羅の審祥（第一祖）及び良辨（第二祖）の兩師があつて、我が天武帝の天平一二年紀元七〇四年に初めて華嚴宗を弘布し、之れに繼いで孝謙帝の天平勝寶五年紀元七五三年唐土の高僧鑒眞和尚前後六回海上風波の難に阻められ勿ら、百折不撓千挫不屈の大精神を以て不惜身命の勇猛心に九死の中に一生を得て我土に來著せられてから、こゝに道宣以來の律宗が我國に開かるゝに至りまして彼の有名なる日本の三戒壇も出來る樣になつたのである、此に至つて三論成實法相俱舍華嚴律の六宗は我が國に輸入せられ、奈良の古宗は蔚然として互にその門戸を張るに至つたのである。

斯くの如く厩戸皇子以來主として學解的佛教は次第に興隆し、有空二門の妙理大小二乘の哲理、華嚴の事々無礙の深旨は漸く社會上層の人に由つて味はれる樣になつて來ましたが、偖てその厩戸皇子以來上流社會に侵染した朝廷佛教をして、一般社會に行き渡り平民佛教たらしむるの實を擧げます爲めには、是より以來、代々の高僧大に盡力せられ、彼の三論華嚴の嶺高く律法相の雲深く、到底一般の人民には解し難く行ひ難き者に向つては、日々平易簡單なる念佛を稱へ合掌禮拜を敎へて通俗の布敎を試み、尚その足らざる所は濟世利民、佛敎の大慈悲主義を事實の上は現さんとして、或は深山幽谷を開拓し或は道路を修め或は坡陁を築き或は橋梁を架し、或は藥草を植ゑ、或は病院を興し或は孤獨を憐み、殖產興業を奬め、民情を參酌して佛種を播き、國利民福を增殖することに熱衷しましたから、その成績は頗る見る可きものがあつて、佛敎の博愛主義佛陀大悲の福音は之れが爲め餘程山村僻

邑に迄も及んだのである、當時道昭（六二七―六八九）の如き行基（六七〇―七四九）の如きその最たるものであつて、その他は實に枚擧に遑ないのである、してこの風は永く平安朝の傳敎、弘法に及び、尙ほ降つては鎌倉時代の高僧連にも傳はつてをるのである、そこで朝廷でも又成る可く佛敎の民間弘通に努められ、天武帝の朝天下に令して每戸に佛像を安置せしめ（六八四）、聖武帝の朝諸國に國分寺及び國分尼寺を建て（七三七及び七三九）以て佛種を京師以外の僻陬に迄移植せられんと力められたのである。

以上述べ來つた樣な有樣であるから、佛敎が朝廷の眷顧を得て政治上に非常な勢力を得、玄昉道鏡の如きは僧形にして大臣の實權を掌握し、時に或は淫に忍びざる不倫の行なきに非ずでありましたが、朝廷を初め時の貴族は相率ゐて寺院の建立佛僧の供養に遑なく、聖武天皇の如きは万乘の尊を以て躬親ら三寶奴と稱せられた有樣であつた、それでかう云ふ風に俗權と相提携し來つた奈良朝佛敎が、漸くその內部に腐敗を生じ形式佛敎と化し去るに至つたのは蓋し必然の趨勢であらふ、そこで桓武帝（七八二―八〇五）が一たび都を平安に遷じて政治上の一大刷新を興さるゝと同時に、佛敎界も今や一大改革を要するの時期となつた、政治上の中心の移動と共に宗敎上の中心も自然變動してこなければならないわけである、時なる哉俄然として平安朝に於ける佛敎界の二大明星は天の一方に現はれて來たのである、則ち傳敎大師最澄（七六七―八二一）と弘法大師空海（七七四―八三五）との二高僧の出世である、最澄空海の兩人は延曆二二年即紀元八〇四年に入唐し、最澄は唐の道邃、行滿より天台宗を學び、順曉阿闍梨から眞言密敎を承け、脩然、行表の二禪師から禪宗を傳へ、且つ道邃から網梵戒を授つて皈り、皈朝の後は王城の鎭護として比叡山に一乘止觀院を創建して神佛を習合し、支那天台に加ふるに密、禪の二者を以てし、以て支那天台に比して一種の異色ある日本天台を創始したのである、特にその奈良古宗の小乘戒に對向して大乘戒を興し、顯戒論を著はしてその旨趣を發揮し、奈良古宗の法將をして之れを駁擊するの辭なからしめたるが如き、平安朝新佛敎の翹將としてその手腕の有る所、吾人をして千歲の下覺えずその壯絕を連呼せしめ、その氣宇の軒昂にして膽斗の如きものあるを嘆稱せしむるのである、それであるから我國の天台は最澄獨特の頭腦に由つて支那の天台と密、禪、戒の四者を合同して一宗を開いたものであつて、決して單純なる支那天台そのまゝではないのである、換言すれば單に支那天台の輸入ではなく、支那天台の直譯ではないのである、此點が平安朝の新佛敎は、彼奈良の古宗が皆な支那佛敎の直譯的若くは輸入的なるに過ぎなかつたものに對して、一段の光彩を發ち進步を致せるものと云はなければならない理由である、かやうに日本天台が支那天台の外に禪、密、戒の三者を加味して成り立つてをる旭然たる一大宗派であるからして、後來日本に發達

した淨土、日蓮の如き諸宗派が、皆な比叡の山麓より滾々として流れ出てたのは又決して偶然でないのである。

然るに更に進んで空海の眞言宗に至つては、日本に渡つてから天台宗より尙完全なる發達進歩を大成した所のものであつて、唐土の眞言密教は單に龍樹龍智の教系を支那に輸入したと云ふ丈けで、何等特別なる發達をもその上に爲すに至らなかつたのであるが、眞言密教は我國の空海に至つて初めてその發達を完成し、既に印度支那に無く又我が最澄の俊才も曾て企てなかつた密教の教相判釋を初て完成し、さうして此に眞言と云ふ一大宗派の組織を完備したのである、是れ明に空海不世出の天才之れをしてこゝに至らしめたるものと云はなければならない、抑々華嚴は天台の理事無礙に一歩を進めて事々無礙の妙理を談ずるものであるが、その旨趣や餘り幽玄奥妙單に哲理思辨に走つて俗耳に入り難き所があるからして、遂に南都の華嚴宗は佛教哲學としては姑く措き、宗教としては殆んど實用なきの奇觀を呈してをるに反して、眞言宗は華嚴の事々無礙觀を哲學上より宗教上の解に引き直し、殊に秘密佛教の言句を以てその神秘なるに愚俗を導かんとし、六大、四曼、三密の三者に由て事々無礙觀の宗教的應用の方面を開達し來つたのである、既に眞言密教の旨趣が事々無礙の極意に在るからして、佛と衆生との間にも或る秘密なる方法に由れば感應道交の行はるゝことを說き、こゝに加持祈禱を談じ、阿字觀に入つて秘密なる印を結び、法の如くに修行すれば直に本尊大日如來（毘盧遮那佛）の光明界裏に同化することが出來ると教ふるのである、既に事々無礙であるからして彼のまだるつこしい是心是佛などと云つてをることを用ゐないので、吾人內界の心まで行かんでもよい、その外形の身躰そのまゝが取りも直ほさず佛である、衆生の肉身は直ちに大日如來の妙躰であると云ふことになる、そこで空海は現象その儘が本躰であつて則ち即事而眞であると說き、尙ほ之れを和げて即身成佛と云ひ、父母所生身、即證大覺位とも稱へ、眞如非外捨身何求の語を提供する樣になつたのである、於此元來出家して山に入り獨善修行を事としてをつた原始佛教は今や大に變化し去つて、非常に現世的となり、眞如菩提も畢竟この身を捨て世を離れてしまつては何等の求むる所もなく益もないことになると云ふ風になつて來て、身を棄てゝ又身を救ふ貝勺子、世を捨てゝ又世を救ふ善智識と言つた樣な調子に變じて來た、それであるから苟も佛道に躰達悟入したものは世を捨てゝは何にもならん、寧ろ自ら進んで世間に入り佛の博愛慈悲の大精神を躰し、一切の群生を化益すると云ふことを勵まなければならぬ、是れが眞の常行大悲の行爲で、誠の菩薩行であると云ふことになつて來たのである、してこの理論上の根本主義は空海が一生の事業に於て實地に證明され實現されてをるので、彼れがいろは歌を製して通俗に佛教主義を弘布し、山野の開拓井地の整掘、道路橋梁の修理等、彼れが殖產

興業國利民福に意を用ゐ、文學に工藝に技術に貢献する所頗る多く、その足跡日本國中に遍く、山村水廊至る所彼れが遺跡を留めざる所なしと云ふ有樣に立ち至つたのは、空海新佛敎の眞精神が彼の事業に由つて實地に證明されたものと謂はなければならないのである、殊に又彼れが佛敎を日本化した偉勳は、行基以來漸く我國に盛んになつて來た神道と佛敎の調和である本地垂跡說の大成である、思ふに即事而眞てふ事々無礙の立脚地からして、我が國の神々は皆な佛菩薩の應現權化であると說明することは、實に一擧手一投足の業で、眞に容易の事と謂はなければならないのである、それであるから空海に至つて行基以來の本地垂跡說が確乎たる理論上の基礎を得て大成さるゝに至つたのは決して偶然の事でない、空海は最澄の比叡山に對して紀州の高野山を開き、延曆寺と相并んで金剛峯寺を創建したのである。[illegible]

最澄空海の二俊才に由つて一時奈良の古宗を睥睨して勃興し來つた平安の平民的新佛敎も、その後物換り星移り次第に年所を閱るに至つては、その間自ら腐敗の分子を醸釀するに至るも又自然の數にして勢の免るる可らざる所であるから、天台眞言の二宗も亦復南都の宮佛敎と同く追々不潔の分子を發生し來り、僧侶中上菩提を求むる者なく下衆生を化するの慈悲心を飲き、その上なる者は朝廷の僧位僧官を釣るを以て唯一の理想となし、牛車以て宮廷縉紳の第に出入して、病氣平癒安產長生の加持祈禱に惟れ日も暇らずと云ふ有樣で、一般道俗の敎化を以て自己の責任とする者は實に寥々晨星の如しと云ふ有樣である、又下なるものは無賴の敎徒を嘯集し忍辱の衣の下には甲兵を攜して動もすれば武力朝廷に抗し、衆を賴みて名門を脅迫すると云ふ如き、所謂僧兵の跋扈を生ずるに至り、遂に一天萬乘の君白河法皇も、僧侶の手に負へざるを嘆じ、三不如意の一に數へられたるに至つたと云ふ風である、それであるから平安朝の新佛敎もこゝに至つて全然墮落し去つた南都古宗の宮佛敎の覆轍に陷つたものと云はなければならないのである、この危期に際し上下一般に此くの如く墮落した僧風を挽回し、清新なる佛陀の福音を弘通し、以て一般道俗を敎化し衆生濟度の重任を全うせんとして奮然蹶起して來た所のものは、淨土諸宗を初めとし禪、日蓮等の諸宗派である、則ち所謂鎌倉武家時代の新佛敎である、今やこの新佛敎諸派は源頼朝が覇を鎌倉に稱して（一一九三）政治の中心平安より鎌倉に遷ると共に、自らも又その本陣を京師以東に遷し布敎の中心を關東に据へたのである、この間に於て淨土敎は先づ次第に漸興して來たので、その敎化は平易簡單なる彌陀の名號を稱ふるに在るのであるから、兵馬倥偬の世、忙がしい人間に向つても、能くたやすく實修することを得る易行の法門である、殊に當時天下の名門たる藤原氏榮華の夢、一たび破れてより、平氏是れに代り、又幾何もなくして一家西海の波に漂ふと云ふ哀はれ墓ない有樣を人々眼前に視もし

聽きもしいてをるのであるから、人々世の中の無常を感ずること殊に深く、欽明の昔より發生し來つた佛教の厭世觀は此に一時に堤を決して氾濫し來つたと云ふ樣になつて、未來死後の樂土を求め現在を假世と觀ずる厭離穢土欣求淨土の思想は頗るその高調を呈して來たのである、今此危機に際して鎌倉時代新佛教の前驅として現はれ來つたものは淨土教である、則ち彼の遠祖は厩戸皇子僧行基等に濫觴し近くは最澄の常行三昧に原因してをる所の淨土教は、既に空也（九〇三―九七二）源信（九四二―一〇一七）等に因つて漸次その頭を擡げ出して來てをつたのであるが、良忍（一〇七二―一一三二）に至つて初めて融通念佛宗と云ふ嚴然たる淨土教の一宗派が日本に開拓せらるゝに至つたのである、自分の見る所では融通念佛宗の如き矢張華嚴の事々無礙を實際的に宗教の上に應用したものと見るを得可きものであつて、獨り現象界有限界に在る個人の念佛が本躰界無限界の佛陀に感應することを說くのみならず、又志を同うする同行各人の念佛も互に融通し合つて念佛の功德無量無邊であると說くのが本宗の特色であるから、是れは畢竟果海圓融事々無礙を談ずる華嚴の哲理を宗教上の念佛に應用したに外かならないのである、それであるから本宗では彌陀所傳、融通念佛、億百万遍決定往生と云ひ、一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是名（これを）他力往生と云ふてをるのである、然るに融通念佛宗から更に一歩を進めて淨土教の他力的方面をもう一層鼓吹せられた高僧は法然上人源空（一一三三―一二一二）である、源空は初め叡山に學び、一日源信の往生要集に感悟し、唐土の善導が、一心專念彌陀名號と云ふことを說かれたのを基礎として、遂に斷然袂を奮つて聖道自力の法門を去り、易行他力の淨行に飯し、高倉天皇の安元々年（一一七五）選擇集を著して淨土宗を創め、尙ほその寂するに臨み一般普通の道俗の爲めに一枚起證と云ふ平易簡單なる宗意安心の規定を書き遺して遂に遽焉長逝せられたのである、こゝに至つて日本の淨土教は畧ぼその發達を成遂して來つたのである、法然の死後淨土宗は又各派に分裂せんとしてをつたが、この時に當つて一方では源空の高弟見眞大師親鸞（一一七三―一二六二）が淨土宗より出で、更に眞宗てふ一宗を開き、一遍上人智眞（一二三九―一二八九）は空也良忍に私淑し、更らに臨終即平生、平生即臨終、念々即臨終と喝破して、自他の位を捨て唯念佛するのが、淨土往生の正因であると說いて、時宗――詳しく云へば六時往生宗――を開始されたのである、然しながら日本の淨土教は實に親鸞に至つてその發達極度に達し、眞宗に於て初めて自力的臭味を全然除去したる純他力の法門を開顯することになつた、親鸞は信心正因、稱名報恩と喝破し、彌陀一佛の他力廻向の信心他力廻向の稱名の外は、一切他の行爲を雜行雜修の雜善として排斥し、往生淨土の正因は一に佛如來より與へらるゝ純他力の信心のみであると主張したところは、宛然アウグスチヌスやルーテルの唯信仰主義と同一である、獨りその信仰

論が期せずして佛基兩教が致を一にしてをるばかりでなく、眞宗が彌陀一佛に皈命して他の諸佛菩薩を頼むことを須ゐないと教へる邊は、また基督教ゴッドの唯一神教に類してをる、唯眞宗にては彌陀一佛以外の佛菩薩の存在を否認しないのであるが、基督教はゴッド以外には如何なる神の存在をも是認しないと云ふ一點は少しく二教の有樣を異にしてをる所であらふが、空海の眞言宗は秘密的多神教的祈禱主義（大日は法身佛で眞言宗の宗義は汎神教的多神教）の方面に日本佛教を發達させたものであつて、親鸞の眞宗は一神的他力的道德的（彌陀は報身佛で眞宗の宗義は汎神教的唯一神教）に佛教を日本化したものであらふと思ふ、それであるから眞宗は眞諦門では彌陀一佛に皈命して信心を以て淨土に往生すると云ふことを說くと同時に、その俗諦門では王法を旨とし仁義を表とすると云ふことを教へ、平常の道德實行は信心決定の後、皆な佛恩報謝の淨行と思つて履修せよと勸めるのである、親鸞に至つて消極的臭味を帶びたる釋迦の涅槃は、全く積極的なる淨土として愚俗皈托の宗教的憧憬の目的物と變つてしまつたのである、法然親鸞等に至つて一時上流の祈禱佛教として行はれたる最澄空海末派の貴族佛教は、平民佛教愚俗佛教と一變してしまつたのである、僧院生活の印度佛教は在家示同の日本佛教と化し去つたのである、殊に女人に同情し初めたのは法然の淨土宗、日蓮の法華宗にも見えてをるが、彌陀の誓願不思議に助けられて女人成佛を誓つたのは眞宗最も沈痛凱切である、獨り是れのみでない、眞宗は彌陀の本願は惡人正機であつて善人は勿論惡人迄も救ひたいと云ふのがその本旨であるに由つて、善人だも尙ほ然り況んや惡人をやと云ふことき、沒論理的の超倫主義をさへ稱道するに至つたのである。

親鸞に至て啖肉娶妻の風は初て公然日本佛教中に輸入されたのである、從つて親鸞自ら玉日及び慧信尼の前後二妻を娶り、眞宗の教義は東西兩本願寺代々の法主を經て、血脈關係と相並んで、連綿として今日に傳つて來てをる、固より高田派の樣に、親鸞の弟子眞佛、顯智に傳つた、法脈相承もあるが、是れは實に西藏の喇嘛教を除けば、日本佛教が、印度支那に見ることの出來ない、特異なる發達結果と云はなければならない、眞宗各派の所謂法主なるものは、西藏の喇嘛法王と同く、宛然西洋基督教國の羅馬法王の尊を以て佛教部內部に出現してをるのである、親鸞は高倉帝の承安二年に生れ龜山天皇の弘長二年に歿し前後九十年間（一一七二―一二六二）その教化は主として關東の僻陬に盛んであつた、親鸞の寂後は血脈相承に於ては、親鸞の孫如信之れを傳へ、八世道如（一四一五―一四九九）に至つて益々宗運を增進させ、北越にその根據地を定めて眞宗中興の祖となつたのである、然るに德川時代に至り、家康新に顯如の子光壽の爲めに、東本願寺を創建し（一六〇一）同く顯如の子光昭の系脈たる西本願寺に對立せしめた、則ち是れ今日の東西本願寺の起源で

ある、然るに高田派專修寺は、親鸞以來その高弟眞佛顯智に傳はつて、次第に法脉を相承して以て今日に至つたのである（勿論眞宗には現今十派あるが）。同じく他力的平かやうな工合に淨土教が法然親鸞等の力に由つて平易簡單なる日本的他力的平民宗として發達してをつた時に當つて、支那的自力的武士宗として現はれ來た一宗がある、是れ則ち鎌倉時代の禪宗である、淨土教が西方十萬億土の遠方に如來淨土を願望しつゝあるに反して、禪宗は直指人心見性成佛を說き、唯心の彌陀已心の淨土を說じて涅槃を手近の所に希求しつゝあつたのである、我國禪宗の起因は獨り鎌倉時代に初つたことではなく、既に道昭が唐土から法相宗を傳へて來た當時に在るのであるが、禪宗が一大宗派として我國に勃興して來たのは千光國師榮西（一一四一―一二一五）の入宋（後鳥羽帝の朝）と承陽大師道元（一二〇〇―一二五三）の入宋（後堀河の朝）とに初るのである、榮西に由つて臨濟宗は我國に興隆し、道元の力にて曹洞宗は嶄然たる日本の一家を成す樣になつたのである、禪宗が彼の愚俗の平民と同く、阿彌陀の木像の下に羅拜することを快しとしない鎌倉時代の武夫に、その易簡直截の法藏を開いてその安心立命の資となしたことは、實に國史の歷々證明する所であつて、北條時賴の道元及び道隆（一二一三―一二七八）に於ける、楠正成の明極禪師楚俊（一二六二―一三三六）に於ける、足利尊氏の夢窓國師疎石（一二七〇―一三四五）に於ける、その最も著名なるものである、北條足利の兩時代を經、應仁以後豐臣德川の兩世に至る迄、禪僧の簡切沈痛の警句は能く將軍百世の師となり、其端的直截なる問答は能く戰國時代の武夫をして陣頭に安心立命の臍を固めしめたのである、禪宗が一時五山十刹堂を並べ京師に鎌倉にその盛を極むるに至つたのは實に偶然でないのである、我國の禪宗は以上臨濟、曹洞の外に德川時代に至つて明僧隱元（一五九二―一六七三）が來朝して、山城の宇治に黃檗山万福寺を創設し、こゝに禪宗の一流黃檗宗が我が國に成立するに至つたのである。

こゝに又親鸞一遍の淨土教や道元の禪宗と相前後して、特殊なる日本的平民主義の二宗が天台の源流を汲んで興つて來た、そは淨土教が念佛を稱へることを勸むると同じ樣に題目を唱ふることを勸め、眞宗が純他力を說くに反して、全く自力的修行を攢けず、淨土教が彌陀を西方十萬億土に求むるに反して、娑婆即寂光淨土と敎へ、而かもその平易直接の法門であると云ふ點に於て、淨土、禪の諸宗とその步調を一にし、殊に在俗の敎化を旨としてをる點に於ては淨土敎と全くその軌を一にしてをる二宗である、今這種の宗敎を法華經に由つて新に開立した者は則僧日蓮（一二二二―一二八二）である、日蓮は折伏門に由つて念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊の四個格言―モハメッドのキプラン―を提供して他宗を誹謗し、法華日蓮宗と云ふ二宗を開いたのである、日蓮は丁度モハメッドの樣に天資狂熱自己所信の厚き、是が爲め言語過激に失した爲め、時に他宗の忌諱に觸れて、或は佐渡に或は伊豆

に流罪に處せらるゝに至つた時まさに蒙古襲來の危期に際し、我が國上下の人心は恟々として安からざるものがあつて、何んとなく鼎沸の有樣であつたから、日蓮は立正安國論一篇を草して、法華經の功德を說き、法華經の讀誦に非ずんば、國家の怨敵を折伏すること能はずとの意見を發表して、他宗以上に自宗の功力を稱揚し、之れを要するに日蓮の主義は南無妙法蓮法華經と唱ふるときは、その題目の功力に由つて、如何なる下根劣機の凡夫も、直ちに成佛し得るものであると云ふのであつて、法華の題目そのものを神化し―敎主釋迦の理想化と共に―題目の中に、万善万行の大功德がすつかり籠つてをるから、一たびそれを稱へさへすれば、如何なる智者も如何なる愚者も、皆な等しく題目に助けられて成佛することが出來るとの敎へたのである、日蓮は斯かる易簡直截の法門を說いて、淨土敎が一たび念佛すれば淨土往生が出來ると主張する平易なる敎理と同じ樣にその宗旨は共に平民的在俗の宗敎であるが、又日蓮は眞宗などと同く日本特有の性質を具へ、眞宗が王法爲本と說くと同く、先祈國家須立佛法（立正安國論）と大聲疾呼して、宗敎上に國家主義を主張し、眞に日本的の新佛敎を組織したのである。

鎌倉時代の新佛敎は皆な平易簡明を旨としたものであつて、前代の佛敎の樣な學解的佛敎でない、禪宗と云ひ淨土諸宗と云ひ日蓮宗と云ひ皆なさうである、然るにこの中で更に分つて考ふれば、禪宗は武家佛敎であるし淨土諸宗や日蓮宗は平民佛敎である、從つて幾多の禪僧が武士を感化し、武將治世の要日常道德の訣を、所謂禪宗端的の簡文字中に敎示した所の事實は、史上枚擧に遑ないのである、應仁以降海內打ち亂れ文學地を掃つて跡を絕つと云ふ有樣になつたときにも、又武人の無學を補つて文字ある者は日本國中獨り禪僧のみであつたと云つてもよい位であるから、足利時代の外交文藝は一に五山禪僧等の手に由つて維持されてをつたと云はなければならない、然し彼れ等も足利將軍義滿義政等榮華の夢に釣り込まれて、榮西道元以來の元氣はいつしか銷沈してしまひ、苟直偷安恬淡無爲一世を醉生夢死し去ると云ふ弊に陷ゐり、一方では戰國亂離の世、僧徒と雖兵甲を帶びて雌雄を武人と競ひ、僧侶の持戒安居の道場たりし寺院を以て、兵戈相見うるの城壁となし、橫暴云ふに忍びざる有樣を演出するに至り、この間西洋よりは天主敎來つて（一五四九年即ち天文十八年）佛敎の敎壘を偵ふと云ふ風になり、僧侶は國家の爲めに計つても寒心す可き結果を生じないとも云へない危期に頻して來たから、我が國の爲政者亦こゝに省みる所があつて、九州地方の侯伯や織田氏に由つて一時歡迎せられた天主敎も、天正慶長の交に至つては秀吉及び家康之れを嚴禁することゝなり、（一五八九―一六一一）德川氏の烟眼なる外敎を抑壓するには佛敎を利用するに若かざることを觀破し、佛敎に食はしむるに利を以てし、寺院に特權を附し、僧侶に位階を與へたからして、德川時代の中葉に至つては僧侶は偸安是れ貪り苟且是

れ事とし、從て佛教の勢力は萎靡沈滯して遂に不振の極度に達し、各宗僧侶は時々俗權を宗門上に得んとする小ぜり合を爲すに過ぎなくつて、又新宗派の興隆の如き得て見る可くもなかつたのである。

斯樣に佛教が沈滯不振に陷り漸く衰が生ぜかゝつて來た秋に當つて、一方では又德川氏が篤く儒教を用ゐて治國の要具としましたから、既に應神天皇の時百濟の王仁來朝以來、聖德太子を初め代々の文章博士菅江二家に由つて傳はり來つたる儒教思想は、當代に於て一時に煥發し、遙に西洋十五十六兩世紀に於ける文藝復興と相照應し、近くは佛教の教壘を摩してその教敵を威壓し、儒學の盛んなる前古比類なき偉觀を呈したのである、さうしてこの德川時代に於ける儒教中その牛耳を執つたものは朱子學であつて、朱子學と江戸幕府との關係は丁度西洋の中世時代に於けるスコラ哲學が、基督教會の御用學であつたと同じ樣な外形上の關係を有つてをりました、則ち德川時代に於きましては、朱子學は幕府の官學でありまして藤原惺窩（一五六五―一六一九）林道春（一五八三―一六五七）はこの派の翹將であつて、室鳩巣（一六五八―一七三四）柴野栗山（一七三七―一八〇八）古賀精里（一七五〇―一八一七）尾藤二洲（一七四五―一八一三）の如き又皆な程朱の學を信奉して、盛んに性理の說を稱道してをりました、然るに之れと相對して近江聖人中江藤樹（一六〇八―一六七八）熊澤蕃山（一六一九―一六九一）等は王陽明の良知說を奉じて別に一家を成し、藤樹は實行を重んじましたけれども、又深く哲理思辨に長じてをりまして支那の陽明學に見ることの出來ない一種異色ある日本の陽明學派を組織し、蕃山又德行經濟の實用に精はしく、三輪執齋（一六六九―一七四四）佐藤一齋（一七七二―一八五九）大鹽中齋（一七九四―一八三七）佐久間象山（一八一一―一八六四）吉田松陰（一八三〇―一八五九）等の名士相尋て陽明學派から輩出しました者その算決して少なくないのである、その外古學派の鼻祖たる山鹿素行（一六二二―一六八五）の識見一世に冠絕し古今獨步の慨ある、伊藤仁齋（一六二七―一七〇六）及び東涯（一六七〇―一七三五）父子に至つては朱子陽明を以て儒教本來の旨趣に合せざるもの多しとなして、山鹿素行（一六二二―一六八五）の古學派を紹述大成し、荻生徂徠（一六六六―一七二八）亦古學派の中に於て別に一機軸を出して古文辭を稱へ、新井白石（一六五七―一七二五）賴山陽（一七七四―一八二七）の史論に巧みなる貝原益軒（一六三〇―一七一四）の德行に厚き、その他考證學派折衷學派と稱せられて、當時に行はれたもの又少くないのである、然し是れ等當時の儒者は、或は往々宋儒陽明の說に心服しないにしても、畢竟孔孟二子の圖範を出づることは出來なかつたので、孔孟に彼れ等究竟の理想であつたのである、然し又彼等は一も二もなく支那の儒教をそのまゝ直譯したのみではなくつて、支那の儒教をして日本化せしめ、日本風の教學に變更し化成し來つたと云ふことは文疑ふ可らざる事實である、古學派の

如きは云ふ迄もなく、彼の朱子學派と云ひ陽明學派と云ひ、共に我國に發達したものは皆な支那に見ることの出來ない特異性を有して來てをるのである、若し日本人を支那人に比すれば、日本人は一層經驗的であり實際的であるからして、德川時代に於ける日本儒教の發達は亦決してこの風を免れることが出來なかつたのである、德川時代の碩學鴻儒と呼ばるゝ所の人々は、無論一方では形而上學の問題を全く蔑視して、之れが研究を東閣し去つてしまつた譯けではないが、その主なる研究題目は、倫理學上の問題である、宇宙問題ではなくつて人生問題である、自然界の說明ではなくつて道德界の解釋である、物質上の學問ではなくつて精神上の學問であつたのである、これは丁度佛敎が日本に渡つて來てからは、曾て印度に於て見た如き、虛無寂靜の空理をふり捨て、又支那に發達した如き幽玄高妙なる哲學の理論を離れて、最も切實に人生日常の行爲を督し、無智蒙昧の民衆をして能く心を安じ命を立せしむるを得る樣な、極めて實際的なる日本諸宗と變形し來つたと同一である、そこで心學の如きは陽明の良知說などに禪味を加へ神道の旨趣をも引き入れて、そを最も通俗的に說いたものであつて、石田梅巖（一六八五―一七四四）に初まりその後手島堵庵（一七一四―一七八二）柴田鳩翁（一七八三―一八三九）等に由つて大に民間に流布され、心學道話の書は德川時代に於ける民間道德の通俗的經典であつた、武士道（鎌倉時代に淵源し德川時代に至つて山鹿素行大に之れを發揮したのである）の如き一種の德敎も又この間にこの根底を固うして來つたのも又事實である。

然しかう云ふ風に德川時代に於ける日本の儒敎は、日本てふ一種獨特の異色を帶びて發達して來たのであるが、兎に角儒敎と云へばどうしても支那が本家本元であつて、孔孟が御本尊樣であるのだから、到底彼れを尊んで此を疎じ、甚しきに至つては徂徠の如く、自ら我れを以て東夷と輕んじ、彼れを尊んで中夏と稱して平然怪まない者も出來てくるし、當時の學者が漢土に心醉するの甚しき、山崎闇齋が一日その群弟子に問ふて、若し孔孟二子が軍を率ゐて日本に攻め來るも尙ほ能くその國敵に當つて孔孟に刃向ふや如何と云ひしに對して、その答に躊躇する暇さへ生じ來り、曾て聖德太子が親ら書を裁して日出處の天皇致書日沒處の天子無恙と稱して彼の土に送り、日本と支那との彼我を對等視ししたる自尊自重の卓見有る者一人もなく、菅公の和魂漢才の眞旨を咀嚼しつゝある者の如きは眞個に寥々として晨星も啻ならずと云ふ危機を現出するに至つたのでありますから、こゝで國粹發揮の必要起り、我が國躰を基礎にし、我國古來の道德を鼓吹して、冒靈の幸ふ神國の長所を發揮しやうとした、一群の人々があつた、是れは則ち和學者に濫觴したる神道諸家の勃興である。

勿論我が國の神道は佛敎渡來以前に於ては、天然崇拜と祖靈崇拜との二者から混

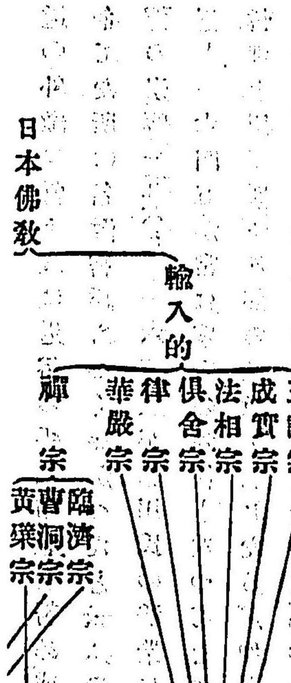
成してをる一種の自然的宗教であつて、まだ倫理的宗教になつてをらなかつたことは、前既に云ふた通りであるが、その後佛教が渡來し、行基、空海の樣な名僧が佛教を我國情に適合させて弘通しやうと努めた結果、神道と佛教とは著るしく合同せられ、此に本地垂跡說を基礎とした空海の兩部神道最澄の一實神道などが出來上つたが、その後ちこれ等の末流は種々の弊害惡風が纏綿して、腐敗に腐敗を生じて來たから、そこで南北朝の初め北畠親房（一三五四歿）卓拔の識見を以て、佛教に汚がされない而も印度の五大說支那の五行說を應用して、純乎たる一家の神道說を建設しやうとした、然しその後ち戰國亂離の世、更らにこの方面の進歩を見るに至らなかつたのであるが、德川時代になつてから、一方には學問復興の爲め、また一方には儒教と佛教に對抗する爲め、俗の契沖（一六四〇―一七〇一）に淵源して荷田春滿（一七〇六―一七五一）本居宣長（一七三〇―一八〇一）等に由つて和學が再興されましたから、此に敗亂の大和魂と云ふことが大に人々の注意を惹く樣になり、之れに連れて我國古來の神の道は益々その光輝を發揚することゝなり、平田篤胤（一七七六―一八四三）に至つては佛教と分離し儒教と手を缺ちたる純粹無垢の復古神道が興こされて、神道本來の面目に一段の光彩を添え來つた趣があつて、實に神道の氣燄萬丈と云ふ慨があつた、然し又更にこの平田等の稱へた復古神道に儒教思想を加味したのは水戸黃門光圀の流を汲んだ藤田彪（一八〇六―一八五五）會澤恒藏（一七八二―一八六三）等の稱へた一種の水戸流の神道であつて、則ち儒教的神道とでも云ふ可きものである、然し復古神道は平田篤胤の樣に濫に史實を重んじ考證的學究的に流れ、水戸一派の神道また多少學識を具へた士大夫の間にしか行はれ得ざる性質のものであつたから、幕末に至つてからは更に一般人民に適する樣に神道中に、佛教中の淨土、日蓮、禪の旨趣を交へた平民的神道が興つて來ました、則ち梅辻規演（一七九八―一八六一）の神習教即ち烏傳神道、井上正鐵（一七九〇―一八四九）の禊教、黑住宗忠（一七七九―一八四九）の一本教即ち黑住教の如きはその主なるものであります、尙ほ復古神道と共に、吾人の永くその記憶から脫し去つてはならないものは、之れを先にしては吉川惟足（一六一六―一六九四）の唯一神道、出口延佳（一六九〇沒）の社家神道と、之れを後にしては山崎闇齋（一六一八―一六八二）の垂加神道である、吉川惟足は鬱者室町時代に出てたるト部兼俱が稱へた唯一神道に滿足しないで、保科正之の保護を得て宋儒の理氣論を利用し、以て唯一神道の理論を高め、敬神と忠君と相待つ可きことを主張して唯一神道の上に一生面を開き、出口延佳は易の太極陰陽の說と忠君敬神の教とを合同したのである、山崎闇齋は僧侶より出で中頃儒教を研究し、遂にその結果垂加神道なる一種の神道を稱へ出して神道の道德的方面を發揮し、德川時代に於て主として佛家に當つたのである。

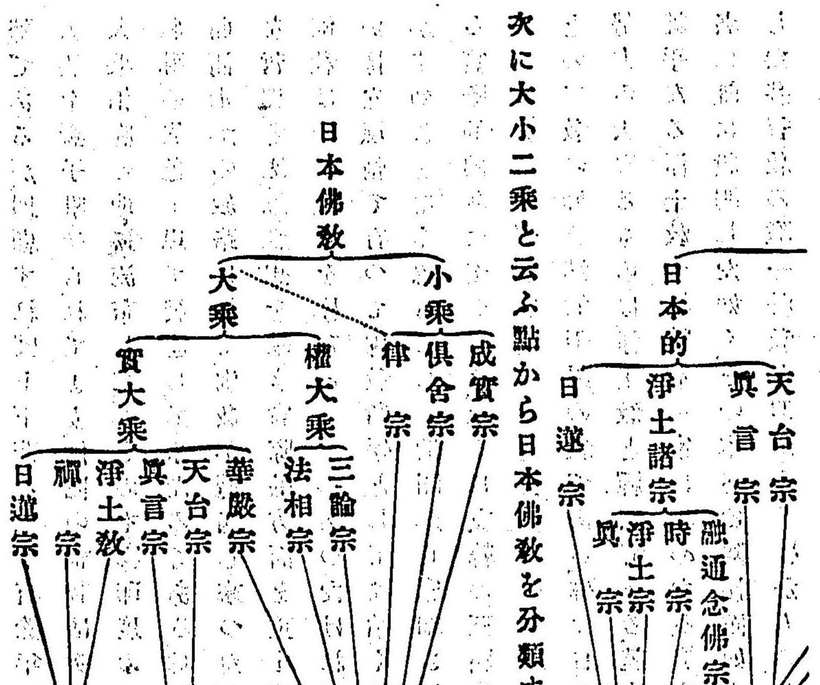
以上平田吉川山崎等の神道は皆な我國古代の宗教に一生面を開いたものに相違

ないけれども、そは唯儒教若くは佛教に敵對する丈けの準備に過ぎないので、當時封建鎖國の空氣は人心を蔓靡さしてをつたから、到底神道を以て世界的普遍的宗教の位置に高めんとするが如き偉大なる企圖が出なかつたと云ふことは勿論である、然るに翻つて佛教の側を見るに一方では儒者と他方では神道家とが、交々起つて彼の封建政治の殊遇に狃れ桃花源洞に太平の懶眠を貪つてをつた形式佛教化石佛教を攻擊してその包圍攻擊を初め、排佛的氣焰は頗る高くなつて來たのを好機として、富永仲基は出定後話を著はし（一七四五）服部天游（一七二四―一七六九）は赤裸々を作つて、佛典本文批評の端緒を開き、その結果大乘非佛說論を稱道したのである、之れに對して淨土宗の僧文雄眞宗の僧湖音の如き又書を著はして之れに答ふる者があつたけれども、概して德川時代に於ては僧侶一般の風潮は封建時代階級制の餘弊を承け、既得特權の保護に安んじて敢頽その極に達せんとし、鎖國の禁は豪邁なる僧鳳潭（一六五七―一七三八）の如き者をして一たび其印度行に由つて釋迦佛陀の靈場に參拜せんと企てしめたけれども、幕府は國禁として之れを許るさないと云ふ因循姑息の風であつたから、佛門の龍象も爲めにその驥足を伸すに所なく、當時何か事あれかしと思つて風雲に乘ぜんと期してをつた英雄は脾肉の嘆に堪へないと共に、駿馬槽櫪の間に老うるの憂に苦悶してをつた者も全く無きに非ずであつた、然しこの間に立つて或は將軍に帷幄の中に參し、或は儒教神道の外敵に當り、或は道俗の平民布教を努め、或は赤手僧風の頽敗を挽回しやうと企てた所の名僧智識も全く無かつたと云ふのではない、彼の天台の天海（一六四三歿）禪の崇傳（一五六九―一六三三）が德川氏の鴻業に與つて力ある如き、澤庵禪師（一五七三―一六四五）が常に家光の師傅となつてをつた如き、華嚴宗の鳳潭が深奧の佛教哲理を以て屢々外部の敎敵を屈したるが如き、遠く一休（一三九四―一四八一）が危言奇行、平民の敎化に努めたのに倣つて、禪理を通俗の言語に直し、禪宗の自力門に出つて日常の平民道德を敎へて念佛の他力門に對峙した白隱（一六八五―一七六八）の如き、鐵眼が二ぴ大藏經改版の資財を散じて窮民を賑はし佛陀の博愛慈悲の敎を躬行した如き、當時僧風の頽敗を既倒に回へさんと熱哀して遠く梅尾の明惠上人高辯（一二三二歿）の故事を理想として、持戒是れ身心の良藥と喝破して戒律を復興せんとした日蓮宗の元政（一六二三―一六六八）眞言宗の淨嚴（一六三九―一七〇二）慈雲（一七一八―一八〇四）曹洞宗の指月（一七六四歿）の如きはその著名なるものであつた。

是れ迄述べました所で、大略奈良平安の兩朝に於ける佛教から延いて鎌倉時代より德川氏に至る日本佛教の發達を一瞥したのであるが、讀者に支那佛教の發達を研究した時に、その形勢を一目の下に明瞭にするの目的で分類表を掲げたが、今又日本佛教に關する分類を左に示めして置かうと思ふ、この表に示めした輸入的佛

教と云ふのは單に支那から輸入して來たばかりで、その教理日本に來て餘り著しく發達しないものを云ふので、奈良古京の六宗の如き、又鎌倉時代の禪宗の如きはさうである、之れに反して元來支那から輸入したのであつても、日本へ來て餘程その趣が變つた宗旨がある、それは最澄の天台宗空海の眞言宗の如きもので、彼の最澄の天台宗は純粹に支那風の天台を輸入して來たばかりでなく、最澄の手腕に由つて支那天台に密禪、戒の三者を混合したものであるし、空海の眞言宗に至つては、支那から持つて來たにしても、全く日本の地に來のて初て一宗の形を成したのであるし、殊に淨土日蓮に至つては全く日本で起さり日本思想の根底に立つて佛教を解釋し、さうして一宗を開いたものであるから、是れ等は皆な日本に發達した佛教であるそれであるから是れ等を總て日本的佛教と云はふと思ふ、今この標準から日本佛教を分類してみれば左の表の如くなるのである。




次に大小二乘と云ふ點から日本佛教を分類すれば左の通りである。

以上述べ去り述べ來つた所の者は、鎌倉時代に一時に日本的新佛教が勃興して以

來、應仁以降戰國兵亂の餘を承けて、德川氏偃武興文の世に至る迄の佛教發達の大勢であるが、回顧すれば上下茫々二千有餘年の昔、釋迦が閻浮の地靈山の頂に、その大法を獅子吼せられてより、佛陀の福音は次第に東流し、支那三韓を經て我が日域大乘相應の地に流布し來り、その本國印度の地にも曾て見ることの出來ない樣な特殊の異色を以て發達して來たのである、殊に支那三韓を經て日本に至る間長汀曲浦永がの旅路に於て、佛教が遭遇し來つた發達の歴路を考ふるに、日支兩國の樣な哲理の沈思默想を缺き實際的方面を重んぜる人民の間に於て、その學解的理論佛教は一時隆盛を極むることがあつたけれども、そは恰も槿花一朝の榮に過ぎない樣な風情で有つて、佛教哲學としては姑く置き、宗教としては餘り永く社會を動かす如きことなく、忽ちにして世間から忘却され終る樣になつたが、その易簡直接なる實際的佛教に至つては、永く日支韓の三國を通じて、宗教として實際の勢力を占めつゝあるので、そは我國の眞言、淸朝の喇嘛の如き、秘密佛教でなければ、禪と淨土との二教の如き、端的平易の教である、殊に日本に於ては現今の佛教として實際に勢力の大なるものは、淨土教と云ふ中に於ても、その最も純乎たる淨土教の精粹を一家に集めたる眞宗に在るのである、眞宗に至つては嚮者に既に說明した如く、その本尊の阿彌陀如來の性質は、猶太に起つて泰西に勃興した基督教の唯一神教と似かやうばかりの發達をしてをるので、今姑く眞宗と基督教の理論的說明の方面を見ないで、その實際的宗教として、道俗の間に行はれてをる方面のみを考へたとすれば、佛基兩教は宛然一にして二ならずと云ふも何人もその間に異論を挾むことの出來ない迄に酷似してをるのである、それであるから今や一大宗教的天才の出るあつて、この兩大宗教を融和合一しやうとすればそは眞に一擧手一投足の勞のみである、そは實に彼の古代に於て僧行基が天照太神を以て毘盧遮那佛の應現と說いて神佛を習合したより尙一層容易の業であらふと思はるゝのである、然し今日の基督教徒は云ふてあらふ、元來無神論であつた佛教が眞宗に迄發達し來つたのは、是れ取りも直さず、佛教が一歩々々に基督教の一神觀に近かづいて來たものであつて、眞宗若し一轉せば基督教となり、基督教は嚮昔歐羅巴の政界を卷席した如く、亞細亞の佛教國をもその中に併呑するに至るであらふと、然し又佛教徒は更に云ふてあらふ、基督教が外觀丈けでも眞宗に似てをるのはその最も利益ある所であつて、そが將來人智の進歩した國民間の信仰を維持しやうと思ふならば、神話的なるゴッドの外にその裏面に進んで眞宗が有する如き高尙幽遠なる眞如涅槃の理論的根據を得てこんければならない、將來恐く基督教はこの哲理的根據を佛教から假り來るであらふ、さすれば最早その時に於ては基督教は基督教ではなくして、全く佛教中の一派となるのである、眞宗に同化してしまふのであると、嗚呼是れ等の諸說は果して何れが眞理なるか、將來の宗教は

果して基督教に併呑さるゝか、將た將來の基督教は果して佛教の中に融會し去らるゝか、將た又異常なる一大天才の出づるあつて、是れ等二教は尙一層高い立脚地から融合調和せられて新宗教として實現するに至るか、是れ等の問題に對しては單に今諸宗教發達の叙述を目的としてをる本書に於て余の私解を與ふるの餘裕はないのであるが、是れ等の問題を解決するの資料は疑ひもなく余が以上の叙述からしてその大半を得可きのであつて、此に至つて宗教を發達史的に研究するのは、死んだ學問ではなく、永遠に生命ある活學問たることが明瞭になつたであらふ、是れ自分が屢〻宗教學若くは宗教の發達史的研究は腐儒者流の閑事業ではないと公言した所以である。

かう云ふ風に宗教の發達史的研究と云ふものは非常に趣味ある活きた學問であるのだから、それは獨り斯學の專門家に必要であり又興味あるばかりでなく、苟も實際宗教の事に當つてをらるゝ世の宗教家を始めとして、社會人心の趨向を支配することを以てその任としてをらるゝ教育家政治家倫理學者等に取つては、頗る必要なる學問であらふと思ふ、然るに西洋ではこの學問が開け出してから、まだ半百の年所を閱る位に過ぎないのであるが、彼國學者の精勵なる基督教の研究は勿論、印度支那日本等の諸宗教の研究にも手を盡して、昨今では大分佛教や儒教や道教や神道などに關する材料が殖えて來たのは、實に斯學研究の爲め非常に賀す可き事であらふと思ふが、唯一つ西洋で以て斯學の研究に不便を感じてをるのは、目下尙ほ基督教の頑迷なる思想が社會の一方に蟠屈してをつて、動もするとこの頑迷者流からして、宗教の科學的研究が妨げらるゝと云ふ一事である、然るに幸にも日本ではかう云ふ點は極自由でありますから、宗教に關してどんな自由な說を發表しても差し支へないのである、この點は日本の宗教學者は非常に幸福であらふと思ふ、否な獨研究上に日本の宗教學者はかう云ふ便利を得てをりますばかりでなく、私の考へでは我國は今や實に世界宗教の寶庫であると云つてもよい位に宗教の材料が蝟集してをるのであると思ふ、その譯は佛基兩教の如き最も發達した二大宗教が今現に我國に存在して行はれてをるばかりでなく、儒教あり道教あり神道あり、その外神儒佛道に關する典籍の豐富なる、實に我が國を措いて又他にその比を見ることの出來ない盛況でありますからのことである、是れ私は我國を以て世界宗教の一大寶藏であると申した譯け柄である、斯かる便利な都合の好い邦土に生れた者は、十分さう云ふ國に生れた甲斐がある樣にその責任を盡し、學者相率ゐて宗教の科學的研究を勵み、世界の文運に相當の貢献をする樣心掛けなければならないことゝ考へる、さうして他日完全なる宗教學の組織が、西洋人に先鞭を着けて、我國人の手に成り上つたならば、何事も彼れ西洋人の背後に落つると云つて冷笑されて居る東洋人の侮蔑を洗ひ清めることが出來、實に我國宗教學者の面

目を施すことゝなり眞に快心の事業であると思ひます、そこで若し私の此講義も多少とも此方面に向つて、貢献することが出來ますれば、自分に取つては非常に滿足に感ずることであります。

## 第二十章　結　論

以上章を重ねて述べ來りました所に由つて、東西諸宗敎が發達消長して行く有樣と、又その全世界人文史上の舞臺に於て、如何に影響し如何に關聯し合つてをつたかと云ふ大勢を比較敍述しましたから、今その結論として是れ等諸宗敎が、劣等から高等に進む發達の順序を標準として分類表を作りまして、學者の便に供さうと思ふのであります。

私は先づ宗敎を大別して、劣等人文敎と高等人文敎との二つと爲します、是れは主として、名も何にもない精靈とか呪物とかトテムとか云ふものを以て、宗敎の對象としてをつた時代と、ツォイスとかアポローンとかエホヴとかドヤウス、ヒタルとか彌陀とか大日とか云ふ樣な、神にちやんと一定の名稱が出來て來た時代とに由つて大別したので、前者は神格不確立時代の宗敎であつて、後者は神格確立時代の宗敎である、若し前者を自然敎と云ふならば後者は人文敎――前に用ゐた人文と云ふ語の意味より狹意の――と云つても善いのである、そこで又この高等人文敎を神話的（寫象）と倫理的（寫象）との二つに分たうと思ふ、是れはその時代の宗敎中に含まるゝ倫理思想の優劣高下から來たので、ホメーロスの神話宗敎や神道の如き神話時代の宗敎は、その倫理思想卑く且つ劣つてをるし、之れに反して回々敎や佛敎の如きは、倫理道德の思想が、一歩進んで高度の表現をなしてをるから、倫理的と名けたのである、して神話的宗敎は更に崇拜の對象たる神の性質上單一（交替）神敎即ち假一神敎と多神敎と拜一神敎即ち國民的唯一神敎の三者に分ち、多神敎の中でも又その神々の間に上下貴賤の別が嚴然として立つてをるものと、まだ立つてをらぬものとに由つて、無組織的と有組織的との二に分たうと思ふ、然るに又前に云ふた倫理的宗敎は、その倫理思想の發達に照して、尙更に之れを小分し、半倫理的と純倫理的の兩者としやうと思ふ、詳しくは左表に徵して之れを知り給へ。

- （一）劣等人文敎
  - 一、物活敎
  - 二、天然崇拜
  - 三、精靈崇拜――祖靈崇拜
  - 四、咒物崇拜
    - （甲）對象――天然物
    - （乙）對象――人工物
  - 五、トテム崇拜

- 宗教
  - (二)高等人文教
    - 一、神話的
      - (甲)單一(假一)神教……粹陀の宗教
      - (乙)多神教
        - (イ)無組織
          - (い)スラヴ人種の宗教
          - (ろ)回々教以前の亞剌比亞の宗教
          - (は)道教
          - (に)支那古代の宗教
          - (ほ)古代羅馬の宗教
        - (ロ)有組織
          - (い)アッシリア・バビロニアの宗教
          - (ろ)古代の神道
          - (は)ゲルマン族(北歐民族中の)の宗教
          - (に)埃及の宗教
          - (ほ)ツアラツシユトラ以前の波斯の宗教
          - (へ)希臘及び希羅宗教
      - (丙)拜一(國民的唯一)神教……イスラエル(モーゼ)の宗教
    - 二、倫理的
      - (甲)半倫理的
        - (い)猶太教(豫言者以後の宗教)
        - (ろ)婆羅門教
        - (は)回々教
        - (に)ツアラツシユトラ及び其以後の波斯教
      - (乙)純倫理的
        - (い)イスラエルの豫言者の宗教
        - (ろ)基督教
        - (は)佛教